

雪原の希望

矢神敏一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は帝都造営先生（ID：19074）との共同製作です。

1970年。北樺太、尾羽市。

北の果ての、その更に果てのこの地は、今まさに変革の時を迎えていた。

鉄道に命をささげた11人が、雪原に11本のレールを通す。

そのレールが交錯した時、運命の列車は動き出し……。

列車はもう、止まらない。

毎週最終日曜日に更新します。

目次

はじめに	1
始動	
こんにちは、尾羽	6
～作業前～起動	17
3. ～作業前～入替：点検よいか？	27
4. ～作業前～入替：確認よいか？	40
5. ～作業前～入替：進路よいか？番線確認よいか？	54
第一仕業	
6. ～第一仕業～1レ：出発進行	70
7. ～第一仕業～1レ：第一閉塞、進行	82
8. ～第一仕業～1レ：第二閉塞進行	95
特9. ～第一仕業～1レ：雲行き怪しく。前方注意	113
9. ～第一仕業～1レ：雲行き怪しく。前方注意	129
10. ～第一仕業～1レ：誤算	140
11. ～第一仕業～1レ：前途多難	153
12. ～第一仕業～1レ：異音検知	159
13. ～第一仕業～1レ：見通し不良	164
14. ～第一仕業～1レ：栄光の陰に	172
15. ～第一仕業～1レ：前途には	182
16. ～第一仕業～1レ：尾羽とは	189
17. ～第一仕業～1レ：発鉄春の挨拶運動	197
18. ～第一仕業～1レ：突放	205
19. ～第一仕業～1レ：ワキ800	212

20.	↳ 第一仕業↳1レ：不審	219
21.	↳ 第一仕業↳1レ：尾羽営業所	226
22.	↳ 第一仕業↳1レ：家族学	231
23.	↳ 第一仕業↳1レ：ワキ8000	237
24.	↳ 第一仕業↳1レ：先行	243
試9051M	【臨時一番外編】 果てのトロツコを求める人々	

はじめに

「日本の最果てで生きる　〜二つの災厄を乗り越えた街、尾羽〜」
(白井敏則　久留里美里　三波純一　遠坂博文　著　　北方談々新書)

ここに、雪の白いヴェールに閉ざされた街がある。人はこれをオハと呼んだ。

筆者は2015年の5月に、その尾羽を訪れてみることにした。かつてに比べ、尾羽への道のりは楽になった。

1970年に開通した北海道及び樺太の高速鉄道に加え、両者を結ぶ宗谷稚泊トンネル(1975年開通)、更には北海道と本州を連絡する青函トンネル(1986年開通)によって、現在は東京から尾羽までの直通の列車が運行されている。

東京駅から、寝台特急「雪原」に乗車する。東北行夜行が上野から出なくなつて久しい。帝都テロ後に再建された丸ドーム屋根を見ながら、列車は東京を後にする。

翌朝には札幌に到着する。そのまま北海道の恵まれた高規格線路を走り抜け、旭川、稚内、新大泊と続く。

新大泊からはいよいよ樺太だ。樺太の経済・政治の中心地豊原を抜け、まだ白い樺太の大地を駆け抜ける。

壮大な光景の奥に広がる夕日を眺めながら農繰来(現：農繰木)に到着。路線はここから北樺太鉄道に入り、終点の尾羽には夜半の到着だ。

24時間超の旅路の果てに、日本の果てにたどり着いた。街並みは、もうすでに災禍の痕を感じさせない。

筆者は関西の人間として、この地に来ると、どこか懐かしさと、そして胸から突き上げてくる慟哭のようなものを抑える事が出来ない。この地は、我々と一緒に立ち上がってきた街なのだと、駅前デパートにかかった「ありがとう」の横断幕が教えてくれる。

この地を一躍有名にしたのは、1975年の樺太紛争だろう。革命戦争期のソ連樺太侵攻を思わせる、衝撃的な紛争だった。

そして、この地を日本人にとって忘れられない街にしたのは、1995年の阪神・北樺太ダブル大震災だ。

一月に神戸で起きたばかりの大震災と同じものが、5月末の樺太に襲い掛かった。

1995年5月28日22時3分55秒、江見津付近を震源とするマグニチュード7.2、最大震度6強の地震が発生した。

震度の割に被害は甚大で、大規模な土砂災害、広範囲の液状化、揺れで街ごと土に還ったところもある。灰燼に帰した故郷を報道へりから実況した女性アナのあの絶叫を、我々は今も忘れる事が出来ない。

持てる国力の過半を関西復興に当てていた日本にとって、これはあまりにも衝撃的かつ困難な出来事であった。

つまり関西と樺太は、ほぼ同じ時期に、未曾有の国難に直面することになったのだ。

この困難に際し、共に悲しみを負い、共に苦しんだ関西と樺太は、復興に向けて共に手を取り合い歩むことになる。

その象徴ともいえるのが、今私の目の前に鎮座している、この特急である。

283系。もとは大阪から紀伊半島へ抜ける阪和線特急「くろしお」に使用されるはずだった車両である。

車両不足によって要員輸送が滞った樺太の為に、未だ混乱のさなかにある関西地方の中でも被害のなかった大阪方面から、救援として差し向けられた車両である。

この車両が樺太に来た時のことは、今でも忘れない。車体側面に、横断幕が掲げられたのだ。

「共に歩もう KANSAI⇕KARAHUTO」

この車両は、今日5月28日をもって北樺太鉄道線から引退し、故郷大阪はNR日根野電車区へと戻るのである。

奇しくも地震発生から20年の節目である。

22時3分55秒。地震発生時刻と同時に鐘が鳴り響いた。街全体が動きを止め、黙祷をささげる。

そして、22時5分、283系による最終列車は警笛高らかに尾羽の駅を5分遅れで去った。きつと、あの俊足ならば、終着駅に着くころには定時だろう。

283系が元の阪和線へ戻るに至った経緯を、現社長の綱島太郎氏はこう語る。

「地震発生から5か月後、一部復旧の目途が立ったのはいいものの、肝心の車両基地が液状化を起こし車両が確保できない状態でした。その際に、当時の幸谷社長が当時の国鉄関西鉄道管理局より貸し出していたのが、この283系です。貸し出しの条件はひとつ。『復興したら還してくれ』。今がその時です」

地震の影響で大幅に線形が変わり、元のまっすぐな線路から曲線が多く含む線形へと変更を迫られた。これにより最高時速も一時は大幅に下がった。

そんななかで、紀伊半島の複雑な地形を攻略するために作られた283系は、さぞ活躍したことであろう。

極寒地対策をしない状態で入線した車両のため、雪が降ると運用から降ろされた。それでも、夏の間が増える需要にしっかりと対応して見せた、この特急のすばらしさは、もはや語るまでもないかと思う。

さて、長くなったが本題に入ろう。

地震から20年、尾羽の中心部は完全に復興し立ち直りを果たしている。

だが、街はずれに行けばまだ随所に復興がなされていない箇所がある。

しかし、これは計画的なことなのである。

この街は、災害や紛争などの災禍の度に形を変えながら生き残る。そういう風に設計されているのだ。

その変革を担ったのは尾羽市内電車である「北部樺太開発鉄道」。通称、発鉄である。

本土にお住いの読者には少し、聞きなじみのない名前だろうか？もしかしたら北海道や南樺太にお住いの若い読者も聞きなじみがないかもしれない。

この鉄道は1970年3月21日から1976年4月23日までのたった6年1か月の間だけ存在した、日本最北の鉄道なのである。地方によくある、言い方は悪いが泡沫鉄道のうちの一つだ。最期は、経営難により幹線鉄道たる「北樺太鉄道」に吸収される形で解消している。

その発鉄はしかし、この樺太全土やこの日本、ひいては世界に影響を与えた鉄道なのである。

小さなところで言えば、日本初の本格的な第三セクター鉄道である。かなり特殊とはいえ、第三セクター鉄道の成功は地方自治体に大きな衝撃を与えた。

しかし一番大きな衝撃は、尾羽全土を巻き込んだ都市計画だろう。かの大計画の存在を密かに伝えられた発鉄は、計画遂行の表の役者として道化を演ずるに至った。

近年の情報公開に至っては裏の主役たる尾羽市の方にスポットが当たり、その実態をつかみ切れていない読者も多いであろう。

本書では、尾羽が「自己再生・自己鍛造型都市」へと至った経緯を、忘れ去られた主人公「発鉄」の視点からご説明したいとおもう。

余談であるが、筆者の一人はその発鉄の社員だった。そして、社長である越谷卓志氏と、そして共に尾羽の都市開発に大きな影響を及ぼした宇佐美陶冶氏の下で働いていた経験がある。

先述の通り、北部樺太開発鉄道は1976年4月23日をもって北樺太鉄道に吸収された。本書の取材を進めるにあたって、未だ街の

人々が市内電車の事を「発鉄」と呼んでくださるに、非常に感慨深いものがあつた。特にここに記しておきたい。

閑話休題、編集者も含め全員が当事者である。どうか、なぜ尾羽が未だ健在なのか、そして、そこから得られた知見を、容易なことではないと思うが、日本の未来への礎として頂ければ、幸いである。

尾羽の、樺太の、そして、日本の前途に幸あれ。

始動

こんにちは、尾羽

春だというの外は白いベールに包まれている。

心なしか音は静かで、動くものは何も無い。すべてが凍り付いて止まっているかのように錯覚してしまう。車輪にかき分けられさらさらと流れるパウダースノーだけが、世界が動き続けていることを教えてくれる。

私は今、毎時160キロメートルで高速移動する鋼鉄の箱の中で、日記をしたためている。

列車の名前は第1157列車、寝台特別急行「流雪3号」尾羽行。列車は11両編成で、先頭の一号車は軍用・政府関係者専用車両である。

1960年の東京オリピックに合わせて開業した東海道新幹線の技術を流用し、最新技術を贅沢に使ったこの樺太の大動脈、北樺太鉄道北樺太本線。

この線路は、高速度運転を可能にするために大出力主電動機を豪勢に積み込んだEF69型直流電気機関車と、高速度運転に対応した24系25型樺太仕様の豪快な走りをしっかりと受け止める。

我々には乗り物酔いどころか不快感さえ感じさせない。長旅が苦手な妻も、これにはご満悦のようだ。

樺太鉄道新法に基づき、緩和された基準によって本来の性能を余すことなく発揮できているこの機関車は、本州にいた時よりはるかに気持ちよく歌っているように思える。

「お父さん、尾羽はまだか？」

「もう、あと数十分だよ。優香は列車の旅には飽きたか？」

「ううん、優香すつごく楽しい！」

今年でもう12になる娘が足に抱き着いてきた。そういえば、自分が樺太に連れてこられた時も、このぐらいの年だった。

きつと、この笑顔の裏側に、まだ見ぬ凍てつく街への恐怖があるに

違いない。昔の自分と重ね合わせ、そんなことを思う。

北樺太、尾羽。北海道の更に北の北。長く悲惨な戦争の後に平定した樺太の上半分、その最北である。

私は今、その最果ての地を鉄道をもって開発し、そしてこの最北の要塞をより堅固なものとする使命を帯びている。北部樺太開発鉄道社長。それが新しい私の肩書だ。

優香、私も怖いよ。この街で何が待ち受けてるのか。だがそれと同じに、私は楽しみで仕方がない。この真っ白なキャンバスにどんな絵を描けるのか。わざわざ国鉄の東京西鉄道管理局長という肩書をかなくり捨てて来たのだ。中途半端は許されない。緊張感と期待が入交り、心臓の鼓動を速めていく。

優香、お前もそうだろう？

EF69電気機関車の電子機^制チ^御ヨツ^装パ^置が旅の終わりのメロディを奏でる。

終点にたどり着けば、その終点は始点になる。

次の停車駅は、終点・尾羽。

1970年。世界は東西冷戦の真っ只中。亜細^{アジ}亜^アの盟主として反共戦線の一翼を担う日本にとっての最前線は、彼の共産主義者達から解放した北樺太であった。そんな折、凍てついた樺太の大地を開拓すべく一つの会社が発足する。その名は北部樺太開発鉄道。

これは、日本最北の市である「尾羽市（ソビエト名・OXA）」を鉄道輸送という点から支えようと奮戦する、鉄道マンたちの物語である。

氷に閉ざされた物語が、今始まる。

「オハーオハーオハーオハー、尾羽でございます」

列車が完全に停車する前に、到着を告げるホームアナウンスが響く。

「長旅お疲れ様でございました。越谷様とそこご家族様でいらっしやいますね？」

ドアが開くと、越谷を待っていたのは仕立てのよさそうな制服に身を包んだ鉄道員だった。髪は黒かった時代の名残を未だ残っていて、顔には年季の入ったしわが刻まれていた。

「はい、そうですか」

越谷は、貴方は？と聞き返しそうになったが、それは必要のないことだと思い直した。仮にも新任の社長だ。それを迎えに来るのは重役だろう。そして、駅の一重役と言えば当然一つしかない。

「お待ちしておりました。駅長の^{おおぼかわ}大場川と申します」

ステーション・マスター。駅長だ。

大場川は^{うやうや}恭しく頭を下げる。そのしぐさからは長年の功がうかがえる。

「お荷物を」

そう言って手を差し出す大場川。越谷はそれを手で制した。

「いえ、それには及びません。その代わり、どうか家族を新居までご案内いただけませんか？」

「かまいませんが、社長はどうなさるのですか？」

びつくりしたのだろう。大場川は少し目を見開いたのち、こういった。

「先に少し、周りをよく見てみたいものですから。よろしいですか？」

越谷は特にアテもなかったが、こう答えておいた。我ながらいい加減なものだと自省するが、一刻も早くこの街と自分の鉄道を見ておきたかったのは事実である。嘘はついていない、と自分に言い訳した。

「わたくしは意見を申し上げる立場にございませぬので、それでよろしいのなら」

駅長はそう言うと、越谷の妻子を連れて去っていった。妻は長旅の疲れがあつたのだろうか。少し顔が暗かった。

「さて、どうしたもんかね」

越谷は誰もいないホームの上でひとりごちる。そしてあたりをきよろきよろと見回す。すると自分の後ろにEF58-180とかかれた機関車が鎮座していた事に気が付いた。その顔は、まるでこんな場所に連れてこられたのが不本意だとも言いあげた。

越谷はともかく、階段で地下通路へと下った。地下通路はまさに出来立て、という感じであつた。ごちゃごちゃとわかりにくいながらも、工夫の跡が僅かばかり覗ける案内表示が整然と並ぶ。

越谷はとりあえず東口へ行くことにした。本社や町の中心部は東側にあると聞いていたからだ。途中、通路の突き当りに「駅員室」と書かれた部屋を見つけた。そこから一人の青年が出てきた。越谷はその青年を呼び止めることにした。

「ああ、すみません。ちよっとお尋ねしたいのですが、ここに北部樺太開発鉄道の駅員さんはおりますかね」

北部樺太開発鉄道
「発 鉄なら開業前ですが……どんな御用で？」

「いえ、その開発鉄道の社長をすることになった人間なのですが、社員がどのような感じなのか見てみたくてですね」

そういうと、青年はゲエという音を出して豆鉄砲をくらった鳩のように固まった。

「これは失礼いたしました。僕、開発鉄道の人間なんです」

越谷にしてみれば幸先が良かった。たまたま呼び止めた得体のしれない人間は、自分の部下であつたのだ。なるほど、これがわが社の制服か。覚えておこう。越谷は真新しさが残る青みがかつた制服を記憶した。見本の写真を見せてもらった時より幾分か安っぽくなっているように思えたが、気にしないでおこう。

「そうでしたか。では、いきなりで申し訳ないのですが現状何か思い

当ったり感じていることはありませんか？」

「そうですね、この駅には開発鉄道の間人が自分と駅長しかいなくて、それが少し不安に思うぐらいですかね。北鉄の人が良くしてくれるので、寂しくはないですけど」

「そうですか、ありがとうございます」

件の青年は、まだ自分が置かれている状況をよく理解していないようだった。未だに狐につままれたような顔をしている。

越谷はそのまま去ろうとした。そして、一つ忘れていたことに気が付いた。

「ああそうだ、君のお名前は？」

「あ、綱島太郎つなしまたろうといいます」

「綱島君ですね。社長の越谷です。どうもありがとうございます」

越谷は会釈をしてそのまま踵を返して階段を上った。綱島は未だぽかんと口を開けていた。

外へ出ると、掃けられた雪が山積みになっていた。越谷は足元はぐじゅぐじゅになっているもんだとばかり思っていたが、掃けられてなお雪が敷き詰められており、心地よい音がブーツを濡らした。

駅前にはターミナルになっていた。広い広場があり、その向かいに国策企業デパート「香坂百貨店かうさか」が堂々とそびえたつ。こんな最果ての土地に摩天楼のような巨大構造物とは、世界は変わったものである。

ターミナルは何やらバス停のようなものが一列にかなりの長さで用意されていた。だが、見たところ使われていないようだし、バス停はそもそも他のところにあるはずである。では、あれはなんだ。

近づいてみて越谷は気が付く。道路と思われたところに線路があったこと。その線路は石畳で舗装されていた。典型的な併用軌道、つまりは路面電車である。

バス停、ではなくこの場合電停と呼ぶにふさわしいものには、私が社長として赴任する「北部樺太開発鉄道」の文字とそのマークがかかっていた。我が鉄道の路面電車線だ。

そんな「電停」に列車が入ってきた。いや、この場合ここは電停で

はなく法律区分上は信号の取り扱いがあるため駅に相当すると考えるのが普通で、なぜならこれは軌道ではあるがこの鉄道の根拠法は軌道法ではなくあくまでも樺太鉄道新法によるものだから、と越谷がくだらないことに思案している間に、列車は越谷の目の前で停車した。

その列車は、試運転と書かれていた。青い車体に白線の入った車両。ブルートレインである。前の方を見れば、真っ黒な機関車と茶色い電車がつながっていた。越谷は前に行き、機関車のナンバーを読み上げた。

「88・・・653・・・？」

8620型蒸気機関車88653号機、いわゆる「ハチロク」である。かつては樺太から台湾までを走り抜けた栄光ある日本初の純国産蒸気機関車だ。その姿の美しさは言わずもがな、「絶対に空転しない機関車」の名前は伊達ではなかった。越谷は、直接的なかかわりは薄いにもかかわらず、ここで出会えたことを少しうれしく思った。

1914年に製造が開始された彼ら。軍艦でいえば、今は亡き日本初の超弩級戦艦「金剛型」が登場し始めたあたりである。偉大なる大正娘に出会えたことに感動を抱いたとしても、不思議ではないだろう。もつとも、大正娘といってもその設計の優秀さにより現在でも現役である。(近代蒸気機関車としては最古参級であるにも関わらず！)

その偉大な機関車様は、茶色い電車に引張られてブルートレインとともに去っていった。路面電車の併用軌道の特急用の車両が堂々と走り抜けるさまは、なかなか興味深いように思われた。

もつとも関西を中心とした私鉄、特に関西鉄道の京阪線・奈良線などの京都・奈良の末端区間では1970年現在でもよく見られる光景なのだが、いかんせん越谷は東京の人間だ。知識としてそれを知っていたとしても、実際に見ていない分衝撃は大きい。

見れば、ホームの端っこにはカメラを抱えた「てっちゃん」が群がっていた。やはり、珍しい光景なのである。そしてこんな最果ての地にも熱心なてっちゃんはやってくるらしい。それは鉄道会社の社長として嬉しいことだった。

線路は街道と伴に市の東側海岸に位置する商用の港、「南港」なんこうへまっすぐ通じているらしい。あいにく、海は凍てついて風も凍っているために海の匂いは感じられない。そんな街道はてっちゃん通りと名付けられているようだった。雪の覆いかぶさった看板が越谷に教えてくれた。

なるほど、尾羽市開闢かいびやく以来この街道は「てっちゃん」で溢れかえっていたのだろう。他所へ行けば厄介者の彼らも、ここでは嬉しい経済の回し手として一定の市民権を得ているのだろうか？越谷はやはり鉄道事業者として気になる。

街はそこそこ人通りが多いように思えた。越谷にしてみれば、どうもこのような寒い土地は人通りが多いイメージは抱きにくいので、少し驚いたように見える。

ガシャンと轟音が轟いた。高い建物に囲まれているせいかその音がより大きく聞こえたように思う。見ると、戦車を乗せた貨物列車がゆっくりと動き始めたようだった。

蒼く光る機関車は、甲高い一定の音を出しつつ、モーターのうなりをあげていく。控えめな送風機の音がする。最新技術の電子機チョップ制御による大出力・連続無段制御を実現したかの機関車は、40トン近い戦車を軽々と運んでいく。

上空では、中等練習機であろう零戦練習機が訓練飛行をしていた。とつくに最前線から退役したゼロ戦だが、練習機としては未だに現役らしかった。だが、練習機としても近頃ほとんど退役済みであるらしいことを知っていた越谷は、見慣れた機影が飛び出してきたことに驚きを隠せなかった。

「まだまだ、頑張っているんだなあ」

往年の白色に戻された零戦練習機はゆうゆうと飛んで行った。海上飛行訓練か、それとも着艦訓練か。海の方へ去っていく。

越谷はふと思いついて街をもう一回見回してみる。そういえば軍の制服の者が多い気がする。なるほど、ここは確かに「城下町」だ。てっちゃん通りを、野砲と思しきものを積んだ貨物列車がやってきた。この北部樺太開発鉄道、もとはと言えば軍用軽便鉄道である。と

いうより、その軍用鉄道を地域の市民に開放するために設立されたのが、この北部樺太開発鉄道なのだ。

国鉄規格の一〇六七ミリ軌間で、本線用の大型機関車が闊歩するのにどこが軽便だ、という気がしないでもないが、軽便は軽便である。軍が軽便と言えば、それは軽便なのである。運輸省が認めてしまったのだから仕方がない。

無骨なつくりの陸軍工廠製の機関車が通り過ぎる。北部樺太開発鉄道発足前である今、ここは確かに軍用鉄道だった。

市電ターミナルを通り抜け大通りを渡ると、そこには樺太庁の尾羽支所と尾羽市役所がある。そして、我々が北部樺太開発鉄道の本社は尾羽市役所の1階から4階及び1階に併設されているのである。

そう、何を隠そう、我が北部樺太開発鉄道はこの日本でも数少ない、地元自治体と運輸省・陸海空軍の出資による第三セクター鉄道である。

北樺太開発鉄道。この尾羽市を開発するために設立された「開発鉄道」だ。なぜこんな辺境を開発するかと言えば、この街にある軍事拠点を支える「城下町」を作る必要性があるからだ。

ここは最北の軍事拠点でもある。そして、陸海空軍が一堂に会し、すぐ隣にあるソビエトを睨むのである。海軍の航空戦力が減少している今、この最北の軍事拠点は最強の不沈空母となるべく要塞化がすすめられている。

その城下町を発展させるために設立されたのが、この北部樺太開発鉄道だ。

何分、ハコモノコンクリートでできた吹けば高空まで飛ぶような小都市である。そのための鉄道など当然どこも経営したくない。縄張りへの配慮や譲り合いという名のたらい回しにあった結果、それぞれが均等に痛い目に合う「第三セクター」で折り合いがついたのだ。

なお、同じ理由で第三セクターとなったあの高速路線、字面が似て紛らわしい北樺太鉄道――通称：北鉄――と会社が分けられたのは理由がある。

北樺太鉄道は国鉄と樺太庁の第三セクターである。

一方で北樺太開発鉄道——通称：兇鉄——は、そこに地元市町村である尾羽市と、そして軍が加わる。

尾羽市は完全な要塞都市だ。要塞地帯法も適用される完全な要塞地帯である。その市内を走り、密接に軍事輸送とかかわるこの鉄道を、軍は完全に手中に収めたかったのである。

そして元はと言えば軍用線であるものを民需に開放するといっても、不祥事に次ぐ不祥事を起こし、そのほとんどにおいて被害をこうむっている陸軍が、国鉄の勢力下に自らの生命線を預けたくないと考えるのも自然な流れだろう。

数十年前の燃料輸送列車脱線事故で街を一つ焼き払って以来、軍内に国鉄に対し不信感を覚える勢力が一定数存在するということは有名な話であったし、特に陸軍において国鉄を毛嫌いしている層がいるというのは越谷も肌で感じていた。

言ってしまうえば、くだらない方向にふか〜い事情の為に分断され、結果として全方向一両損でなあなあで済ませているのがこの鉄道だ。もつとも、何のかかわりもないのに一両損をさせられている我々にとっては、ふざけるなとしか言いようのないのだが、国防にまつわる話である。我慢我慢。越谷は青筋のたちそうなこめかみを軽く揉んだ。

とりあえず越谷は本社入り口から建物に入った。どうやら市庁舎と入り口が分けられているようだ。まあ、当然だろう。場所を間借りしているわけだが、内部構造は完全に仕切られて分割されているようだ。

ともかく、入り口の案内を見る。なるほど、社長室は当然と言えば当然、4階にあるようだ。てつきり11階にでんと広く設けられているとばかり思っていたが違うらしい。だがよかった。11階なんぞに自室があったら、移動が大変である。越谷は少しほっとした。彼は根っからの「地面好き」である。あまり宙に浮いた所は好まない。人はそれを高所恐怖症という。

4階に行くと、社長席は存在したが社長室は存在しなかった。普通

のオフィスの上座に、偉そうに構えたデスクがあるのみだった。なんだか校長先生にでもなった気分だ。

社長デスクの隣には、それよりかは幾分か偉そうではないデスクが鎮座していた。恐らく重役のデスクだろう。本当に学校の職員室のようだ。

越谷は少し戸惑いつつも、自分のデスクへたどり着いた。社長用デスクが普通のオフィスの、いわば校長先生の位置にあることが妙におかしく思える。ただ、申し訳なさそうに菓子折りと生け花が添えてあるのが、なんとも物悲しい雰囲気だった。

暫くして、少し周囲がざわついているのを感じた。無理もない、新しい社長が突然現れたのだ。女性から睨まれた気がした。すでに私は嫌われているのだろうか？

「越谷社長ですか？」

ついに声をかけられた。声の主の方を見ると、眼鏡をかけた青年が立っていた。

「そうだ。私が越谷だ。君は？」

「統括本部長の幸谷と申します。よろしく申し上げます。社長、この後お時間がよろしければお話をさせていただきませんか？」

統括本部長、つまりはこの会社のNo.2である。それはすなわち、越谷の隣の教頭先生席のヌシということだ。突然の来訪にもかかわらず、幸谷の動きは速いように見えた。なぜなら、その手にはすでにいっぱい資料が整理されて存在したし、特に慌てた様子もなく、まるで最初からこの来訪が予想されていたかのような反応だったからだ。

「私は大丈夫だが？」

「ありがとうございます。では、立ち話もなんですし会議室の方へご案内いたします」

越谷にしてみれば、今日は社員に紛れ込んで侵入しついでに雰囲気を確認し、そしてデスクに私物をちゃっかり置いてそれで終わりのはずだった。が、なんだかこの男と話してみたくなった。

「いいだろう。案内を頼む」

幸谷は首肯すると、踵を返して歩き始めた。

く仕業前く起動

恐れていたことが起こった。越谷は気取られないように頭を抱える。会議室は1-1階だったのである。なんてことだ。ふざけるな。設計をしたのは誰だ。断固粛清してやる。

「会議室はとも見晴らしがいいんです。管轄の路線はすべて見下ろせるんじゃないでしょうか。もつとも、建物の影に隠れているところもあります……。なんでも自社管轄路線を俯瞰して考えることができるように、という設計者の意匠だそうです。高いところは苦手でしたか？」

「はは、何を言ってるんだ。私は飛行機で欧州へ技術習得派遣をされたことだつてあるんだ。高いところが苦手なわけじゃない。ただ、地に足をつけているのが好きなんだだけだ」

「……苦手なんですかね？」

「地面が好きなんだ」

不毛、とも呼べない掛け合いに、幸谷はおかしくなってしまう。話に聞いていたのとはだいぶ違う、妙な男だと思った。越谷はなおも自己弁護にいそしんでいた。

エレベーターのドアが開いた。待ち受けていたように、ガラス張りの窓が待ち受ける。越谷は全身の毛が逆立つのを感じた。だが、それがなんだ。仮にも中国戦線あがりである。ここで折れようものなら、戦友に笑われる。越谷はなんでもないと叫んだ。折れようものなら、幸谷にはそれがおかしくて仕方がなかった。

幸い、会議室は全面ガラス張りではなかった。二人は手ごころな椅子を選び、越谷だけはしっかりと窓が見えない位置を選び、話を始めた。「まずは長旅お疲れさまでした。どうでしょう、何かこの街、この鉄道に関してご感想とかは？」

「ふむ、まず、北樺太鉄道は見事なものだった。樺太鉄道新法に基づき、捻破りの高速輸送はなかなか楽しかったし、心強いと思ったね」
越谷は当たり障りのない「感想」を言った。感想と言われたから感想を言ったまでだ。もしかしたらこの私の慧眼を試そうという心づ

もりかもしれないが、あいにくそういった読み合いは嫌いだ。越谷は子供じみた抵抗を試みた。

「一部ではその高速路線を準新幹線……狭軌新幹線としてとらえる向きもあるようで、法律区分的にも近いものとなっています。なので新幹線と同じく制動距離規則は撤廃。「事業者が安全ト認ムル範囲トスル」なんて、国鉄の良識に安全対策を丸投げした特例ですよ」

幸谷は相槌と少々の豆知識を披露した。越谷は会話を続行する。

「事故が起こらなければいいんだがなあ。もちろんそれ相応の安全対策はされているようだ。それに、国鉄・北鉄内規則で最高速も毎時160キロまでに制限されている。それよりもその鉄道がこの街に及ぼす良い影響の方が大きいだろう」

先ほどまで、極上の旅を提供してくれた高速新線を思い出しながら、越谷はそう言った。

「隣の芝が青い、と言いたくなるほど、あれは素晴らしいものだったね」

「つまりは、我々の鉄道は枯草の生い茂る庭だと？」

「ここが本題である。幸谷は少々とげのある言い方をするが、本意ではない。当然越谷も理解している。」

あの素晴らしかった高速新線、北樺太鉄道北樺太本線。それはお隣北樺太鉄道の線路である。

打って変わってこちらの路線。北部樺太開発鉄道である。字面こそ似ているが、開発鉄道とある通り地域密着型の地方中小ローカル鉄道だ。

「鉄道の特性が違う。比較範囲にないよ。それに、見た限りではなかなかいい鉄道だと思ったよ」

「ではやはりそれ以外の点で何かご不満が？」

厳しい追及ではあるが、越谷は別に不快ではない。その証拠に、お互いの口元は緩んでいる。越谷にしても幸谷にしても、言いたいことは同じだろうからだ。

「単刀直入に行こう。君はこの鉄道の何を問題点と考える？」

「表面上の数値、見てくれ以外の全てです。砂上の楼閣ならぬ、雪原の

楼閣です」

越谷の見解と同じである。だが、あえて先を続けさせる。

「具体的には？」

「ご自身が一番ご存知かと思いますが……。この開業数日前に緊急的に社長が交代したことがまず第一ですかね」

本日は3月15日。開業は3月22日。こんな至近に社長が決定するなんてことは、通常あり得ない。大体こういうのは、就任は先としても内定ぐらいもつとも前に決まっているのが通例である。

越谷が社長に決定したことが一方的に通知されたのは、本日からさかのぼること一週間前。なぜそんな直近に決まったのかと言えば、前社長に当たる人物の不祥事が原因だ。

「前社長、喜多川康志きたがわやすしによる、会社設立・運営資金の不正な横領・横流し事件。これが原因で全てが狂っています」

前社長による横領事件。それも、仇敵であるソビエトへの送金である。逮捕で済んだだけマシだと思っただきたいぐらいだ。

「運営資金が足りない？」

「現状は足りていません。ですが、将来的な資金難を見越して大規模な人員の見直しを行った結果、一部で大幅な定員割れを起こしています。現場の人員はおろか、管理職まで足りなくなる事態で。なんとか運輸の現業関連は一応充足に足りる分を確保しましたが、庶務に関しては管理職の兼任や管理職が現場を直接指揮することも起こっています」

足りていないじゃないか。それはつまり、人件費を許容限度を超えて削減しなければ立ち行かなくなる状況ということじゃないか。越谷は聞いていたよりひどいとめまいを覚える。

「確認だが、運輸の現場は足りているんだな？ 最悪そこさえ充足していれば、庶務の方は管理職が残業なり徹夜なりすればいい話だろう。良くはないが、何とかやっていける」

「あー、ええとですね。充足しています。充足しているということはつまり、ダイヤの見直しや関係各所への人員貸出願いなどで徹底的な人員削減を行った結果、なんとか収まる範囲内に近づけたということ

でして……」

それはつまり、定員割れを起こしたから定員を少なくした、ということか。

「それで回していけるんだらうな」

「問題ありません」

無駄だと思いつつも、越谷はつい聞いてしまう。だが、実のある内容が返ってくるはずがないし、返ってきてても困るのだ。

「幸いながら、この鉄道は関係各所に愛されていますからね」

「この鉄道が設立された事情が事情だから行き倒れられたら数十人単位でエライさんの首が飛ぶから、赤子を愛できるように扱われる、という意味か」

「ね？愛されてるでしょう？」

これが愛ならずいぶんと歪んだ愛だ。もはやこの世には真実の愛は存在しないのか。などと、越谷は柄にもなく思う。

「ともかく、北樺太鉄道をはじめとした近隣の各関連団体は多少なら融通を利かせてくれますよ」

関係団体とは、三軍調整員会という陸海空軍からなる当鉄道に対する監視組織（という名のお小言組織）である。軍事関連輸送を円滑に行う為に、ダイヤの決定権はほとんどに向こうに握られている。

ここでの「ダイヤの決定権」とは要するに時刻表の決定権である。運行の決定権、つまり実際にどのような列車を動かすかの決定権はこちらにある。なぜかといえば、安全上の理由などで軍部の要請に応えられない場合などに、鉄道側にそれを制止する権利を与えるためである。

なお、これを悪用されて、例えば「裏ダイヤ」等を使って鉄道側の希望通りのダイヤを設定する——実際、国鉄関西方面部はかつて裏ダイヤを用いた運営をしていたことがあった——などの濫用が起きることのないよう、運行指令室には三軍委の監督官が常に監査をしている。

我々にとっては、目の上のたんこぶ……。

おい、陸海空軍。何でそんな時だけ仲がいいんだ。国防上仲がよろ

しいことは非常に喜ばしい。第二次世界大戦と対ソビエト戦争を経て、勝つてなお兜の尾を締めようと今までのグダグダ具合を改善してくれたのなら非常に素晴らしい限りなのだが。

「三軍委にお願ひしたら、快く人員を融通してくれるそうです。いやあ、彼らは優しいですねえ」

そんなうるさいお小言委員会を笑顔で利用してしまう幸谷。越谷はそれが空恐ろしかった。

「銀行からの融資は……やはり厳しいか」

「景気が戻ったといえども、頼みの八井銀行の鉄道部門はその他の案件でヒイヒイ言っていますし、信用という面から言えば最悪ですからね。それにすでに、横領された資金を補てんするために限度額近くまで借りてしまっています」

「金をソビエトに持ち逃げされた会社に、これ以上金を貸してくれるお人よしは居ないか」

当然と言えば当然である。経営基盤も見通しもすべてがガタガタな企業に金は貸したくなかろう。いくらバックに政府や自治体が付いているといえど、金融屋としては一度出直してこいと叫びたい心持だろう。

「今、経理部長が融資を受けられるよう調整していますが、どうにも難しそうですね」

「当面の方針は？」

「補助金をフル活用するつもりです。それから大手私鉄にも協力を要請。更にはプレアデス重工・飯田系の尾羽に鉄道車両工場を持つ鉄道車両製造会社に路線を試験線として貸し出す旨を持ち出しました。その他、同じく車両工場を持つ帝急系列などにも掛け合っています」

「市の東側沿岸中心部には工場群が立ち並んでいるんだったな。その一角か？」

「ええ。後で詳細な地図をお渡ししましょうか？」

「ああ頼むよ」

要塞地帯にも地図はあるらしい。越谷はありがたく受け取っておくことにした。

「では、今後の予定ですが、秘書などは必要ですか？」

「そんな予算、涌いてくるのかい？」

「涌いてくるなら、その他のところに使いますね」

「そうだろう。不要だ。まあ、暇を持て余しているのにクビを切れない厄介者が居たら回してくれ。給料分の働きをさせよう」

「了解しました。早速リストアップしておきます」

「本当に社長秘書を窓際にするつもりじゃあないだろうね……」

「そんなくだらないやりとりも挟みつつ、話は直近の予定に変わっていく。」

「本来ならば明日からのご予定でしたが、明日はどうされますか？」

「明日はとりあえず顔合わせだ。その後、いろいろと視察をしたいと思う」

「視察、ですか。具体的にはどこを？」

「とりあえずすべての運転区と工場かな。現場と話がしたい」

越谷はもともと現場出身である。採用は未だ鉄道省だった時代の車両整備部、その後は戦争を経て駅員経験を積んだ。その後は運輸指令の最前線にも立った。友人に運転士や車掌も多い。現場のつらさは身に染みているし、様々な現場を渡り歩いたからこそ、現場それぞれに独特な悩みがあることを知っていた。

「では、現場のトップを本社へ召喚すればいいのでは？ わざわざ出向くこともないでしょう」

「トップと話しても仕方がないだろう。一番下と話すから実があるんだ。それと、秘匿性の無い会議には現場の者にも自由に発言させたいい」

「お言葉ですが、不要と思います」

幸谷の眼鏡の奥が光った気がした。そして、その光が急に険しくなる。

「社内秩序の維持、現場に上の事情を知られたくない、上の意思決定に下の意見の影響を入れたくない……理由はそんなところかな？」

「ご明察です。流石ですね、幹部候補組の思考は手に取るようにお分かりだ」

幸谷尚吾。国鉄からの出向組。国鉄本社で幹部組の出世街道を駆け抜けて通り過ぎてしまった人間だ。思考回路は確かに幹部組のそれに見える。

「伊達に叩き上げではないよ。きつかけは運だったとしても、運をつかみ取るために費やしたものは本物だ」

「流石は『英雄』越谷様だ。東京五輪の奇跡の立役者は言うことが違う」

幸谷は明らかに敵意をむき出しにする。やっと本性が現れたと聞いた、越谷は面白そうに微笑む。

「今日初めて意見が食い違ったな」

「我々の意見が合うことの方が珍しいのです。私は、あなたとは真逆の出自なんですから」

「それは興味深い。いつかその話を聞かせていただきたいね。だが、今日のところは私に従ってもらおう。君とは仲良くしたいんだ」

幸谷は、余所者が知った口を、とは思わない。なぜなら、越谷という男を知っているからだ。この男は無駄なことはしないし、それはきつと意味のあることなのだ。幸谷は意味のあることだからこそ反発した。

「この件に関しては従います。あくまでも、この会社の決定権は貴方にある。そして、私も貴方と敵対するのは本意ではない。『オリンピックの奇跡』のその後の、本当の越谷伝説を私は近くで見させて頂きましたからね」

幸谷は眼鏡をヒクつと上下させた。まだ若いだろうに、その顔には苦勞の跡がうかがえる。

「だが、鉄道は正しくあるべきだ。そして論理的に感情を排して行われるべきだ。秩序をもってあるべきだ。常に大局的であるべきだ。現場目線はミクロな視点ではない。近視眼的観測は身を亡ぼすだけだ」

「道理だね。だが、すべてではない」

越谷は幸谷を肯定しつつ言い切った。幸谷は、越谷の腹の中にあるものを知りたかった。

「当面は貴方に従います。しかと、『例外』を見せていただきますよ」
「望むところよ。本庁勤務の幹部候補の人間のやり口、期待しているよ」

「過大な評価です。私はただの落ちこぼれですよ」

笑顔で剣を応酬する、フェンシングのような会話が続く。

越谷は思う。その性質上、国鉄とこの鉄道が仲が悪いのは承知の上である。だが、なにもこんな厄介者を送り込んでこなくてもいいだろうにと。越谷はつい先日まで所属していた自分の古巣を深く恨んだ。

本社を出た越谷の頭上を、最新鋭の三〇式戦闘機が飛び去って行った。

ここは尾羽。日本最北の市にして、三軍が睨みを利かす反共防衛の砦。

そして、様々な想いを胸に、あるいは黒い思いを腹に宿した人間が交錯する、人間のターミナルである。

越谷は夕暮れの商店街のアーケードを歩いていた。威勢のいい声が響き渡り、いい匂いが充満する。

この商店街は不死鳥通り商店街というらしい。尾羽駅から歩いて10分ほど。駅前というには少し遠いか。だが、この商店街は全国でも類を見ない珍しいものであると、越谷は気が付いた。

足元を見る。すると、そこにあるのは石畳に覆われた線路であった。

上を見る。そこには直流1500ボルトが流れるトロリ線、つまりは電線があった。

そう、この商店街、路面電車が走るのである。

試運転列車が警笛を鳴らしながらやってきた。真新しい青い車体は街の光を跳ね返している。

5000系軌道線対応直流通勤電車。この鉄道の路面電車線、もとい軌道線の主力であるらしい車両だった。国鉄出身の越谷には、103系と言った方が耳なじみがあったが、形こそ103系なもの、その中身はまるで違った。

103系は、首都圏等に投入された最新通勤型車両だった。越谷の管轄であった東京西鉄道管理局でも扱っている。汎用性が高く、信頼できる車両だった。

この鉄道へと配置されたこの5000系は、そんな103系を元としつつ樺太用に耐寒・耐雪装備が施された改良型という。製造はプレアデス重工で、最近仲の良い武蔵野鉄道所沢車両工場と共同で開発に当たったようだ。

武蔵野鉄道は最近、ブレーキの総合商社こと武鉄101系を登場させたばかりで、この車両はそんな101系の影響を色濃く受けていると越谷は聞いていた。

最新型のその更に最新形態である。豪華なことだと越谷は思う。

「こんな大型車が路面電車ねえ……」

路面電車にしては凶悪な巨大車体が、きしみながらカーブを曲がり迫ってくる。人々が気にも留めず避けていく姿を見ると、越谷はまるで台湾を見ているようだったと思っただ。

運転士は女性だった。やはり樺太、そもそも慢性的に人手が不足しているのではないか。戦争中、男手が足りない時に女性が運転士を務めたという話はよく聞く。もともと、現在は解消されているがその名残が残っている、ということもあり得る。ともかく、この街のライフスタイルや家族構成の傾向などを調べることは急務だと越谷は感じた。

商店街を抜けると大通りに面する交差点がある。鐵路はここで分岐し、右へ曲がっていくものと直進し大通りを横切るものに分かれる。直進した先には少し大きめの駅があり、その駅には豪勢に作った車両基地が併設されていた。

堂々の鉄筋コンクリート製で完全新造。その内容は国鉄のそこらの車両基地を凌駕するという。越谷としても、自らが所属していた東

京西管区中央線・中野電車区なかのよりも豪華だと言わざるを得なかった。
ハコと見栄えだけはよく作ったもんだと越谷は感心した。いわゆるハコモノだ。

これは苦勞をしそうだった。そんなことを思いながら、越谷は口角が上がっていることに気が付いた。

越谷は楽しかった。なにもかもが楽しくて仕方がなかった。

そんな越谷の後ろを、影がこっそりついていった。

3. く仕業前く入替：点検よいか？

それは予感だった。何かの流れが変わったことへの。だが、何が変わったのかはわからなかった。

空軍・戦闘機パイロットである小宮雄介こみやゆうすけはその日、何かを感じ取った。それは戦場における嗅覚のようなものだった。

何かが変わった。だが、それはなんだ？

考える間もなく、防空識別圏に不明機が接近したことを示すアラームが鳴る。

ここは最北端の軍事要塞、尾羽。考えることをやめたものと、考えにとらわれて歩みを止めたものから脱落していく、平時においての最前線。

戦闘は終わった。しかし、戦争は終わっていない。たとえ講和条約が結ばれようと。歴史の上で名前が付けられ、時代が変わった、もはや戦後ではないなどと市井がのんきなことを言い出したとしても。

戦後は終わらない。戦争は、続いている。

「桐谷耕治きりがやこうじ。運輸部長です。ご存知の通り、現業のすべてを統括してまさあ。武蔵野鉄道より出向してまいりました。もともとは車両整備の畑でして、社長とは通ずるところがあるのではないかと。よろしくお願いします」

小柄ながら体格のいい男だった。肌は真っ黒でそのいで立ちは北国にはまるで似つかない男だった。

越谷が尾羽に来た翌日、つまり新社長越谷の書類上の正式な着任日である今日、北部樺太開発鉄道、通称「発鉄」の幹部と社長の初顔合わせが行われた。

社長である越谷の自己紹介に続いて幹部組の自己紹介となるのだが、その先陣を切ったのはこの男だった。

「武蔵野鉄道の……西か？東か？」

桐谷の発言を聞いて越谷はこう質問した。

武蔵野鉄道とは、西武鉄道や（旧）武蔵野鉄道・多摩鉄道などの旧西武鉄道系の「西管区」と、東武電鉄と秩父鉄道などからなる「東管区」の、二つの「武蔵野鉄道」が合併して生まれた鉄道会社だ。それぞれの出自が異なるため、西管区と東管区では同じ武蔵野鉄道でも大違いである。

越谷は、彼の人間を把握するために、聞いておきたかった。

「西ですな。所沢工場でした」

「所沢か。期待しているよ」

西、それも所沢工場と聞いて安心する。武蔵野鉄道西管区所沢工場は、言わずと知れた鉄道会社直営の鉄道車両製造工場だ。この鉄道の車両も所沢工場からの技術供与を基に製造されており、車両製造会社としては後発ながら確固たる技術力をもった会社だ。運輸に関してはこの男に一任していいだろうと越谷は判断した。

「次は瀬戸部長、お願いします」

次に、幸谷は瀬戸と言う男を呼んだ。

その男は、細い眼鏡をかけて少しやつれた頼りない風貌の男だった。

「経理部長の瀬戸智久と申します。飯田の基幹復興道路建設より出向してまいりました。よろしくお願いいたします」

倒れてしまうのではないかと心配になるほどに顔色は青白く、やせ細って疲れ切っている。だが、眼光だけはするどく光っており、越谷はそこに一筋の信念を見たような気がした。

彼の言う基幹復興道路建設は満州系の企業（もちろん元を正せば日本の企業だが）で、尾羽市街の鉄道・道路の建設を担当したところだ。たはずだ。経理の担当と言うことだが、いざと言うときにパイプが役に立つかもしれない。越谷はすっかり覚えておくことにした。

「次は私ですね。宇佐美陶治です。開発部長です。樺太庁の都市開発部より出向してまいりました。樺太中央部の出身で、極北の開発ということで非常に楽しみに感じております。よろしくお願いします」

中肉中背の、越谷より少し若いくらいの男が立ち上がって自己紹介を始めた。

越谷は彼を見るなり、吹き出しそうになってしまった。それをどうにか堪えて、自己紹介に耳を傾ける。

宇佐美陶治。本人はどうやら覚えていないようだが、越谷の小学校時代の同級生である。そして越谷が上京した後、その敷香しすかという街に残った彼はソビエトとの戦乱に巻き込まれ故郷を焼かれた。

いやしかし、こんなところで旧友に会うとは、それも実に40年弱である。びつくりというより、なにか感慨深いものがある。今ここでこの場所でこういう形で出会ったこと。それがまるで奇跡か運命かであるように。

あとで時間があれば驚かしてやろう。どうやって驚かせてやろうか。きつと奴はびつくりするに違いない。ああ、大いにびつくりしてくれるだろう。

……。きつと、彼の小学校時代の友人の内、数少ない生き残りの内の一人であろうから。

越谷がそんなことを考えていると次の人の番だった。その人は女性だった。

「私で最後ですね。営業・広報部長の久留米千佳子くるめちかこです。海軍の広報より出向してまいりました。精一杯努めますので、よろしくお願いします」

保母のような温かみのある女性だと越谷は思った。海軍人だからだろうか、筋肉質というよりはスラツと細く伸びた体をしている。体型は腰にのみ女性的なラインを確認できる程度で、優しく包み込むような雰囲気を感じた。おおよそ軍人には見えなかったもので、越谷は驚いた。

「失礼だが、所属は？」

「ハッ。海軍特設陸戦隊です」

普通に実戦部隊だ。というより、海軍の中でも白兵戦を行うかなり激しいところであるし、本来は武闘派なのだろうか。陸軍で実戦経験のある越谷は、やはり少しびつくりした。

「失礼した。これで以上かね？」

「以上です。この4名及び統括本部長である私幸谷尚吾、及び社長がこの会社の首脳陣です」

「わかった。社長の越谷卓志だ。よろしく」

越谷が起立し、お辞儀をする。これで一通りの顔合わせは終わったわけである。

越谷が座ると、次に質問を始めた。

「報告は一通り聞いている。何か詳細に説明すべきことはあるかね？」

そういうと、桐谷が手を挙げた。

「この鉄道の車両の運用状況についてです」

早速、本業たる鉄道の話だ。越谷は先を促した。

「続けて」

「ようがす。この鉄道は基本的に高性能車両にて運用されます。当然効率的にはいいのですが、導入費用が跳ね上がり編成数は定足数をわずかに上回る程度しか確保できませんでした。それにより、大規模な車両故障などが起こった場合、具体的に言うところ鉄道全体でおおよそ3編成の運用離脱があった場合、定足数を割り込みます」

なにが出てくるかと思えば、大問題である。越谷は頭を抱えた。

鉄道はいくら安全と言えど、それは自動車やその他交通機関などの論外レベルで安全性の乏しい下位の輸送機関と比較しているからである。なので、基本的には事故のオン・パレードだ。もっとも、人員に被害が及ぶレベルの事故は極めて少ないのだが。

事故が起こり、それが少しでも車両に問題を与えるものであったら、その車両は即座に運用離脱となり、代替を用意しなければならぬ。

余裕は3編成分。稼働率にして九割前後。十分に思えるかもしれないが、かなり厳しい数字である。事故や故障が三件連続することなど、よくある事なのだ。

「対処としては？」

「関係機関に車両の貸し出しの際の取り決めを策定中、いざとなった

際に車両を借りれることができるか検討中です」

貸し出しを受けるといったって、それにはかなりの費用を必要とする。継続的に貸し出しを受けらるなら、その費用は新造するより高くつくかもしれない。もつとも、その辺を踏まえて検討しているのだろうか。

しかし、表面上だけはきちんとしているとはなんだったのか。これじゃあ見てくれさえもダメではないか。越谷は心の中で毒づく。

「自分からは以上です」

聞きたいことが山ほどある。あとで個人的に話を聞きに行くとして。越谷は国鉄謹製メモセツトに「桐谷、話」と短く書きなぐった。

桐谷は粗雑な人間なのか、ドカツと雑に腰かけた。その際に座る位置を間違え、尾てい骨に椅子の手すりを強打した。

「ぬわああああああん！」

珍妙な奇声をあげてくずれ込む桐谷。助ける人間は誰もいない。

「ソツフン。皆さんお気になさらず。次」

幸谷は先を促す。もちろん桐谷には目もくれない。無慈悲。

「はい、次は私です」

桐谷を心配そうにのぞきながら、久留米が話を始めた。

「ええと、営業からは特にありません。広報としては、雑誌社から密着連載の依頼を受けています。前社長下においてこれを受託、当初の通り開業直後から数年間にわたり専属の記者さんがこちらにいらっしやいます」

久留米が長く長く垂れた髪ををかき分けながら報告してくれる。

「雑誌社？どこの雑誌だ？その対応は誰が？」

「北方談談社の週刊流水です。過去の報道を見るにそれほど過激な内容はなく、また一般政治的な内容も少ないです。前社長体制時に関係機関からも了承と共に当該記者・雑誌社が安全である旨を伝えられていますので、問題はないかと。対応は私に一任されています。問題ございませんか？」

越谷にとって、正直聞いたことのない雑誌だった。だが、話を聞くところまで過激なブンヤではないらしい。なにせ不祥事のあとだ。

他人のミスを食べて生きているウジ虫にたかられたら厄介だが、そのようでないならこれは歓迎すべきことだろう。

「いや、かまわない。対応は美人の方がいいからね」

「そ、そんなことっ—」

会議室に苦笑が漏れる。とうの久留米はもじもじとした後、「以上です!」といって勢いよく座ってしまった。もつとも、尾てい骨を強打するようなヘマはしなかった。

これで会議は終わりだった。この後は越谷の希望だった現場の視察だ。

視察は越谷にとつてとても興味深いものだった。現場の人間の士気は高く、そして開業へ向けての準備も滞りなかった。

今現在においての不満等も特にないようで、予想していたよりは良い状態のようだ。越谷が見るに、どうやら現場を取り仕切っている幹部、つまり桐谷とその直下の管理職がかなりいい仕事をするようだ。今このギリギリの状態で余裕を持てるのは確実に彼らのおかげだろう。

余裕のないこの状況下において、全員が前向きかつ真摯に職務を全うしている。越谷は彼らに感謝することしかできなかった。

さて、そんな越谷はその視察を終えて、試運転列車に添乗してつちやん通りの終点・南港駅まで向かった。そして越谷はベンチに腰かけて甘いコーヒーを飲む。

越谷は茫漠と海を見つめていた。波の音がしない海は、新鮮だった。

この時期海は流水に覆われている。港と言っても、海が凍ってしまえば仕事はない。商用の港である南港も軍艦の寄港は頻繁に行われるが、その為に使用するであろう海軍の南港詰所も今はもぬけの殻だった。

こんな仕事のない港だが、人通りは少なくない。近くにあるフェリーターミナルは欧州人の言うところのショッピングモールのような意味合いを持っていろいろしく、冬季も営業していた。また、流水に乗りたいモノ好きがこっそり港の端から海に出ていた。

この時期、凍っていないのは温泉（という名の銭湯。雪解け水を釜で焚いてるだけ。商標的に問題があるのでは？）から温水が垂れ流される河川とその河口ぐらいだ。

主要な道はどうやらその温水で温められているらしく、雪が積もっていない。うまいこと考えたものだ。

後ろでは発鉄の車両の試運転が行われていた。こんな極北の大地で、首都圏で自分の配下にあった車両と同じ車両が使われているのは、なんだか感慨深い。

発鉄の路線図はそこそこ複雑だ。が、落ち着いて考えればかなり容易に理解が可能だ。ぐるっとまわる環状線とその周囲にとりつく幹線。おおよそミニ版の東京・大阪といった風情だ。違いと言えばターミナル駅に環状線が接していないことか。

こんな小さな町にも環状線は存在するのである。だが、自動車交通がまったく発達していない・発達できない都市においては、これは当然の流れだろうか。街の隅々にまで——ともすれば商店街アーケードの中まで——路線を張り巡らせ、交通困難地帯である極北の便を図らなければならぬ。そうしなければ、人は来ないのである。人口は急激に増えている。交通網のパンクが起こる可能性も視野に入れなければならぬし、逆に鉄道がそっぽを向かれる可能性も考慮しなければならぬ。

この街が鉄道とどう生きていくのか。越谷達にできるのは、いかに鉄道が魅力的かアピールすることぐらいである。

寒くなってきた。越谷はてっちゃん通りを歩いて、自宅へ直接帰ることとした。

ほつぽうだんたんしや
北方談談社の週刊流氷記者、久留里美里は雪に埋もれていた。

「きゃあああああああ！」

腰から先が完全に埋まってしまっている。無理もない。なぜなら少々高い崖から滑落し、深く積もった雪にずっぽりと落下してしまっただから。命があつたことを感謝するべきである。

しかしながら、その助かった命もこのままいけば失われるだろう。強烈な寒さと雪が、華奢な女性から体温をみるみる奪っていく。

「あのう、大丈夫ですか？」

そんな声が聞こえた。神の助けか。

「す、すみません！助けてください！」

顔をあげると、二人の軍人が立っていた。

「隊長、国民から救助要請です」

「うむ。要救助者を確認、緊急事態に付き、隊長名をもって救助を許可する。救助はじめ！」

そういうと、若い方の軍人が美里の周囲の雪をかき分け、そこそこ掃けたところで、二人がいつせーのせで美里の腕を引っ張り上げ、美里はなんとか雪の吹き溜まりから抜け出せた。

「お怪我は？具合は大丈夫ですか？」

「ええ、問題ありません。どうもご迷惑をおかけいたしました……」

若い軍人は美里の言葉にニツコリ笑って、「要救助者救助完了。異常なし！」と若くない方の軍人に敬礼をした。

「あの……えつと……軍人さんですよね」

「ご慧眼恐れ入ります。我々は三軍鉄道委員会運輸管理局調整員、かいばらさだみち
海原路定海軍中佐と大熊海幸海軍大尉です。顔色が優れませぬね。我々は海軍の人間ですので、なんでしたら軍の所有する温泉施設で休んでいかれますか？」

美里は仰天した。取材先の発鉄の天敵的存在である三軍委の、その

中枢の人間にバツタリ出会ってしまったとは。あわてて申し出を断る。「あ、あの！私、北方談話社所属、週刊流水の記者をやっております久留里と申します。発鉄に密着取材をしている身ですので、ありがたいのですがお断りしましょうかと……」

「国民防護に身分も何もございません……まあ、海軍の施設に入れるのはチトまずいかもしれないので、とりあえず温泉までご案内します。先のごことは、とりあえずあつたまつてから考えましょう」

美里には、二人がとても眩しくハンサムに見えた。「国民防護に身分も何もございません！」だなんて、そんな映画みたいなセリフ、生で聞けるとは。記者として最高の幸せである。

「こちらです。足元が悪いので気を付けてくださいね」

一行は一路、尾羽温泉おほおんせんへと向かった。

蒸気の煙がもくもくと立ち並ぶ。建物と建物の間で増幅された汽笛の音が出迎える。

ここは尾羽のはずれの温泉街。という名の銭湯施設群である。

一行は温泉協同組合の休憩室を貸してもらうことにした。

「コーヒー、どうぞ」

「あつすみません」

美里は大熊と名乗る若い海軍人からコーヒーを受け取った。

「ここが尾羽温泉ですか。なんとも珍妙な温泉ですね」

美里の目には、一生懸命にお湯を沸かす蒸気機関車が写っていた。「すごいでしょう。全国で廃車になったSLを集めてお湯を沸かせてるんです。これぞまさにSL老人保養所……」

「これの何がすごいって、ここで生産したお湯を麓ふもとの町に供給して、麓のお風呂や道路温水器を稼働しているとところだなあ。そして、それに

使う蒸気機関車は全国各地からまだまだ使える蒸気機関をタダで引っ張ってきて、それを活用してるんだ。壊れてもすぐに次が来る。よく考えだしたものだ」

時はSL末期。本線上からSLが消え、亜幹線からもSLが消え去ろうとしている時代である。もつとも、一部ローカル地区では今後50年は消えそうにないのだが、少なくとも名前の通った主要線では、SLはもう見られないだろう。

そんな職を失ったSLは解体されるわけだが、ここで国鉄は考えた。どうせなら活用してしまおうと。

解体するにもお金がかかる。そんなお金ももつたない。だがこなら、タダで引き取ってくれる。後腐れもなしだ。国鉄にとって、いい島流し先であつたに違いない。

「しかも、SLはきちんと保存さえしてあげれば、電車や気動車に比べて寿命が段違いで長い。ボイラ屋さんや鉄道屋さんがしっかりしていればほぼ永久に使える機関ですものね」

美里はそう相槌を打った。

休憩所は二階にあつた。足湯スペースがあり、足湯に浸かりながら尾羽の町が見下ろせるようになっていた。

ちようど駅に貨物列車が入ってきたところだった。

「あれ、無蓋車ですね。積み荷は……真っ白？」

「ああ、雪ですね。雪かきしたあとのゴミ雪を集めて溶かして利用してるんですよ。ここらだと雪捨て場が確保できなくてねえ」

なんと、積み荷は雪だった。見れば、なるほど雪捨て場のようなものがある。それにため池のようなものもあり、大量の水を保持しているのが分かった。

「でもこれ、夏場は水が足りないんじゃないじゃあ」

「夏場は暖房要りませんから。水はそれほど要りませんし、ここらの雪は長く残りますからね」

「夏場でも雪が？」

「雪捨て場では、基本的に消えることはないですね。それだけ雪が深いんですよ、この辺りは」

なるほど、流石日本最北。樺太とは恐ろしい土地だと、彼女は思う。「というわけで久留里さん、もう具合は大丈夫ですか？」

「ええ、お騒がせいたしました」

「しかし、なぜあんなところで雪に埋まっていたのですか？近くにこれといって何かあるわけでもありませんでしたが」

「あの……えっと……写真を取るのに夢中になっていたら、つい……」
「ああ……」

美里にとつて恥ずかしい話である。取材にかまけて命を落としかけるなど、記者失格である。

「ま、まあ、稀によくあることですから。ご無事で何よりです」

「うう、ありがとうございます。と、いうわけでついでにいくつか質問させていただいてもよろしいですか？」

こんな時でも取材は忘れない。失敗してしまったなら、なおさらだ。

美里はおずおずとメモとペンを取り出す。もちろんメモ帳とペンは国鉄さんから頂いた国鉄謹製メモセットだ。

それを見て、二人は苦笑いしながらも了承してくれた。

「いいですよ。何から話します？」

「あ、えつとですね、まず今度開業します発鉄についての印象などをお聞かせ願えましたらと思います」

特に意味はないが、ペンを一舐めして備える。

「うーんそうですね。まあかなり難産な鉄道でしたし不安が大きいです。でも、社長さんはなんといいってもあの英雄越谷さんですし、何とかなるんじゃないかなあという思いもあります。と、無責任な感想になっちゃいますねえ。なんてったって、この鉄道に対し一番熱をあげてるのは陸軍の人間ですから……」

言われてみて、ああと気が付く。そりゃあそうだ。海軍さんにしてみてもこの鉄道が成り立たなければ困ったことにはなるんだけど、そこまで熱心に乗り出すほどではないんだ。それに国鉄・鉄道に対して特別な感情を持っているのは基本的には陸軍さんで。海軍さんはたまに荷物を運んでくれる人程度の認識だろうし、空軍さんに至って

は気のいい友人ぐらいの扱いなんじゃないだろうか。

彼は無責任と言ったが、彼ら海軍さんはそういうわけで鉄道に対してほとんど何も思っていない訳で、それはある意味で当然なんだ。というより、こんな風に鉄道に対しプラトニックに考えられる人だからこそ、三軍委の主要な人間になれるんだろう。美里は一人納得する。「あ、でも一つ言えるのは、あの鐵路はすごいですよ」

「と、言いますと……設備とかがですか？」

大熊が、思い出したという風に話し始めた。

「いやいや、そうではなくて。ずっとこの街を守り続けた線路ですからね。会社はどうなるかわかりませんが、あの線路だけは何が起きても残り続けますよ」

「……それは、それだけ重要な路線である、ということですか？」

「いやいや、そうじゃなくて。いや、それもあるんですけど、もつとこう気持ち的な所ですよ。鉄道は人が気持ちで動かすものから」

「はあ……なるほど……」

「釈然としない回答だった。」

鉄道とは人が気持ちで動かすもの。

が、美里にはそれはなにか真理なような気がして、妙な説得力があった。

同じころ、三軍委から兎鉄に派遣されてきた島崎冬香しまざきとうかは研修を終え家路についていた。

目に映るのは開業前だというのに特に変わらない街並み。

尾羽の町は樺太の一番北（正確には最北ではないが、そこその規模を持つ街としては最北だ）にある。もつと正確に言うと、東経53

度34分40秒、北緯142度52分06秒の位置にある。モスクワより南に位置しながら、平均気温でいえばモスクワの方が非常に暖かいという地獄みたいな都市だ、と島崎は思う。

そんな尾羽で島崎がそこそこ満足できる暮らしができてきているのは、今年の冬の終わりから始まった都市暖房、つまり尾羽温泉からながれる温水による道路の暖房、そして集合住宅の暖房のおかげであるが、島崎は思うのである。

これ、本当に大丈夫なの？

かなり離れた山頂からパイプラインでお湯を落としてきているわけだが、そのパイプラインは地表に露出してある。理由は地下の永久凍土を溶かさないためであり、これは地球環境への配慮という世界に先駆けた素晴らしい考え方なのだ。満足げに担当者が語っていたが、そもそも永久凍土が存在するようなところでパイプラインでお湯を輸送って、大丈夫なのだろうか。

……パイプラインで手早く輸送してしまえばいい石油をわざわざ鉄道で運ぶのは、冬季の凍結対策だと聞いた。石油も凍る（何℃か知らないが、たぶん水よりも氷りにくいだろう気がする）寒さで水が凍らないと、本気で思っているのだろうか。

構造上、お湯はいったん蒸留されている。島崎の予想の通りなら、綺麗な透明な氷ができそうだ。

そんなことを島崎は、地面から上がる湯気を見ながら思うのだ。

どちらにしろこの街は島崎を楽しませるにはもってこいのようだ。

「今回はどのくらい楽しませてくれるのかなあ？」

そんなことを、彼女は長い銀髪を揺らして微笑みながら言うのだった。

4. く仕業前く入替：確認良いか？

「でさあ、大宮君はどうするの？」

ぷかぷかと煙をくゆらせながら、三田恵子みたけいこは大宮明雄おおみやあきおに言った。

二人とも共に運転手であり、今は休憩時間だった。三田はかなりの愛煙家で、三田がいるときは詰所は煙で一杯になる。

「どうって、なにが」

「回ってきた署名」

「ああ、あれね」

言われて大宮は、ついこの間回ってきた署名のお願いに関する資料を出す。

「車掌課からのお達しでしょう？正直困るんだよね。お上に従つとくか、仲間を助けるか」

「打算的だねえ」

「女なんてそんなもんよ」

三田は笑う。大宮は、この女の真意まことは読めないと思った。

「ま、署名ぐらいしときましようや。桐谷さんがいるかぎり大丈夫でしょう」

大宮は迷うことなく署名した。その内容に特に思うところがあるわけではなかったが、親しい先輩が行っている署名活動ということもあってなんとなくあげたい気持ちになった。

「おやつさんが居れば大丈夫か」

三田は大宮から紙を受け取ると、流れるように署名した。

「しっかし大宮ちゃん、ここに署名しちやったらウエに目を付けられるよ。あのツンツンエリート眼鏡に」

「まあ……、しょうがないじゃないですか」

「いいの？もしおやつさんが東京に帰っちゃったら一気に首切り最前線よ。それとも、今のうちにあのエリート階級様にゴマすつとく？」

「やめてくださいよ……。縁起でもないし、たとえそうなつてもそこまでしてまで職場に縋りつきたくないですよ」

心底嫌そうに大宮が答えると、三田はケタケタ笑った。

「まあでもさあ、大宮ちゃんその歳で子持ちじゃん？ しかも独り身で。つらいでしょ？」

「まあ、ですけど……」

大宮の脳裏に、一人娘の不安そうな顔がよぎる。確かに、娘のこれからを考えるとあまり不安定な状況にはなりたくない。

「はあ、この際さあ、大宮ちゃん」

「はい、なんですか」

一転真剣な顔で顔を寄せる三田。大宮は不意を突かれてドキッとしてしまう。

「結婚しちゃう？ 私ら」

「はあ？」

そこから出た言葉に、大宮は逆に冷静さを取り戻した。

「いや、ちょうどいいかなって」

「いやいや三田さん。そんな関係でもないじゃないですか」

「うん、まあね。それには他に好きな人いるの知ってるし、本気じゃないわよ」

「な!？」

大宮は立ち上がる。急いで立ち上がったもんだから、テーブルの縁に腹を打ち付け上に置いてあった灰皿がひっくり返る。

「あ、あああ、あああああ」

「まったく大宮ちゃん。そんな慌てないですよ。朋子ちゃんでしょ？」

「朋子ちゃん」

「なあああ!？」

こぼした灰皿を片づけていた大宮は、その場で転び灰を下にぶちまけた。

「ああ、ああああ、ああああああ」

「もう、大宮ちゃん。けど、朋子ちゃん可愛いもんね。佐々木朋子、24歳、運転手。うん、やっぱかわいいよねえ。やっぱ大宮君も可愛くて若い娘の方が好きかあ」

三田は笑いながら片付けを手伝う。流石にからかいすぎたと反省

したが、面白いものが見れて満足だった。

「もう！もう！」

「あはは、ごめんなさいって」

だいたい佐々木さんは自分より年上ですし……。と、大宮は反論になつていない反論をつぶやく。ふてぶてしく制服の灰を落とすと、灰を片付ける三田を手伝った。

「でもね、大宮ちゃん」

灰皿を机に戻して灰を適当に寄せると、三田は真剣な顔で言った。

「はやく、お母さん見つけた方がいいわよ。なんだかんだ言つて、女親にしかできないことは多いんだから。特に女の子は」

それだけ言い残して、三田は部屋を出ていった。それを、大宮は少し考えこんだような顔で見送った。

「つて、三田さん！ ジッポー！ ジッポー忘れてますよ！」

いつものように仏壇に手を合わせる。

「行ってきます」

小さくつぶやいた。

「あなた、今日は？」

後ろから家内に声を掛けられる。

「夕飯には帰るよ」

そう答えながら靴を履くと、玄関の戸を開けた。

「そう、行ってらっしゃい」

「ああ、行ってきます」

宇佐美陶治は、今日もいつも通りに家を出た。

宇佐美の仕事は、今現在においては「街を視る」こと。都市開発部の部長として、街をよく観察しなければならぬ。

宇佐美は開業予定線区の沿線を歩く。今日は団地の方へ行ってみ

ようと思った。

「さて、どう行つたもんだか」

団地とは、この尾羽に新しく造成された地にできた「新団地」と呼ばれる団地群の事である。

発鉄開業に伴い、これまでプレアデス重工専用線及び宅地造成用土砂運搬線として使用されていた路線を民需開放し、延伸することとなった。

その路線の終点が、その新団地である。

新団地へと向かう路線は、開業前なので当然ながらまだ運行していない。試運転の列車が動いていれば社員証を見せて乗せてもらえるのだが、都合よく動いてくれるだろうか。

宇佐美はとりあえず、南尾羽駅へ向かった。

「どうも〜」

「あ、お疲れ様です」

南尾羽駅の駅員事務室に行くと、いつもの駅員が迎えてくれた。

「新団地行の列車、ある？」

「はい、ちよつとお待ちを」

駅員は引き出しから書類の束を出すと、パラパラとめくりだした。「開業前で全部が全部臨時扱いだと、運転報の厚みが大変なことになつていけない」

駅員はボヤキながら運転報をぺらぺらめくる。

運転報とは、臨時列車やダイヤ変更などがある際に、運行管理課などから通達される報告の事で、これを見て駅員などが列車の正確なダイヤを把握するのである。

余談だが、本土4島の国鉄各線ではこの駅報が一般市民でも気軽に見れる場合があるという。よく本州では軍事列車を撮影している鉄道ファンの姿が見えるが、それはこういうところで情報を得ているらしかつた。

もちろん、いくら民需開放とはいえこの鉄道の各路線はほとんどが軍用路線的性格を受け継ぐ、もしくは付与される。一般市民に気軽に

機密情報に触れさせるわけにはいかない。

……。はずなのだが、なぜ鉄道ファンは軍用列車の正確な時刻を知って、撮影しているのだろうか。鉄道ファンの情報網は恐ろしい。

「あー、今日は午後だけですわね」

「おお、午後だけか。わかった、ありがとうございます」

「新団地にはどうやって行かれるんです？」

「北鉄線で行くよ」

「ようがす。北鉄線は伊留真行いゑるまがお次四番線からです」

「ありがとうございます」

駅員に挨拶をして、宇佐美は北鉄線のホームへ行った。

ホームへ着いたところで、茶色い機関車に牽かれた青色の客車列車がやってきた。

「あ、しまった。切符を買い忘れてしまった」

仕方がない。宇佐美はつぶやいて、列車の中で切符を買うことにした。

どうせならと、宇佐美は二等車に乗った。

車内に入れば、そこそこ豪華そうな内装が出迎える。古い車両は、二等車でも内装が洒落ているから好きだ。宇佐美は適当にその柔らかなそうな座席に腰を掛けようとした。

「やあ、宇佐美君」

そんな時、声をかけられた。振り返って声の主を確認すると、それは社長だった。

「社長！ いったいどうしたんですか!？」

「いやいや、私もいろいろと見て回ろうと思ってね」

「そうでしたか。私は今から新団地の方へ行きます。社長はどうされますか？」

「じゃあ、ご一緒させてもらおうかな」

「はい、どうぞどうぞ」

社長はお茶を飲みながらすっかりくつろいでいた。

「これは伊留真行だったな。新団地へはどうやって行くんだ？」

「伊留真から出る東留支線とうりゅうで東留駅まで行きます。そこからは歩きで

40分程度ですね」

「40分!?これまあずいぶんと」

「まあ、こちらの人間にはこれぐらい普通でしたよ」

「そおかあ?うーん、確かに言われてみればそうかももしれんなあ。いやしかし、敷香しすかの街はそんなに大きかったかなあ」

敷香しすかとは、南北樺太のちようど中間点よりちよつと南側にある都市だ。そして、宇佐美の故郷でもある。

宇佐美は、越谷が敷香のことを「しすか」と発音したのに衝撃を受けた。本来はこの呼び方が正しいのだが、今はもうこの呼び方で呼ぶ人間はほとんどいない。

宇佐美はびっくりして、自分の勘違いだろうと思った。

「社長は敷香しすかに行ったことがあるんですか?」

「あ?ああ。君は敷香しすかの出身だったな」

「ええ、そうです」

はて、自分が敷香の出身であることを一度でも社長に言ったことがあるだろうか? 宇佐美は違和感を覚えた。

そしてやはり、社長はしすかと発音している。

「敷香しすかのどのあたりだい」

「ええと、敷香しすか駅のちよつと北の辺りです」

「幌内川ぼろないの支流を越えたあたりかい」

「あ、ええ。よくわかりましたね」

「大池のあたりか」

「ええ!?なんでわかつたんですか?」

ほんぽんと自分の故郷の場所を言い当てられて宇佐美は面食らう。

「川を渡ったところはあれだな、先住民学校があったところだったろ」

「ええ、杜がありました」

「空き地の隣にガミガミ爺が居たな。古村さんだったかな?怖いけどいい人だったなあ。あ、あと海は夏場でも悲しいくらい冷たかったなあ。浜にはよく座礁した船が転がってて、あぶねえから近づくなんて古村さんに怒られたなあ」

「え? あの、社長?」

「空き地で野球をしてたら、古村さんがお茶を持ってきてくれたことがあったなあ。あの人、怖いけど優しい人だったなあ」

宇佐美は呆然と越谷を見る。自分の幼少期の、自分しか知らないはずの記憶の数々がつらつらと語られていく。越谷は、にやりと笑って宇佐美に言った。

「君も当然覚えているだろう？ 宇佐美陶治君。いや、トウジキ君」

トウジキ、この名前で宇佐美の事を呼ぶ人間は、宇佐美の記憶の中では一人しかいなかった。

遠い遠い記憶の底から、急速に鮮やかな景色がよみがえってくる。

「まさか、兄ヤン……。卓志兄ヤン!」

「やっと思ひ出したか、このワレモノ坊主め」

あんぐりと口を開ける宇佐美を、越谷はいっぱいに笑った。

終点の伊留真に着くと、団地の現在の最寄り駅となる東留駅行の電車が丁度出るところだった。

一両編成の電車に乗り込むと、終点の東留までは一駅でたったの5分で着いた。

駅は、それは駅と呼んでいい代物なのかも知らないそれは、駅舎はなく、というよりそもそもホームがなく、なにもない空き地にただ線路の終わりがあり、その線路の終わりの近くに今しがた二人を運んだ電車がぽつんとたたずんでいた。

「これが、『駅』か」

「だ、そうだよ。なんでも団地建築の為に作られたものの、向こうの線路が開通してからは人員輸送も建築資材輸送も新羽線経由になったそうで」

「ここから団地までは歩いて40分、だったな。自動車だと5分くらいか」

「まあそんなところ。このだだっ広い土地は資材の積み下ろしの為。ホームがないのも、貨物扱い線と客扱い線を共用にしたかったからだそうだ」

「ははあ、さてはケチったな」

二人は白い土が露出しているところを「道」と認識し、団地の方へと歩いて行った。

「しかし、驚いたよ。まさか兄ヤンとは」

「さすがに、40年も経っていれば気が付かんか」

「当然だよ。それにまさか英雄サマが兄ヤンだなんて。昔の兄ヤンを知ってる人間ならひっくり返るさ」

「ご挨拶だな。昔の俺は地域の子供たちを愛するヒーローだったろうに」

「えーつと、どつから話をすればいいかな。藪をつついて熊を出した話？ それとも湿地に足を取られて沈んだ話？ あ、女子の服を引っぱがして先生に磔にされた話か」

「やめてくれ、特に最後のは」

とんだ藪蛇、いや藪熊だと、越谷は笑う。

「……でも、あの時兄ヤンが居てくれたら、みんなは助かったのかな」

宇佐美は、ぽつりと言う。

「結局、何人生き残った」

「てー坊、たつく、ぴよん吉、もつちゃん、ヘンサム。全員死んだよ」

「……ゆー子は」

「死んだよ。僕の手を握りながらね。残ったのは腕だけさ」

「そうか」

藪香。そこは革命戦争期の日ソ国境線のすぐ近くの街。

ソ連侵攻と共に、何人もの樺太の市民が犠牲になった。

「柚香ゆいこだけは、護れると思っただんだ」

越谷には、言葉が見つからなかった。

もう、3・40年も前の事である。戦争の爪痕は既に消え、日本は樺太景気に沸いている。

それでも、あの戦いを樺太で経験した人間の、その苦しみは終わらない。

新団地に着いた。業者の出入りが激しく、賑わっているように見えた。

「引越しか？」

「第一次入居は今週中、開業初日にいっせーのーせで供給開始だそう
だ」

ガラガラと台車の音が響き、えっさほいさと家財道具を運び入れている。

「この輸送は全部鉄道かい？」

「らしいね。内見の為だけに特別列車も走ったらしい」

完全に鉄道に依存した街である。鉄道ファンからしたら延髄モノ
かもしれないが、住むことを考えたら地獄だろう。

「街の周辺は、店は少ないな」

「基本的に尾羽の街まで出るからねえ。ここの路線だけは安定した収
入が見込めそうだ」

「しかし、開発となると厳しいんじゃないか？」

資材の搬入や緊急時の事を考えても、一本ぐらいまともな道路が欲
しい。

「直接尾羽へ出れる道路がないだけで、尾羽よりも近い土御や佐保に
出る街道は用意されてるから。そこまで不便はないと思うよ」

とはいっても、ここにはそれなりの人口が住むことになる。規模が
小さければ問題にならなかったことも、規模が上がれば問題になるこ
とは多々ある。

「この計画の主導はウチか？」

「いや、行政……樺太庁だね。一応その時僕も計画に参画してた。そ
の経験から言わせてもらうと、計算上はまあ大丈夫だろうし、鉄道が
しっかりしていれば問題ないし、そのうち道路も整備する。だそう
だ」

「まあその通りなんだろうが、鉄道不通時の対策やなんかはあるのか
？」

「一応商店はあるし、食糧備蓄はあるし、燃料も大量に備蓄があるから

困ることはないんじゃないかな」

なんとも心許ない備えである。

「それで大丈夫なのか？」

「卓にい、ここらで一番確実な輸送機関は鉄道だよ。いったん雪が降れば一般車はどのみち使えない。鉄道が止まったら、それこそ災害級だから、軍の応援を要請すべき事案だというのが樺太庁の考えだよ」
「なるほどな、そもそも長期にわたって不通になるような事態だったら、そもそも他もダメか」

そんなことを話しながら歩いていると、新団地駅に着いた。

「一応それなりに店舗はあるのか。だが、なんだか不思議な店舗だなあ」

その店舗は鉄道弘済会の店であるらしかったが、駅の売店と言うにはきちんとした建物になっているし、八百屋と言うにもきちんと壁で囲われて商品は棚に陳列されているし、スーパーと言うには小さかった。

「ああ、これは“コンビニエンスストア”だよ」

「コン……なんだって？」

「コンビニエンスストア。アメリカでは流行りなんだとさ」

「どんな店なんだ？」

「まあ、出来合いの総菜とか飲み物とか、なんでも売ってるようなところらしいよ」

「はあ、最近はこのというのが流行りなのか？」

「それはどうだろう。少なくともこの形態のものは東京にはないそうだし、事業主は中小と鉄道弘済会だけだし。先進的ではあるんじゃないかな？」

「コンビニエンスストア。耳慣れない言葉だ。だが確かに便利そうではあった。」

「この“コンビニ”がこの街には至る所にあつて、暫くの食事ぐらいならここで買えるようになってるんだそうだ」

「運営は弘済会が？」

「だねえ。儲かりそうだったら頼み込んで譲ってもらukai？」

冗談交じりに宇佐美は笑う。

鉄道弘済会は、駅構内の売店を運営している団体だ。もちろん国鉄系……というより、鉄道殉職者遺族の働き口確保や傷痍国鉄職員などへの福祉を目的に作られた鉄道系福祉団体だ。

「しかし、弘済会か。樺太にも影響力はあつたんだな」

「ま、鉄道のある所に弘済会あり、だよ。ありがたいことだ」

「それもそうだな」

少なくとも、新団地において住民が特段の苦勞を強いられるわけではないことが分かっただけ安心する。

「そういえば、郵便やなんかはどうするんだ？」

「ああ、それはねえ、ここはちよつと面白いんだ」

そう言うのと、宇佐美は改札口の方へ行つた。

「見てくれ兄貴。ホームが1から4まであるだろう？」

「ああ、あるね」

改札口から見て左から1・2・3・4とあり、1・2番ホームは改札口から直接、3・4番ホームはいったん構内踏切を渡つて向かう。

「だけど見てくれ。4番線があるだろ？ その隣にもう一個ホームがあるんだ」

確かに4番線だけがホームが二つあり、線路を挟んでいる。さながら名古屋駅……いや、京阪神電鉄梅田ターミナルや武蔵野鉄道東上線の池袋駅と言つた方が解りやすいか。

「あれはなんだ。降車ホームか？」

「あれは5番線。郵便・小荷物用ホームさ」

手招きされて入り口の方へ行つてみると、改札内からは直接出入りできないようになっていた。そして、改札の外からは自由に行き来できるようになっていた。

「どういうことだ？」

「簡単なことさ。ここに郵便車と荷物車を常駐させておいて、その車両の中で手続するのさ」

だからこの街の郵便ポストは駅前の一か所だけ。そう付け加える宇佐美。確かにそれなら行政サービスに割く経費をギリギリまで節

減できるだろう。

「どうせ住民は駅前に集まるわけだし、それでいいのか」

「そうそう。そんなもってその建屋には郵便受けがある。帰りにここよって郵便を取って家まで帰るのさ。小荷物用の台車も貸し出してるとし、郵便・小荷物での不便は少ないはずだよ」

近代的を越えた仕組みで街が回るように設計されている。さながら実験都市のようだ。越谷はうすら寒いものを感じた。

「道は綺麗で近未来的な設備もある。これは人が来るかねえ」

「来る、と少なくとも樺太庁は踏んでる。ここまで金を使わずに頭ひねったんだ。新しい結果が出るものと、期待しているよ」

極限まで諸経費をケチり、ミニマム化した街。

徹底的に既存の社会構造を無視し造り上げた街。

「これが、樺太のスタンダードになるのか？」

「何もない、歴史も物も人も何もない樺太だから出来る事ではあるよね」

「庁としては、どうなんだ？」

越谷は宇佐美の目を見据える。

「……。庁としても、まだこの街がうまくいくかどうかわからない。この街は確かに実験都市だ。成功すれば省力型の素晴らしい都市モデルになるだろうし、失敗すれば机上の空論だったで終わる。まだ、決めかねてるよ」

「なるほど、我々次第という訳か」

あまりにも、前例がなさすぎる。見よう見まねでやろうにも、お手本が居なければ仕方がない。

「じゃあ聞く。庁は失敗を望む？ 成功を望む？」

「当然、成功さ。これさえ成功すれば、この国の人口増加問題を一網打尽にできる。と、言うことを口実にして樺太にお金が入ってくる。樺太の可能性を内外に示すのに、ちょうどいい実験体さ」

「なるほど。では、庁は協力してくれるとみて間違いないかい？」

「この街の事なら」なんでもやるさ。そう、なんでもね」

「わかった。ありがとう」

誰かが言った言葉、「政界には敵か味方しかない」。これが事実とするならば、ひとまず樺太庁は味方のようだ。それが、事実ならば。

まだ使われていないホームに電車が到着した。

「おうい、乗せてつてくれよ」

「あ、はい」

ドアを開けてもらって中に入る。

電車は1000系。典型的な通勤電車で、西は関西、北は樺太までのそこそこ通勤需要が見込める所に配備される国鉄103系の亜種。均一化された日本を体現するような車両だ。

だが、そのところどころに北国の装いを見せる。

「さっきの鉄道の抗堪性の話だね」

越谷は思い出したように切り出す。

「どの程度の雪まで堪えることが出来るかね」

「一応試算では、冬季の運休率は10%以下だとしている。けれど、これに根拠があるかどうかは……」

「降雪時のマニュアルなんかは？」

「雪がない季節の方が珍しいぐらいだし、あるとは思うけれど」

外を見れば、まだまだ雪は残っている。

「東京の雪とは絶対に違うし、豊原の雪とも違うだろう。さて、これをどうするかだなあ」

「やはり心配かい？」

「冬季の運行実績が見当たらないんだ」

列車は発車した。揺れも少なく加速し、心地いい揺れが二人を揺らす。

「そりや当たり前だよ兄ちゃん。基本的に冬季は止めてたんだから」

「ああ、やっぱりそうか」

越谷は先日、降雪時の対処の参考にと軍時代の運行実績を調べていたが、冬季の部分だけごとそり資料が抜けていたのだ。

「正直、雪ばかりはやってみないことには。一応降雪時試運転はした

けれども、春口だしね。運用していく中で本当に大丈夫かどうかは、実際に通年で運転してみないことにはわからない」

そう、わからない。雪は、大自然は、何がどうなるかわからない。架線凍結防止や除雪の為に高頻度運転をすべきなのか、それともダイヤ乱れを防ぐために間引き運転をすればいいのか。

除雪車の投入タイミングも、運行停止のタイミングも、誰一人としてわかっていない。

何もかもが手探りの状況で、事故だけは避けなければならない。

「ともかくこの辺りはもう一度桐谷君と話を詰めないとな。ああ、問題が山積だ」

「ひとうひとつ、潰していこう。大丈夫だよ。きつと」

「ああ、だといいいんだがな」

真っ白のレールの上を、列車はただ走って行った。

5. く仕業前く入替：進路よいか？番線確認よいか？

「……であります、実際に異常時に実施した際にはやはりあまりにも危ないと報告されています。かの有名な朝倉軌道でさえ実施した事がない方式を採用するのは正気とは思えません」

会議室に声が響き渡る。

現業からの叩き上げである越谷にとっては懐かしくもあり、そして興味深いものの連続だった。

そして今、最も越谷の興味をそそられた話題が、「車掌という役職の是非」についてだった。

ワンマン運転、というものがある。これは運転士のみが乗車し、運転士が車掌業務を兼ねるといった方式だ。車掌を廃することで人員費用を削減でき、効率化になる。

当鉄道では資金難により車掌を規定数雇う事ができない。そこでこの「ワンマン方式」を採用し事なきを得ようとしたわけである。

これに今回の会議で異を唱えたのが、車掌係の小林主任だ。彼は会議で堂々とワンマン運転のことを「安全に重篤な危険を及ぼす行為」として非難した。彼によれば、ワンマン運転により運転士の責務が増大し、結果として注意が散漫になり危険行為を誘発する、ということだった。

「ですので、運転課車掌係……いえ、運転課としては我が鉄道のワンマン運転推進に強く反発します」

「そうか、報告結構。だが、君の提案が通ることはない。お疲れ様」

幸谷が小林の結論をすげなくあしらう。瞬間、嫌な緊張感が場を支配する。

「どうせそう言うと思っていましたよ。統括本部長サマは安全軽視の支配人階級の方ですからねえ。室内でぬくぬくとペンを転がしてる人間に現場の危機意識が伝わるはずはない」

「そつくりそのまま言葉を返すよ。現場の人間ごときが経営の機微をわかるはずがないだろう？君は指示に従い列車を動かせばいいだけ。

口をはさむな」

「列車をどう動かし、どう運用するかを最終的に判断するのは現場だ。室内育ちのアンタさんが何をどうわめこうが、現場が『安全でない』と判断したら列車は動かない。それをご理解ください」

「それは怠慢の言い訳か？働きたくないなら働かなくていいんだぞ。車掌職を廃止するだけだ」

「車掌だけじゃない。運転士も、指令も、駅員も、整備士も。運転に携わるすべての人間は、この危険な運転を許容しない！」

「何を！」

「おい、もういいだろう」

越谷が割って入る。

「幸谷君、落ち来なさい。小林君もだ」

「しかし……っ！」

「小林君、私だって現場からのし上がってきた人間だ。君の危機感はずごくよくわかる。必ず、解決しよう」

越谷はとにかく小林をおさめようと譲歩の姿勢を見せる。

「ですが！」

それを聞いた幸谷の鋭い声が、越谷の発言を咎める。越谷は短く手で制した。

「だが、知つての通りこの鉄道には金がない。火の車がそろそろ燃え尽きそうな所まで来ている。君の提案を受け入れるのにも限度があるんだ。わかるか？」

「……当然」

「今日のところは引き下がってくれ。申し訳ないが」

小林は、喉元まで出かけた言葉を、ぐっと飲みこんだ。そして、精一杯の渋面を作りながら言った。

「いずれ改善されると確約してくださるんですね？」

「ああ、善処する」

「ならば」

小林は尻切れトンボに返事をする、そのまま去って行った。

「彼は？」

「主任車掌の小林です。一応、車掌係では長ですね」

会議が終わった後、かの車掌について幸谷に聞いてみた。

「出自は？」

「警備会社で勤務していたようです。その前は軍人だったとか」

「軍人？」

「ええ。なんでも、空挺だったそうですよ」

「空挺か。こりや私よりも優秀かもしれない」

「まったくご冗談を。しかし社長、あんな約束をしたことは看過できませんね」

幸谷の顔が厳しくなる。

「ああ、だろうね」

「ワンマン運転の安全性は証明されています。それにもし問題があるのであれば、それを建設的に解決しなければなりません。当鉄道は労組や組織の硬直化と決別し刷新された斬新で進歩的な仕組みを取り入れ、日本の鉄道の模範となるべきなんです。きちんと彼の意見を否定しませんと、禍根を残します」

「ああ、もちろん。もちろんだとも」

「社長。社長にとっては現場の人間の意見を否定するのは抵抗がおありかもしれませんが、しかしここはあえてやっていただかないと」
「分かっているさ。だが、少し様子を見てみよう」

幸谷の話を遮る。幸谷は越谷の考えをわかっている。だから反抗する。

「現場の意見を尊重するんですか」

「そうじゃない。ただ、現場があそこまで騒ぐのだから何かしらの理由はあるだろう」

「わがままですよ。ただの」

「かもしれないね」

「聞くんですか？現場のわがままを」

幸谷は非難の声色を隠さない。

「それはここから見極める」

「ですが……」

「いいじゃないか。とりあえずは君の思い通りに行く。気に入らなければなあなあにして押し通してしまえばいい。君は得意だろう?」
「……」

幸谷は押し黙る。越谷はそれをいいことに話を変えた。

「さて、私はこれから市長と会ってくる。君は?」

「同行します。場所は?」

「市長室だ。だからえーっと」

「9階ですね」

「ふう……。会議室よりはマシだな。時間もない。行こう」

越谷は予定にかこつけて、この話を完全に有耶無耶にしたのである。
る。

市長室に入ると、目の前におおよそ63には見えない男がどつしりと構えていた。体は細身だが、雰囲気で圧倒してくる。そこには有無を言わせない力があつた。

「よろしく願います。古橋市長」

その男は、この街の市長だつた。

「どうも、越谷社長。市長の古橋です」

そう頭を下げると、市長は話を切り出した。

「さて越谷さん。どうですか?この街は」

「良い街だと、率直にそう思いました。私の故郷によく似ている」

「故郷、と言いますと……」

「敷香です。ソビエトに焼かれました」

敷香。越谷と、そしてその幼馴染である宇佐美の故郷だ。そして、かの戦争で侵略され、そして消えた。

それを聞いた市長は、ややあつてから納得した表情を見せた。

「ああ、英雄殿は樺太の出身でしたか。なるほど、それでそのご活躍で

すか」

「それも、私の中では大きかったとは思いますが」

越谷は適当に相槌を打つ。

「中国戦線での大活躍は聞き及んでいますよ。中華民国救国の英雄。日本中、いや、ともすれば世界中が知っている。いやあ、いつか武勇伝をお聞きしたいものですが、今日は仕事の話と行きましようか」

秘書がお茶を出してくれた。茶柱は立っていないなかった。越谷はそれに手を付けずに話をつづけた。

「では、何をお話いたしましようか」

「とりあえず、越谷さん。あなたにはこの街の事を深く知って頂きたい。例えば、この街の置かれている状況、地歴政治、その他諸々……。この街についてはどれくらいご存知ですか？」

突然のクイズに、越谷は困惑しながら「教科書レベルです」と答えた。それが精いっぱいだった。

それを聞いた市長は、申し訳なさそうな笑みを浮かべながら、満足そうになつた。

「ああ、お気になさらず。教科書に尾羽が載っているという事実をご存知である時点でなかなかかなものですよ。ちなみにその教科書とは？」

「娘の社会科の教書です。日本のエネルギー産地一覧、などと書いてありましたねえ」

「まあ、その程度の認識で結構でしょう。教科書にそれ以上の情報は期待しませんや。それにテストでそんな問題も出ませんでしように。やれ今の教育は社会科をめっぽう軽視する。いけませんなあ。この日本の新潟と秋田に油田があることさえも知らない」

「その新潟と秋田の油田群を抑え、堂々の湧出量一位に君臨するのがこの尾羽油田、でしたな」

越谷が小学六年生の娘の教科書の内容をおさらいする。それだけで市長は喜んだ。

「ああそうです、そうですとも！ここは尾羽。日本の石油の頂点。そして石油だけでなく石炭も合わせ、日本のエネルギーを根底から支え

る、まさにここは日本のエネルギー貯蔵庫だ」

「聞き及んでいます。さすがですね」

適当に相槌を打つ。いつの世も、自らのアイデンティティを素晴らしいと思うのは人の性であるし、越谷はその人間的な行為は責められたものではなくむしろ称揚されるべきものだと考える。

どこにでもいる、田舎町の首長だ。越谷はふと、今は亡き故郷のにくつきオヤジ達を思い出した。

「だが、越谷さん。それはあくまでも建前だ」

瞬間、空気が変わる。目の前の男のそれは、もう田舎町の隣家のお節オヤジではない。

「……対ソ北方軍事要塞、ですな」

越谷が言うと、市長は首肯する。

「その通り。この尾羽は、文字通り日本の北の果てに、そしてソ連との国境線に存在する」

「海を隔てて、ですな。だが、この凍てついた海を守る空母は……」

「一隻もない」

夏季にしか使用できない海に、持ってこれる空母はない。つまりそれは、そう遠くない敵本土からの攻撃に、耐える決め手がないということ。

「その為の不沈空母。それが尾羽」

「ええ、私も理解しています。この街は決して雇用創出経済政策や石オイルマネー油の為にできた街ではないと」

幸谷のつぶやきに越谷が言う。

「結構。流石は英雄様だ。よくわかってらっしゃる」

「市長、私は産まれもつての地上勤務者陸好きでね。あまりこの手のお偉方の“空中戦”は嫌いなんです。市長、我々は鉄道だ。“事故”は何としてでも防がなきゃなりません。そのために必要なのは、明快で間違えようのない指示、要望だ」

「分かっています、分かっていますとも。私だってあなたをからかっておどかして忤度させようってんじゃない。そんな阿保でくだらないことは馬鹿面ひっさげた中央のモンにやらせておけばよろしい」

市長はゆっくりタバコに火をつけた。

「軍を抱えていることを、軍の下であるとの鉄道であるということをしつかりと考えろ、ということですか？」

幸谷が畳みかける。市長はゆっくり紫煙をくゆらせると、つぶやくように答えた。

「逆でさア」

「逆？」

「越谷さん。鉄道は血液だ。血液がまともに動かなくちや都市はまわりやあせんですよ。血液が軍の事ばつか考えてちやあ、まともに酸素が行き渡りませんですよ」

「つまり……」

「ほどほどにしてくんせえ。この街はまだまだ、だれに何を言われようと大きくならにやいかんのですよ。軍を支えるんだつてエ言うならですよ、きちんとその“城下町”をしつかり立てなきやアいけませんよ。これは、織田信長の時代から変わらん事です」

「城下町なき軍郷は、確かに心許ありませんね」

「越谷さん。今は街を大きくすることだけを考えたい。誰がどこで何をしようとかだ」

市長は、越谷をまつすぐ見据える。

「お願いしますよ」

越谷は、暫しの間市長の目を見つめ返した後に、これだけを言い残した。

「市長、都市の発展は鉄道の本望ですよ」

「さて、これで一段落かな」

越谷は市長室から隣の会議室に移動し、次の海軍高官との面談に備える。そして今やつと、資料の整備が終わったところだった。

「久留米くん、すまないね」

「いえ、慣れていきますから」
彼女はにこやかに笑った。

越谷は、本当に優しい笑い方をする人だなあと考えた。妻がいなかったら、手を出していたかもしれない。いやいや、彼女は28歳だ。越谷は今年で49。戦争さえなければ子供でもおかしくない年齢だ。さすがに許されないだろう。

越谷の思う彼女の魅力は、何と言ってもその優しい雰囲気と顔だち、そして地に付きそうなほど長い髪だろう。半面、前髪はそこそこ短く、その優しい顔がはつきりと見える。どこことなく、その年よりも落ち着いて見える。初めて会った時も思ったが、筋肉が表に見えてこない。しかしながらそれは引き締まってないということではなく。すらつと美しく伸びた身体は腰にのみ女性らしさを見出せるが、それがかえって官能的だった。

陸軍に女性が入るとたいいていゴリラのようになる——と越谷は聞かされていた。失礼な話である——らしいが、海軍だと筋肉はそこまではないのだろうかと越谷は思う。

だが初めて会った時彼女は陸戦隊だと言っていた。その事実が越谷を不思議にさせた。

「そういえば、君は海軍だったね」

なので、越谷は直接聞いてみることにした。

「はい。といっても写真撮影部隊ですけど」

「ああ、斥候なのか。あと記録もか？」

「はい。そんなところですよ」

越谷は合点がいった気がした。彼女の微笑みは聖母そのものであり、戦闘をこなすようには見えなかったからだ。後方でないのが不思議でならないが、それでも偵察なら全面的な戦闘の機会は少ないはずだ。

……もつとも、敵に見つからなければ、だが。

「入隊は写真中隊です。出身が写真学校だったもので」

「ほう、写真学校か。日芸とか？」

「いえ、東京写真学校です。出版業界とかも目指そうかなあと考えた

のですが、やっぱり海軍かなあと」

「どうして海軍なんだ？他にもいろいろあつただろうに」

東京写真学校はそこそこの有名な写真学校だ。そこをきちんと卒業したのならほかにもいろいろの道があつただろうに。

「先輩の影響です。先輩が『お前の力が必要だ』って言うてくださいつて。憧れの先輩だったのでそのままついていっちゃいました」

「では海軍にあこがれていたわけではなかったのか」

「ええ。戦闘とかそういうの、苦手ですし」

垂れた長い髪がふらりと揺れる。甘い香りが漂う。蚊も殺せなさそうな雰囲気を通り、やはり彼女は荒事は苦手のようだ。

「出身は東京か？」

「いえ、稚内です。海と流水がきれいなところですよ！つて、ここもそうですね」

「ここは流水がキレイどころか、流水に閉ざされてるからなあ」

彼女が微笑むたびに遠赤外線が出ている気がした。少し肌寒かった部屋が、あつたかくなつた気がする。

しかし、ふと越谷は思い出した。越谷が初めてこのビルに入った時、すごい形相で越谷を睨んでいた女性がいた。今から思い出せば、それは彼女だったように思うのだ。

「社長は国鉄から来られたと聞いていましたが、どんなことをやっていたんですか？」

「私か？私は国鉄西東京鉄道管理局というところの長をやっていたよ。丁度通勤五方面作戦の時期でな、中央線の再整備なんかをやっていたな」

「国鉄西東京鉄道管理局というところ、最近できたところですよね。その前はなにをやっていたんですか？」

「その前進の組織である国鉄東京鉄道管理局の八王子管理所にいたよ。あそこは楽しかったな。毎日がお祭り騒ぎだった」

越谷は、何かがおかしいと思ひ始めた。嫌に詳しいし、そして嫌に迫りしてくる。

なぜ目の前のほんわか美少女はわざわざ知っていること(若しくは

知らなくてもいいこと」を聞くのだろう。

「八王子管理所、ですか」

彼女の表情が、少し消えた。

「確か、帝都テロの際襲撃を受けていましたね」

「ああ。悲しい出来事だったよ。同僚が何人も死んだ」

「社長、知っていますか？他の管理所はその職員が放棄して自主的に赤軍に加担していたんです。でも、八王子管理所は赤軍になびくものがいなかったため、占拠する際に赤軍は襲撃という形をとらざるをえなかった」

「ああ、当然知っているさ。あれは国鉄の在り方を大きく変えたからな」

そして、越谷も当事者だからだ。

「でも私、疑問なんです。なぜ、赤軍は八王子管理所を襲撃したとき、簡単に占拠できたのかと」

久留米が立ち上がる。その顔は、笑顔が能面の様に張り付いたびつな表情をしていた。

「何が言いたい」

「我々は思うのです。中に内通者がいたのではないかと」

彼女はその長い髪をひとつに束ね始める。

「そうか。その可能性は高いかもしれないな」

何が言いたい。

「ええ。そして思うのです。その内通者があなたでない可能性はどこにもない」と

越谷は言っている意味が解らない。つまり、彼女は越谷を疑っているのか？

「要するに、私に悪魔の証明をしろというのか」

今ここで証明することは、どだい無理な話だ。

越谷は次の言葉を待つ。いくらなんでも失礼で、いくらなんでも不躰すぎる。越谷は恐怖よりも、怒りが先に立った。

「そうです、証明です。あなたに、証明をしていただきたいんです。そう、この命をもつてね！」

次の瞬間、彼女はどこに忍ばせておいたのか短刀を越谷に突き付けてきた。越谷は慌てて回避するが、大きく姿勢を崩す。

「何が目的だ！」

後ろ回りに受け身を取りながら越谷は叫ぶ。とにかく時間がほしかった。

「うるさい、証明しろ！オマエが潔白だということを！」

安直な罵倒と共に彼女は大きく刃を振り、それは越谷の首元をかすった。越谷はのけぞると同時に大きく後ろへ間合いを取った。

「いいだろう。来いよ。恐れなんか捨ててかかってこい。返り討ちにしてやる」

越谷の頭は、完全に20数年前の中国戦線に戻っていた。あの時の、命と命が否応なしにぶつかり合い削り取られていく緊張感とまよかしの高揚感が越谷を包んだ。

越谷は集中する。敵は目の前に見えている。だが、気配はそこに存在しない。相手の気配が見えない。だから、どこからどのように襲われるか見当がつかない。よって、間合いが図れない。

だから越谷は集中する。すべてに神経をとがらせる。すべてを感じ取る。

「英雄を、なめるな！」

越谷は正面に向かって手刀を切った。すると、まるで分っていたかのようにそこに彼女の手があった。

「甘いー」

突進を阻まれた彼女はいったん退き、そしてまた突進してくる。越谷は合気道の要領で彼女の内側に入り込み、投げ飛ばした。

彼女はどんな受け身を取ったのかすぐに体勢を立て直し、再度の突進を敢行する。その突撃はあまり意味のないように思えた。

しかし次の瞬間、越谷は悟る。それは越谷にとって絶妙に避けがたいものであると。

ええい、ままよ。越谷は避けられないならば自ら行くのみと、手を一本犠牲にする覚悟で刃に対し手刀を差し出す。

しかし彼女はそれを巧みにすり抜け、越谷にせまる。

喉元に刃が迫る。越谷は終わりを覚悟した。

「おい、やめんか久留米！」

その時、怒声が横から飛んできた。それと同時に久留米は自ら後ろに弾き飛ばされるように後ずさった。

「まったく、世話の焼ける奴だ！」

その声の主は、肩をいからせながら部屋に入ってきた海軍人だった。

「いや、どうも失礼」

髪を元に戻した久留米がお茶を淹れた。

「うちの阿呆がご迷惑をおかけいたしました。お怪我はございませんか？」

「ええ。なんとか」

越谷は混乱していてそう答えるのがやっとだった。

海軍人は二人。共に三軍委の人間だった。年老いた方が海原、そして若い方が大熊だった。

「そうですか。いや、中華民國救国の英雄には無用な心配でしたかな？」

「いやいや昔の事ですよ。革命戦争なんて……」

「何をおっしゃいます。革命戦争での大活躍、海軍にも届いております。そして兵役を終えられてからは国鉄に戻り、そこでも大活躍。そして帝都テロでは混乱の収束にご尽力いただきました。八王子管理所が赤軍に占拠された際には、一番乗りで駆け付け、生き残った同僚を救助しながらの大立ち回り。貴方が率いるたつた数人で八王子管理所を解放したと聞きます」

過去の所業を並べ立てられて、越谷は穴にでも入りたい気分だった。確かに越谷はいろいろなことをしてきたし、それなりに表彰されたりしたが、だがしかしそんな大それたことはした記憶がないのだ。

「なあ久留米、なんだってこんな英雄を襲おうと思ったんだ」

そういうと、久留米はフンと鼻を鳴らして言った。

「英雄が愛国者だとは限らない」

馬鹿なことを。海原はこめかみに手を当てて呆れかえってしまった。

その後、海原・大熊両名と越谷は明日の開通式の打ち合わせを軽くした後、認識の共有を行ってそれで用事は終わりだったらしく、そのまま帰っていった。

「で、久留米くん。これはどういうことだ？」

久留米はもう越谷の殺傷には興味がないらしく、短刀はすでに服の中にしまった後だった。

「言ったじゃないですか。八王子管理所内部に内通者がいた可能性がある。これはその調査です。当時八王子管理所内で無傷だったのは貴方だけ。そして、貴方は前社長である喜多川容疑者を強く推した人物に推薦されて社長に抜擢されたと聞く。であれば、嫌疑をかけられるのも当然かと」

横領その他ソ連に資金を横流ししていた容疑で逮捕された前社長・喜多川康志は、たしかにソ連（正確に言えばソ連の協力組織であるとされる共赤会）とのつながりがあったのは事実だ。

そして、喜多川康志をこの鉄道の社長に推薦した人物が越谷を推薦した、というのもまた事実のようだった。少なくとも越谷はそのことを聞いており、そしてそれを不名誉に思っているらしかった。

「あのかな久留米君。私は八王子管理所が襲撃を受けたと聞いた時、まっさきに駆けつけてだな……」

越谷は其の疑惑を晴らそうと弁明を試みる。しかし、それに対しての久留米の反応は、意外なものだった。

「ええ、知っています」

「じゃあなんだ。私が手柄を得るためにわざと八王子管理所を襲わせたというのか？」

越谷は憤慨する。あの時、あの日、越谷は確かに同僚を失ったのだ。

国鉄マンの越谷にとって、同僚は家族だ。

「いえ、私は貴方がアカに通じている人間でないことを知っています」
「……は？」

越谷は訳が分からなかった。先ほど久留米は「オマエの無実を証明しろ！」と言つて襲つてきたはずだ。それなのに「越谷が潔白であることを知っていた」とは、矛盾している。

「ですから、私は社長が純粹な愛国者であることを知っていましたし、そんなことをするような人物でないことも知っていました」

「では、なんで襲つて来たんだ？」

「そうしないと海軍情報局が納得しないんで」

「海軍情報局う？」

越谷は急に出てきた名前にびつくりする。海軍情報局と言えば共産系勢力を監視するために設置された海軍の機関であるということ、越谷も知っていた。だが、なぜ今それが関係しているのかはわからなかった。

「ええ。正確に言えば私の上司です」

「ああ、君は広報の人間ではないのか？」

「はい。海軍情報局の職員ですよ」

久留米はあっさりと自分の本当の出自を明かしたが、あっさりすぎて越谷は思考が追い付かない。さっきから越谷はずつと置いてけぼりである。

「私は海軍情報局に疑われていたのか……で、面倒だから始末しろと命令が来たわけか？」

「いえ、調査しろと言われました。私は調査するまでもなく知っていました、一応形だけでも調査しようかと思ひまして」

「なるほど、あの暴行は調査だったのか。確かに『証明しろ』と叫んでいたからな。いやどんな調査だ」

調査で殺されてはかなわない。越谷は心底ほつとした。

「しかし、私の潔白を『知っていた』とはどういう意味だ？」

「ああ、それはあれです。社長がお世話になった議員さんに、私も助けられたことがあるんですよ」

「それは……」

「勤皇党の岩佐議員です」

「ああ、君は岩佐さんの関係者か！」

「あの方のお知り合いであれば、まあそんな疑うようなこともないかと思ひまして。でも、ウエが納得しなかつたんです」

なるほど、と越谷は納得しかけて、それがなんの理由にもなつてないことに気が付く。

嫌疑にも潔白にも証拠どころか論すらまともにならないわけで、そんなものを根拠に行動を起こす改めて海軍情報局の杜撰ずさんすぎる運営に疑念が生ずる。越谷は心底近づきたくないと強く思った。

「おかげさまで報告書に堂々と『間諜の恐れなし』と書けます。ご協力感謝します」

「うむ。感謝されておこう」

越谷は鷹揚にうなずいた。別にふざけたのではなく、彼女の突進を避けた時に首を痛めたために軽くうなずくことができなかつたのだ。

「あ、それと。私が海軍情報局の人間であるということは秘密になっています」

「わかつた。他言はしないよ」

越谷はそう約束した。確かに、知られてはまずいだろう。越谷には当事者ということで教えてくれたのかもしれないが。

「秘密ということは要するに、みんなこの事を知っているという意味です」

「なるほど、公然の秘密というわけかまぎらわしいな！」

彼女はこの街に来て以降、こんなことを繰り返していたのだろうか。であればもうすでに大部分の人に知れ渡っているのだろう。

「はあ、明日は開通式だというのに、もう疲れてしまったよ」

「後程ウエの人間にお礼をするよう請求しておきます」

「はは、まあいいさ」

越谷と久留米の間を、明けていた窓の間から流れ込んだそよ風が通り抜けた。

「さて、この鉄道はどんなふうになっていくのかねえ」

少なくとも、波乱に満ちたものになるということだけは、確実なようだった。

第一仕業

6. 第一仕業→1レ：出発進行

樺太にしては珍しく真つ青に晴れ渡った空が、まるでこの街の門出を祝福しているかのようであった。

凍てついた地平線の向こうから、かすかに光線が見える。真つ青な空が、徐々に明るさを取り戻していくのを見つめながら、越谷はひとり立ち尽くしていた。

「昨日は久留米に襲われたそうじゃないですか、社長」

桐谷は越谷に声をかけた。時刻は朝5時を過ぎたところである。

「なぜ知っているのだね」

からかうように笑う桐谷にこう聞くと、

「そりゃあアンタ、公然の秘密だからですよ」

と返すので越谷は震える思いがした。

「しかし社長、そのあと幸谷のやつとも喧嘩したらしいじゃないですか。一体何があったんですかい？」

越谷は、事の顛末を桐谷に話した。

「あれはね、久留米君の大立ち回りが終わって一服ついている時だったんだが……」

「よかったですか。社長」

「何がだい」

「ダイヤ改正記念式典ですよ」

社長席に戻ると、幸谷が待っていた。久留米が入れてくれた珈琲を飲みつつ話していると、幸谷はこんなことを言ってきた。

「明日の記念式典では、東京駅に各界のお歴々が招待されているようです。当然、貴方もだ。そして明日のダイヤ改正は貴方の悲願でもある。本当によろしいんですか？」

そういう幸谷に、越谷は短く答えた。

「まあ、いいや」

「本当にですか？」

幸谷は、眉をひそめながらそう言った。

「今回のダイヤ改正の立役者は、だれが何と言おうと貴方じゃないですか。少なくとも世間はそう見ている。昭和45年3月改正、つまりヨンゴースン白紙ダイヤ改正は、事実上の平時復帰改正です。それは貴方にとって大きな意味を持つはずだ」

「もちろん。ここまで来るのに、長くかかったもんだ。あれからもう、7年が過ぎたんだからな」

ことは数年前まで遡る。

1963年。それは悪夢の年であったと言えよう。経済が破綻し、その混乱の中で帝都を破壊しつくすテロが起きた。

東京駅は崩れ去り、鉄路は粉碎され、多くの鉄道員が誇りを引き裂かれながら命を落とした。

その時命を落とした鉄道員の中には、越谷の盟友も多数含まれている。

八王子管理所。それはテロで標的になった重要拠点であった。

故に狙われ、彼の同僚部下のほとんどが殉職、ないし取り返しのつかない後遺症を負った。

同僚であった八王子管理所の面々だけではない。本社やその他都心に居た仲間・親戚・知人はことごとく死んだ。

越谷はその骸の無念を晴らすために、今日ここまでの帝都復興の一助となるべく、鉄道整備を行ってきた。

その集大成がこのヨンゴースン白紙ダイヤ改正である。

白紙ダイヤ改正とは、ほぼ10年に一度国鉄において行われる大規模ダイヤ改正の事である。

通常のダイヤ改正との違いは、これが簡便な修正で収まらず、全国の全てのダイヤの引き直し・設定しなおしを意味することである。文字通り、ダイヤを「白紙」に戻して改正するのだ。

前回の白紙改正は昭和34年3月のサンヨンサン準白紙改正。東海道新幹線開業前年・そして樺太の鉄道網構築の元年である。

これは「準」とついているようにかなり限定的な白紙改正である。

本来であればこの4年後に「サンハチトオ白紙改正（昭和38年10月）」が行われる予定だったのだ。

サンハチトオ、つまり1963年10月改正。それを数か月後に控えた時に、テロが起きた。

それ以降鉄道輸送は混乱を続け、臨時改正や特発を乱発しつつ急場をしのいできた。それもいよいよこれで終わる。

ヨンゴーサン白紙ダイヤ改正。それは東京駅の再開業を主軸とした、事実上の輸送におけるテロ終息宣言である。

この全国一斉白紙ダイヤ改正の影響は全国の私鉄、果ては同盟近隣諸国にまで及ぶ。この北部樺太開発鉄道の開業も、この改正のうちに含まれる。

特急新規設定営業キロは50万キロ、新規設定列車は1000を優に超える。まるでカンブリア爆発だと、ブラウン管は伝えた。

「明日、東京駅は元の姿を取り戻す。中央線も、暫定的ではあるが往時の、いやそれ以上の姿となって帰ってくる。ここに赴任する前に、飯田ターミナルを見せてもらったよ。あれはなかなかのものだった」
飯田町駅。明治8年にターミナルとして開業し、明治28年にのちの国電の祖となる日本初の普通鉄道における電車運転を開始した伝説の駅である。

その後近代化に伴い1933年に旅客営業を廃し、歴史の遺物として消え去るのを待っていたその駅が、テロに際して堂々と立ち上がり帝都を護ったのである。

今、中央線の長距離列車ターミナルは客貨双方ともに飯田町駅である。そしてそれは、この改正をもつて暫定的なものから正式なものへ変貌を遂げる。

欧州のかほり漂う頭端式ターミナルに、併設されるステーションホテル。未だ復興を続ける帝都に堂々とそびえたそれは、まさに復興の象徴であった。

当然、この計画立案に際して尽力したのは他でもない越谷である。幸谷はそのことをよく知っている、と話す。

「その飯田町駅では、中央線の復旧記念式典を行うと聞いています。

当然、こちらにも貴方は招待されていると」

復旧記念式典では、飯田町駅から始発の特急あずさ1号の出発式を行ううらしかった。特急あずさ。これも越谷の尽力なしでは設定することが難しかった列車の一つである。

幸谷は越谷の前に仁王立ちをして詰め寄った。

「社長。いや、初代西東京鉄道管理局長。貴方には出席する権利があるはずですよ。貴方は命を賭けて、国鉄を、そして帝都東京を護った。貴方は出るべきだ」

「十合特別復興総局長は出席しないそうだし」

越谷は静かに言い放った。

幸谷は押し黙る。その事実を提示されるだけで、越谷の主張がよくわかるからだ。

「今の私は北部樺太開発鉄道社長、越谷卓志だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「社長……」

越谷の目の奥には、覚悟の光が見えた。それが、幸谷には納得いかなかった。

「私は今日この日から、この鉄道に骨をうずめる。それでいいんだ」

「貴方は、アンタはいつだってそうだし！」

幸谷はいきなり激高した。周囲の人間は驚いて顔を見合わせるが、越谷はただ珈琲を飲み続けるだけだった。

「私は私のやり方でこの鉄道を支える。私『が』支えるんだ！」

何も言い返してこない越谷に、幸谷は言葉をぶつけて去っていった。

「若いのは良いが、しかし直情的過ぎていけないね。しかし……」

越谷は珈琲を再びすすりながら首を傾げた。

「『いつだって』とは、どういう意味なんだろうなあ……」

会ったことはないはずなのに、と越谷は不思議がりながらコーヒークップを置いた。

「とまあ、こんな感じだよ」

「へっ。あのハナタレ坊主。まるで訳が分からねえな」

桐谷は豪快に笑い、そして急に真面目な顔をした。

「しかし、ヨンゴーサン白紙ダイヤ改正ですか」

「昭和45年3月22日改正。広報局はヨンゴーサン白紙改正と銘打って大々的に宣伝しているそうさ。やっと明るい話題を広報できると、喜んでいたよ」

ライターが音かして、桐谷から紫煙がくゆり始める。それを端目に見た越谷に、桐谷は煙草を勧めた。

「今やめてるんだ。嫁が嫌がるんでね」

「俺も家じゃ吸いませんよ。妻子がいますから」

そう言って桐谷は煙を噴き出した。

「なあ英雄さん、アンタはなんでここに来た」

「唐突だな」

桐谷の問いかけに、越谷はただこう返した。桐谷はなおも続ける。

「西東京鉄道管理局。テロを受けて分割された旧東京鉄道管理局のうちのひとつだ。その局長サマがアンタ。テロ後一気に重要性が強まった中央線を統べる部署のトップに居ておいて、なんでこっちにきた。海情が疑うのも無理ありやあせんよ」

樺太に来る国鉄の人間は、たいていが本土に置いていくのには問題があると言われた異端児、もしくは「レッド」である。

「そういう君こそ、なんで来たんだね。武蔵野鉄道西管区西武工場の長じゃないか。君だけじゃない。聞けば、武蔵野鉄道から来た人間はみなそこそこの地位に居たものばかりだ」

遠回しに「レッド」を疑われた越谷は桐谷に同じことを聞いた。すると、桐谷は胸を張って答えた。

「社長の命でさあ」

「社長？ 武蔵野鉄道の？」

「ええ。社長には昔からよくして頂いてましてね。その社長がここに行け、日本を支えてこいと言うもんですから」

「他の武鉄系のみんなも？」

「当然」

桐谷は口から煙草をポロリと落とすと、靴でもみ消した。

「俺らはみんな、武鉄社長から北樺太防衛を命じられてここに来ました。社長さんは？」

越谷は桐谷の言葉に驚きながらも、同じようなもんさ、と答えた。

「私も頼まれたんだ。十合元長官にね」

「十合長官……。ああ、新幹線建設の英雄じゃないですか。今は復興総局でしたっけねえ」

「ああそうだ。あれは復興が大詰めを迎えた時だ。十合長官直々だったよ。そこで言われたんだ。『北樺太は必ず日本再生の一助と、そして日本防衛の要になるから、それを支えてきてほしい』と」

一筋の光が差し込む。太陽が、流水の間から姿を見せ始めた。

「なるほど、社長さんも同じか」

桐谷はそう呟くと手を差し出した。

「やってやりましょうや」

「ああ、もちろん」

二人は固い握手を交わした。日の出とともにできた影が、長く長く伸びていった。

「さ、戻りましょうや。出発式に遅れちゃう」

「そうだな。いよいよだ」

時計は5時36分を示している。7時まで、もう時間がない。

3月22日。始まりの時まで、あともうすこし。

まだ日も上がらぬうちに目が覚めた。

仮設の宿直室から出ると、外は白み始めたばかりだった。室内だとこのに息は白く、手足は痺れそうになっていた。

佐々木朋子は、死んじゃう、死んじゃうとぼやきながら共用の浴場へ急いだ。

仮設と言えどもこの手の厚生はしっかりしているらしく、もう少し

防寒性があれば申し分ないなど佐々木は思うが、仮設にそこまで求めるのは酷と言うものである。

ここは本社横の仮設乗務員詰所。併設された本社前留置線に、今日の式典に使う車両が留め置かれていた。

今日は3月22日、尾羽自由化の日にして発鉄開業の日。

佐々木は、発鉄開業その一番列車の運転助手に選ばれた。

運転士は、最年少の大宮。部内で一番若い人を、という選出だったらしい。佐々木は、確かに運転士の中では大宮に次いで二番目に若い。

佐々木にとって、大宮に思うところがないわけではない。

既に散々同僚たちからからかわれている。大宮が佐々木に気があることは、どうやったって知ってしまう。

「悪い人じゃないんだけど」

と、佐々木は独り言ちる。

佐々木にとって、大宮はそれ以上の人間ではないのだ。

濡れた髪の毛をぶんぶんと振って、佐々木は浴場から出た。

着替えを含めた朝の支度を済ませると、制服のポケットから懐中時計を取り出した。ところどころ傷のついた時計を、佐々木はみつめた。

佐々木は学生以降、恋をしたことがない。

彼女の胸の内は、亡き父に埋め尽くされていた。

鉄道マンだった父の形見にそっとつばやく。

「やつと、ここまで来たよ」

佐々木は立ち上がり、列車の待つ留置線へと向かった。

今日は始まりの日。雪の深い冬の寒い朝であるのにも関わらず、街はずでに起き始め、続々と人が集まろうとしている。

彼女だけではない。この街に住む全員が、胸に始まりを抱いている。

昭和45年3月22日、日本中がテロの終焉を祝う日に、この街は始まりを告げるのだ。

太陽が、ビルの隙間から線路を照らした。

信号はすでに、青を表示していた。

出発式はあと数分にまで迫っている。この日の為に海軍は軍艦を用意し、陸軍は儀仗兵を用意した。そして空軍は、倉庫の奥から零戦をひっぱりだしてきた。

「ほー、レイセンだ」

「あれまあ、まだ残ってるんだ」

軍事に疎くても、この戦闘機ぐらいは誰もが知っている。

本社前の車庫で、式典の最後を飾る出発式の為の最後の調整に入っていた整備員たちは、面白そうに手を止める。

「なんだお前たち、行きたかったのか？」

「いいや、俺はいいね。あんな馬鹿みたいなとこにいったら風邪ひいちまう」

桐谷が顔を出すなりそんなことを行ったら、一人がそう返した。

「まあ道理だな。それに、飛行機ならここらでも見える」

「いいなあ、紫電改だよ。傑作機がそろい踏みだあ」

「ご丁寧に20年も残しておいたのかい。ご苦労だねえ」

空を見上げながら、整備員が好き勝って言う。

「ほら、あんまし空ばっかり見上げてつとお、首いやるぞ。ほどほどにしときゃ」

「はいーよ。あ！ スピットだ！ なんでえ他国の旧式機もきてんのか！ はあー」

「言ったそばからあー！」

そんな折、大宮と佐々木が到着した。

「どうも、おやっさん。どうです？」

「ん？ ああ、いいよ」

車両はピカピカに磨き上げられて、だれが見ても可笑しくない状態に仕上がっていた。

「おお、1000系の1001F。緊張するなあ」

「ねえお師匠、お師匠が運転士じゃなくて本当にいいんですか？」

感動する大宮をよそに、佐々木は師匠の心配をする。師匠とは、運転主任、つまり運転士のとりまとめ役の楠木のことだ。その楠木は、めんどくさそうにパイプ椅子に座りながらぼやく。

「うんにや、俺みてえな貸し出しのロートルはいつ地元に出戻るかからん。お前さんたちが未来の運転手なんだ。お前さんたちがやれい」

そう言つて、楠木は煙草を吹かした。

「師匠、俺ら、きつちりやり遂げますから」

「おう、期待してるぜ」

その時、ドンドンドンと発砲音がした。

腹まで響く重低音。軍艦の空砲だ。

それが合図だった。

「おし、出発準備ー」

「はいー」

大宮と佐々木は運転室に入った。運転室の天井にある1001の文字を、大宮は静かに指さし確認をした。

1000系。その1001F。Fは英語で「編成」という意味を持つ。つまり、1001Fは1000系の一番目の編成ということである。そう、トップナンバーだ。

ただ単に、同じ形式の一番目に生まれたというだけ。性能も他と変わらなければ、特に意識して精密に作られたわけではない。それに書類上の一番目というだけで、製造順でもない。

だけれども、その「1」が特別視されるのは、その数字故であろうか。過去から現在まで脈々と、トップナンバーは特別であり続ける。

このトップナンバーも、今日、特別になる。

大宮と佐々木はてきぱきとした手つきで電車を起動した。

シャー……ガシャン。空気力でパンタグラフが上がり、電車が息を吹き返す。

「点検は済ませておいた。各種異常なしだ」

「ありがとうございます！」

そういう桐谷に礼を言い、大宮は運転台に座る。

左手に持つブレーキハンドルのを、しっかりと運転台に取り付ける。けたたましいベルが鳴り響く。それを確認すると、そのままブレーキハンドルを回す。

ベル音は単調なキンコン音に変わり、そしてATSボタンを扱うと消えた。

「ATS投入確認」

ブレーキハンドルの音に合わせて空気の抜ける音がする。運転台の空気圧計メーターが目まぐるしく動く。

「ブレーキ動作よし、圧よし」

ハンドスコッチ、手ブレーキ、消火器。

よし、よし、よし。二人でひとつずつ確認していく。

「出発準備、完了」

大宮が呟くと、桐谷が懐中時計の針を確かめた。

「定時だな」

電車に無線が入る。佐々木が受話器を取ると、指令の声があった。

『こちら尾羽指令。9001M列車、応答願います。どうぞ』

「はいこちら9001Mです。どうぞ」

『9001Mは所定通り運転を開始してください。現在のところ、式典は定時で進行中』

「了解しました」

指令の言葉と同時に目の前の信号が開通する。ポイントがしっかりと、本線に向いた。

「9001M、出発進行！」

ペダルを目いっぱい踏み込んで、警笛を鳴らす。ブレーキを緩めて、ノッチを確かめるように一段一段進めていく。

いつも通りの音を響かせながら、ゆっくりと加速していく。そんな電車の鼓動を感じながら、大宮と佐々木は笑った。

「制限、解除！」

ノッチを更に進める。モーターの音高らかに、電車は走っていく。

もう一度、警笛を鳴らす。
それを、社員たちは手を振って見送った。
これが、社員にとつての一番列車になった。

尾羽と言う街は、軍の為に産まれた。

長く苦しい戦いの果てに、もう二度と本土が戦場にならずとも済むように、先人たちは尾羽の要塞化を決定した。

昨日まで、尾羽市のほぼ全域は「要塞地帯法」の定めるところの要塞地帯であつた。

市民の活動は著しく制限され、この街の全てが軍の為に存在した。当然のことである。軍がなければこの街は存在しないのだから。

今日、この日をもって尾羽市街地域は要塞地帯法の適用から除外される。

それに伴い、この軍用線も発鉄となって民間化される。

それが、市民にとつての苦難の始まりなのか、それとも希望の始まりなのかは、今の時点ではわからない。

しかし、これは確かに始まりなのである。

日本中が歓喜に沸く今日この日、この小さな街で小さな始まりが始まるのである。

「この鉄道を開業するにあたり、様々な困難がございました」

まだ冷たい風が地面を撫でた。

「しかしながらたくさんの方々のご支援により、今日ここに開業する事が出来たのでございます」

力強く、そして英雄らしく雄弁に、越谷は言葉を紡ぐ。

「これから先、どんな困難があろうとも、我々は走り続けます」
幸谷が、ぐつとこぶしを握り込んだ。

「北部樺太開発鉄道、開業します！」

その言葉と同時に、大きな警笛が鳴り響いた。そして堂々と、青色の車体が動き出す。

どんだんと加速するそれは誇らしげに主張する。今日から始まるのだと。

物語はまさに、今日動き始めた。

皆を乗せた列車となって。

7. 第一仕業〜1レ：第一閉塞、進行

少女が一人、その列車が動き出すのを見ていた。

その少女が見つめる先に、マスコンを握る大宮がいた。そして横には、大宮が思いを寄せる佐々木がいた。

少女は、大宮の娘であった。

少女は熱狂の中で、ひとり体が冷えていくのを感じた。

「いやだよ……。明雄さん。寒いのは……。イヤだ……」

走り去っていく電車に、置いてかないでと声にならない叫び声をあげた。

その声は、高らかに鳴るモーター音にかき消された。

発鉄は順調に動き出した。

初日からたくさんのお客様に利用され、3月22日の営業成績は見込みを大幅に上回った。

まだ街は雪に包まれていて、行く末は白くかすんでいるが、それでも越谷はこの先を悲観してはいなかった。

「このままなら、増発も考えなければならぬかもしれないかもしれんな！」

経理の瀬戸を捕まえて、越谷は豪快に笑った。

神経質そうな顔の瀬戸も、この時ばかりは笑みをたたえてこくこくとうなずいた。

発鉄全体に、希望めいたものが蔓延していた。

だが反対に、越谷個人の先行きはあまり良くなかった。越谷の妻よし子が、転居以来機嫌が悪いのである。

それは、娘の話になってさらに顕著になった。

「ああ、よし子。優香の転入手続きはどうなっている」

夕方、晩酌の時に越谷は妻に聞いてみた。

「それはあなたがやってくれるんではなくて？」

「ん？ お前がやってくれるんじゃないのか」

「それぐらい、ご主人様がやっていたかないと」

そう言つて、妻よし子はほんと必要書類やらを越谷の前に出した。

「お願いしますよ」

そう言われたはいいものの、勝手がわからない。

「どうすればいいんだ？」

「それぐらいご自分で調べてくださいな。主人でしょう？」

「ううむ……」

そう言われては仕方がない。越谷は当惑した顔をしながら手をぶらぶらさせるほかなかった。

一事が万事この調子なので越谷は困つてしまつて、翌日桐谷に泣きつくことにした。

「と言う訳なんだ。桐谷君、何か知らんかね」

「と言われましても、自分も経験のないことですからねえ」

「うーん、そうだよなあ」

頼みの綱の桐谷も、パツとしない答えだった。

それもそのはず。桐谷の娘が中学を卒業するタイミングを見計らつて転居したので、転入届の必要がなかったのだ。今、桐谷の娘は中卒で郵便局員をしている。学務系の手続きはさっぱりだった。

転校の手続きなんてほとんどの人は経験がないだろうし。どのようになればいいのかわからない。もしかして、東京に戻つて書類の用意が必要なのだろうか。

「ああそうだ、確かこの手の事は大宮君が明るいですよ」

「大宮君、というと？」

「運転課のやつです。なんなら今呼びましようか？」

「いや、それには及ばないよ。大宮……何君だい？」

「大宮明雄です。確か、今日は……ちよつと待つてくださいいよ、えーつと……」

桐谷はわざわざ勤務表を出して確認してくれる。大宮、大宮明雄、

どこかで聞いたことある名前だと記憶の中で反芻する。

「開業式で一番列車を運転した子ですよ」

「ああ思い出した。あの子か」

越谷は顔と名前を一致させるのにしばらく時間がかかってしまった。

部下の顔と名前は基本的に覚えておきたい越谷だが、人の顔を覚えるのが苦手な彼にとってそれはかなりの苦行だった。

「ああ、今日は今時分まで勤務でこっからは明けですね。えーっと、終業は尾羽運輸区ですね」

「尾羽運輸区と言うと、ここ本社から……」

「路面電車の第2系統で尾羽営業所前ですね」

「わかった。ありがとう」

越谷はまだまだこの街の地理に疎く、桐谷に教えてもらってようやく目的地を得た。

越谷は特に何も考えることなく、そのまま尾羽運輸区へと向かった。

「おい！大宮！」

一通りの勤務を終えて弛緩していた大宮に、尾羽運輸区長がすさまじい剣幕で怒鳴る。

「お前一体何をやらかしゃがった！」

「え、へ？」

豆鉄砲を食らった鳩の様にして大宮は固まる。

「今なあ、社長が来なさってお前を呼び出しとるよ。一体何をしたんだ！」

「そ、そんな!？」

大宮には全く心当たりがない。頭が真っ白になりながらも恐る恐る区長の後をついていく。

「まったく、本当に何をしたんだ！」

一体本当に何をしたんだろうか。

まさか開業式典でなにか粗相をしたのだろうか。それとも、何か他に咎められることがあるのだろうか。

どちらにせよあの「英雄」越谷直々のお出ましだ。鬼のような形相で叱りつけてくるかもしれない。外見はそんな風には見えないが、そういう人間に限って怖いのだ。大宮は手の震えが止まらなかった。

陸軍仕込みの折檻か、はたまた国鉄現場仕込みのシゴキか。戦々恐々としながら向かうと、いたって普通の面持ちでそこに越谷はいた。

「社長！・ 大宮を連れてまいりました！」

軍隊もびつくりの敬礼で、区長は越谷に告げた。

「ああ、ありがとう。ええと、尾羽運輸区長の……」

「落合です！」

「ああ、落合君。もういいよ、ありがとうね」

そういつて区長を下げようとしたとき、区長は社長に向けて頭を下げた。

「社長！・ どうか大宮をお許しただけでいいでしょうか！」

突然の行動に、越谷も大宮も面食らう。

「大宮の奴が何をしたかはわかりませんが、しかしながらこいつは根は真面目でいい奴なんです。まだ若く、未来もある。どうか、寛大な処置をお願いできますでしょうか。彼は別に私の直接の部下ではないが、それでも仲間なんです。どうか、お願いします！」

それを見て慌てて大宮も頭を下げる。

「社長、すみませんでした!!」

大宮は、胸が熱くなった。自分の為にそこまで言ってくれる人間が今まで他に居ただろうか。親でさえ言ってくれなかった、護ってくれなかった大宮にとって、区長の言葉は重く突き刺さった。

「き、君たち！」

社長が声を張り上げる。

大宮は、次の瞬間を覚悟した。

「何を勘違いをしているのかはわからんが、私は別に……別に叱りに来たわけではないのだぞ！」

「はえ？」

「は？」

ガクン、と区長が肩からずり落ちる。眼鏡は耳から外れ中途半端な位置で止まる。

「で、では、なしてここまでいきなり……」

震える声で尋ねると、当惑した表情で社長は答えた。

「少し大宮君に聞きたいことがあったんだ。それも、個人的な要件で……」

「個人的な要件」

「ああ、個人的な要件で」

「な、なんだあ……」

真相を聞いた大宮は、半ベソをかいてその場にへたりこんだのだった。

「いやあ、申し訳なかったね」

「いえ、こちらこそそんでもない早合点を……」

大宮の仕事帰り、越谷に連れ出され二人は喫茶で茶を飲んでいる。

「ここは、てっちゃん通りに面しているのに静かでいいですね」

「そうだろう。私が見つけたんだ」

欧風な店内はあえて木造で造られている。ところどころに和風な味わいが見え、さながら大正の建築のようだった。

「私はまだ若かったころには、東京にもまだまだこういう佇まいがあったんだがな。最近はめっきり減った。テロはやはり、東京の文化において痛い損失点だったよ」

目の前を発鉄の電車が通り抜ける。それを見ながら越谷はつぶやいた。

「私は樺太産まれの樺太育ちで。あまりなじみはないですね」

「そうか君は、8年前はまだ学生か」

8年前、それは帝都で痛ましいテロが起きた年のことである。

「一応、そうですね。まあ当時は中坊だったんで何が何だかわからなかったんですけど」

「まあそうだろうな。して君は、高校は出ているのかね」

「いえ、中学でそのまま郵便局に働きに出ました」

「ああなるほど。しかし、なんでまた郵政から鉄道業界に来ようと思っただかね」

「……郵便列車に郵便物を積み込む仕事をしていまして、それで鉄道業務に興味を」

「ほほう、好奇心からと言う訳か」

大宮は本当の理由を言うのをこらえ、とっさにごまかした。

「で、実際のところは？」

「お給金が良かったからです」

「うむ、若い男子として実に健全で結構。労働とは斯くあるべきだ」

いくら喫茶店の落ち着いた雰囲気といっても、関係は社長と末端社員である。自然と尋問のような空気になる。

「はは、そんなに硬くならないでくれたまえ……と、その原因は私の方にあるのだが、それは置いといてだね。大宮君、小学校の転校手続きについて教えて欲しいんだ」

「小学校の転校手続き、ですか？」

「ああ。なにぶん初めてのことでな。訳が分からんだ」

「なるほど、それで俺を……。ええとですね、まずは学校の先生に相談した方がいいと思います。確か、転校先の先生と面談が必要だったはずですよ」

「なに、それは本当か。弱ったな。時間を取れるかな」

「もう学校が始まるまで時間ないですよ、早めの方がいいと思いますよ」

「……だいたい何カ月前にやることなのかね」

「一カ月前には連絡すべきものかと」

「まずったなあ」

うーんと首をひねる越谷。大宮から見て、越谷も父親の顔をするのかとびつくりした。

「とにかく、一度学校に電話されてみては？」

「うむ、必ずそうしよう。ああ弱った」

「そういうば、娘さんってどこの学校に転校するんです？」

「ん？ ああ、なんて言ったっけな、金庫通りの近くの……」

「安塚小学校ですか？」

「ああ、それだ。そうそう」

越谷がそういうと、大宮は驚いた顔を見せる。

「驚きました。私のことと同じ小学校です」

「ん？ 君の娘っ子とかね」

「はい。今年5年になります」

「なんだって!？」

今度は越谷が驚く番だった。

「私の娘と同じ年じゃないか」

「それは奇遇ですね。今、5年生のクラスは一つしかないそうなので、きつと同じクラスですよ」

なんとまあ、この世の中の狭いことだろうか。二人は仰天するが、所詮は大きな田舎町である。こんなこともあるのだろう。

「そうか。では、娘と仲良くしてやってくれ。知っている人間の娘が居ると、こちらにも心強い」

「ええ、もちろんです」

大宮は二つ返事で引き受けた。

「して、君は今いくつだい？ 8年前に学生、と言うんだったら、子供を作るにはまだ早いだろう」

「ああ、いえ。ちよつと事情がございまして」

「そうか。ああ悪い、詮索をするつもりはないんだ。しかし、少し気になつてね」

「お心遣い、ありがとうございます。まあ、正直、男手一つではいろいろと大変で」

「男手一つ、か。それは大変そうだな。うーん、誰か紹介してやってもらいたいが、申し訳ないが今は話がなくてなあ」

「ああいえ、お気になさらないでください。まだ21ですし。焦るような年齢でもないんで……」

「まあそれもそうだがなあ」

ヒラの事情に肩入れしすぎるのも良くない、と自重する越谷だったが、それでもやはり気になるものは気になる。

「何かあったら言ってくれ。これからは娘の級友の親同士だ」

「はい、ありがとうございます」

しかし、急ぐことでもないだろう。彼とは長い付き合いになりそうだ。越谷は偶然の出会いをうれしく思った。

「1031レ、抑止かかったみたいです」

「原因は？」

「倒木との接触だそうです。跳ね飛ばした倒木が対向を支障したので防護発報、対向の4023レが非常停止して乗務員が撤去作業を手伝っているそうです」

「危ないなあ、救援車を出した方がいいんじゃないか？」

尾羽駅の事務室では、そんな会話が繰り返されていた。

「倒木って、そんな大ごとなんですか？」

「倒木自体はそうでもないんだよ、綱島君。問題はこの雪さ」

事務室は地下にあるために見えないが、底冷えする寒さが降雪を物語っていた。

「雪で真っ白になって空間識失調にでもなったらおしまいさね。樺太では、こういう時は救援車を呼んで待機した方がいいんだ。もうじき日暮れだしね。ま、本土のウテシ運転士さんだったんだろうよ」

男が切り捨てるように言った時、事務室の扉が開いた。

「すみません、マスターはいますかね」

「ええと、どちらの駅長で？」

「ああ、発鉄の」

「いらつしやいますよ」

事務室の者が一斉に声の方を見ると、立っていたのは越谷だった。男は変なものでも見るような目で越谷を見つめた。

越谷はそんな男に目もくれず、綱島を認めるとそちらに駆け寄った。

「お、君は確か、綱島君だったね。その節はどうもありがとう。そして、ああ、大場川駅長。ご挨拶に参りました」

そしてその奥で硬い椅子に腰かけて仕事に勤しんでいた大場川に腰を折った。

「これは社長。どうもこんなところに。本日は何用で？」

「いやなに、この尾羽駅は北鉄との共用駅だと聞いたものですから、北鉄さんにご挨拶にと思ひまして」

越谷がそう言うと、先ほどまで胡散臭そうな顔をしていた男が急にこやかな顔で握手を求めて来た。

「あなたがかの有名な英雄越谷殿でございますか！ いやあ、そんな方とご一緒できるだけでなく、お仕事をさせていただけるとは、いやはやこの尾羽駅駅長大伴、光栄の至りと言ったところでございまして……」

「オヤジさん、そんなこといって、最初入ってきた時越谷さんだと気が付かなかつたじゃないか」

「だあらつしやい！ えー、あー、コホン。いやこれは失敬いたしました。改めまして、北鉄尾羽駅駅長をしております大伴と申します。何卒よろしく願ひいたします」

大伴と名乗るその男を騒がしく面白い者だと思った越谷は、笑いを懸命にこらえながら握手に応じた。

「発鉄社長を拝命いたしました越谷です。ご挨拶が後になってしまつて申し訳ない。お詫びとしてはつまらないものですが、これを……」

越谷が土産を差し出すと、大伴は大げさに驚いて見せた。

「あいやまあまあ、まさか英雄様に土産を持たせてしまうなんてこの大伴一生の不覚でございます。いやなに、そちらの御事情は存じ上げておりますから本来ならばこちらからご挨拶申し上げるべきところでございます。いやはや、ありがたく頂戴いたします」

「すみません社長さん、こういう人なんです。発鉄の大場川駅長が慇懃な方だとすれば、こちらの大伴は慇懃無礼な方でございますので」「そうそうって、だあらっしやい！ 誰がだ！」

女性の事務員がかわるがわる前に出てきては頭を下げながら毒を吐いていった。越谷は笑いをこらえるのでいっばいだった。

「綱島君、いつもこんな感じなのかい？」

「ええ、だいたいこのような感じです。あの女性二人は、樺太の海原お浜・小浜と呼ばれている発鉄の人です。いつもこうしておやし^長さん^長をからかっています」

「う、海原……」

関西なまりの言葉でまくしたてられる笑いの応酬に気圧され、越谷は何も言えなくなってしまうた。

「ほらほら、越谷さんが何も言えなくなってしまうているじゃないか」大伴の言葉で、笑いの嵐はやつと過ぎ去った。周りを見ると駅員たちが笑いながらのたうち回っていた。職場環境は良好なようだ。

「おやし^長さん、やっぱり救援車が出るそうです……つとと、松竹の演芸のお時間でしたか」

「構わん。また数分後には再演されるさ。で、どこから」

「佐保のキエ07を出すそうです」

「じゃ、数十分後には元通りかな。基山君、一応旅客案内の準備！」

さつきまでのいい加減な面影はどこへやら。急に真面目に指示を飛ばし始めた。越谷は少しぎよつとしながらも、少し違和感を覚えた。

「そういうえば、尾羽駅には発鉄駅長と北鉄駅長がいますが、呼び分けはどうなさっているんですか？」

駅長は普通、駅員に「おやし」と呼ばれる。しかし、この駅には駅長が二人いる。混同したりしないのだろうか。越谷はそこが気に

なった。

「ああ、大場川駅長はみんな、グランドマスター大駅長って呼びますから」

「だ、大駅長？」

突拍子もない言葉に、越谷は肩からずり落ちた。

「ええ、尾羽駅の頂点ですからね。や、明治生まれには敵いませんや」
振り返って綱島の顔を見ると、こくこくと頷いている。どうやらもうすでに浸透しているようだ。

越谷は大伴の姿を計りかねていた。この男の像というものが全く見えてこなかった。

「とりあえず、邪魔してはいけない。今日はここで失礼いたします」

「ああ、こちらこそ大したもてなしもできず、すみません」

「次こそはもつと腕を磨いて捧腹絶倒させますので」

「だあらっしやい！ ……お騒がせいたしました。また気軽に来てください。お待ちしています」

越谷は、なぜか大伴に見送られながら駅を出た。

今日は気苦労の多い日だった。弛緩の後に来る倦怠感を抱えながら、大宮は自宅へと歩みを進める。

あの後、北鉄線内ダイヤ乱れの影響を引きずって乗務員が不足し、呼び戻されてしまった。おかげですっかり遅くなってしまった。

大宮の家は、アパートの二階にある。疲れた体を引き吊りながら階段を上り自室の前にたどり着くと、トタトタトタと待ちきれない足音がした。

「ただいま」

扉を開けると、足音の主が神妙な顔をして立っていた。きっと嬉しさをこらえてるんだろう。

「おかえりなさい明雄さん。お布団、敷いておきました」

「ありがとうございます」

そう言って、駆け寄ってくる義理の娘の頭を撫でた。幸子はのどをゴロゴロ鳴らして幸せそうだった。

「よく俺が帰ってくるのがわかったな」

頭を撫でながら言うと、幸子は少し恥ずかしそうに「階段を上る足音でわかりました」

と言った。

お前は猫か、と思った。だがある意味で幸子は猫のような存在なのかもしれない。しかし、その猫は猫でも捨て猫である。

俺、大宮明雄。もうすぐ二十二歳。独身。童貞。生まれてこの方女っ気なし。憐れむなら憐れんで、どうぞ。同志は握手をしよう。

この娘は大宮幸子^{おみやさちこ}。正確な年齢は分からないが、本人曰く10歳だそうだった。

二人とも捨て子、被虐待児で、親からの愛を受け取れなかった悲しい人間だ。だからこうして傷をなめ合って生きてきた。

「ごはん、用意したので大丈夫だったか？ 不味くなかったか？」
「もちろんです。明雄さんの料理はいつもおいしいですから」

嘘だ。俺の料理はかなり味が濃いはずだ。ずっと自分の為に料理をしてきたから、自分に合わせて濃い目に作ってある。だから今でもその癖が抜けてない。幸子にしてみればしょっぱすぎるはずだ。幸子はこうやってすぐに遠慮する。

俺が布団へもぐりこむと、幸子ももぐりこんできた。冷やっこい布団の中で小さな足が当たって暖かい。暖かさを求めて幸子がこちらに身を寄せてきて、つつい抱きしめてしまった。

「寒いですね」

「寒いねえ」

幸子がおでこをすりすりとかすりつけてきた。髪の毛の匂いがする。自分のものなら嫌な臭いも、幸子のものならいい匂いだった。

「明雄さん」

「ん？」

俺の胸板にうずまりながら幸子は顔をあげた。上目でうるんだ瞳

を見ると、守ってあげたい思いがこみ上げてきた。

「明雄さんのこと、その……まだお父さんって呼べなくて。ごめんなさい」

しゅんとした顔でそんなことを言い出す。

いいさ、そんなこと。親子なんて、両親なんて、そんなのくだらない価値観だ。

「気にするな。それに、呼ばなくたっていいさ。俺は俺。幸子は幸子だよ」

俺はさらに強く幸子を抱き寄せた。幸子はくすぐったそうな声を出して幸せそうに笑った。

「さあ、もう寝なさい」

俺は幸子の瞼を閉じさせた。幸子は俺の袖をぎゅっとなつかむと、気持ちよさそうな寝息をたてはじめた。

こんな子をすてるなんて、どうしたらできるのだろう。

親子なんて、両親なんて。そんなものいらない。わからない。

8. く第一仕業く1レ：第二閉塞進行

「はい、大宮君お疲れ様」

「ありがとうございます佐々木さん。1056M、異常なし。定時です」

「1056M異常なし、定時！」

列車は途中の尾羽営業所駅に着いた。ここでは、運転士の交代をする。

「はいじゃあどうも、ご安全に」

「どうもね」

軽く挨拶をして大宮は詰所に引き上げる。

「えーと、次の行路は……」

「ああ大宮君、良いところに居た」

大宮が業務を確認していると、落合区長がやってきた。

「どうしました？ 区長」

「いやね、頼みがあつてね」

「頼み？」

件の騒動以来、区長と大宮は妙に仲がいい。おかげで今ではお互いに頼みごとを持ってくるようになった。

「次の乗務なんだが、彼女を添乗させてほしいんだ」

そういう区長の後ろに、白い影があつた。

その白い影は、キレイな白髪を持つ長身の女だった。日本人離れしたその容姿に、大宮は面食らう。

「どうしたんですか、これ」

「聞いてなかったか？ 三軍委から派遣されるっていう補充の運転士だよ」

「なんですか？ それ」

区長の言葉に、大宮は訳が分からないといった表情を浮かべる。それを見た口調は、不思議そうな顔で続けた。

「ほら、あれだよ。幸谷さんが三軍委を脅して獲得した追加人員の事だよ。このままじゃ業務が回らないからって、幸谷さんが手配してくれただろ」

「脅した？」

区長の言葉に、件の女はぎよつとした表情をする。区長はしまったとでも言いたげな顔で、取り繕った。

「ああちがう、ちがうよ島崎君。ちがうんだ。いやそのだな、三軍委は我が社と一蓮托生。死なばもろとも、と言うやつだよ」

「この会社がつぶれたら、軍のお偉いさんの首も吹っ飛びますもんねエ。そりや必死なわけだ。それに付け込むだなんて、幸谷さんは怖いもの知らずなんだから」

「コレっ！ 付け込むだなんて人聞きの悪い言い方をするんじゃない！ ああとにかくだ、紹介しよう。新しく発鉄に来ることになった島崎君だ」

「島崎冬香しまぎふゆかです。よろしくお願いいたします」

「ああ、こりやどうも。よろしく願います」

お互いにぺこりと頭を下げたことで、区長は満足そうにうなづいた。

「と言うわけでよろしくな、大宮君」

「ああいいですけど。免許は持つてるんですよ。線見ですか？」

大宮が聞くと、区長は首肯した。

「ああそうだ。彼女と指導係が乗ることになる」

「ええと、指導係って誰でしたっけ」

「彼女の指導係はー……確か楠木さんだな」

「ゲエー！ 師匠か！」

楠木は大宮が数カ月前まで指導を受けていた運転士だ。あの鬼のようなツラを思い出し、大宮は身震いする。

「嫌か？」

「そりやあ怖いですし……」

区長の問いかけに首をぶんぶん振って肯定する。そんな大宮の後ろに、小さな影がヌツと現れた。

「誰が怖いって？」

「そりやお師匠が……って、お師匠!？」

後ろからヌツと現れたのは、その楠木だ。

「よう大宮。お前がどれだけ上達したか見せてみる」

肩にポンと手を乗つけられた瞬間、大宮はしつぽを踏まれた猫のように飛び上がる。

「勘弁してくださいよお」

「何を軟弱な。それとも、俺に見られたら不味いような運転でもしてるのか？」

「い、いえ！ そんなことは！」

「じゃあいいいな？」

「は、はい……」

楠木に気圧されて、大宮はこれ以上何も言えなかった。

「だがな大宮、何も俺はお前をいじめようってんでお前さんを選んだわけじゃねえんだ」

「え？」

「よし、島崎！ 線見の意義を言ってみろ！」

「はい！ 線見は、列車に添乗し、その路線・車両のの運転曲線、信号・ポイント位置、構造、制限速度等を確認し、また制動時の目印など運転上の諸注意を把握する為に行うものです！ 運転取り扱いにおいて、その根幹となる重大な事柄です！」

「よろしい。というわけでだ、お手本となる運転には、お前さんが適任だと思っただけだ」

「……それなら、三田さんとか稲地さんとか、他に良い人がいるんじゃない」

「二年坊のお前が良かったんだよ」

「なら佐々木さんがいるじゃないですか。俺よかよっぽどしつかり運転しますよ」

「ああ、あいつは予定が合わなかったんだ。ほんとはあいつが良かったんだがなあ」

「やっぱりそういう事じゃないですかあ」

しよぼくれる大宮に、楠木は笑いながら肩を叩いた。

「まあいいじゃないか。よろしく頼むよ」

「まあいいですけど。えーっと、島崎さん。こんなので悪いけど、よろ

しくね」

そう言った大宮に、島崎は元気よく、はい、と答えた。その様子が、まだそれほど時がたっていないにも関わらず、なんだか懐かしかった。

「島崎さんは三軍委って言ったよね。ってことは軍人さん？」

大宮は島崎にそんなことを聞いてみた。

「ええと、厳密には違うというか、派遣の為だけに雇われた人間なんだ……」

「ああ、軍属さんなの。まあ俺達と似たよなもんか」

その答えに、なんだか大宮は納得したものを感じる。そして改めて、大宮は違和感を感じるのである。話す口ぶり、態度はまったく日本人のそれであるのに、島崎のその容姿は全くそうではない。長身で髪は白髪で目は灰色、肌も製脈が透き通るほどに白く、ドイツ人と言われた方がしっくりくる容姿だった。顔だちは日本人でも、その雰囲気は日本人然としたものではない。

日本軍人と言うのは、少し違和感があった。

「島崎君も災難だよなあ。簡単な連絡役を任せられるかと思いきや、運転手への転属辞令がでるなんてなあ」

事情を知っているらしい区長がそう漏らす。

「あれ、三軍委派遣運転士って鉄道聯隊から来るんじゃないすか」

「いや、俺もてつきりそうだとばかり」

「ま、まあ、いろいろ事情が……」

「その辺りは察してあげてくれ。もとはうちの幸谷の脅迫が発端だ」

楠木がそう言うと、区長はしー！と口の前に人差し指を当てた。

事情と言うのはもちろん、幸谷と三軍委の間の駆け引きの事であるが、要するに三軍委はしてやられたわけである。そのままでは癩に障るので、二線級の人材を投げてよこしたというわけだ。

もちろん、二線級の人材たる島崎の前でそんなことは言えまい。それに、楠木にとっては二線級も一線級も関係ない、ただ使い物になるまでしごき上げるだけだった。

不穏な方向に流れた話を、島崎はなんとかして取り繕おうとする。「あ、あの、甲種動力車操縦者免許（鉄道運転免許）は鉄道聯隊の方で取りました。なのでまあ、聯隊の人間と言えなくもないですけど……」

「きええ、知取の聯隊で免許取ったの。大変だったでしょう」

それを聞いた大宮は仰天する。軍で免許を取るだなんて、楠木の訓練より厳しいに違いない。大宮の脳裏には瞬時に十倍濃縮の楠木が怒鳴り散らしている姿が浮かんだ。

「もともと軍人になるつもりはなかったもので、それはもう」

げんなりとする島崎に、大宮は同情的だ。

「そうだよな。うん、そうだよな。そりや大変だよ。島崎君はもともと何だったの？」

「もともと三軍委の現地採用の求人がありました……。仕事は事務作業のみで身分保障もあるしお給金もいいと聞いたので応募したんですけど……」

「回り回ってこっちに来ちゃったのか。大変だなあ」

区長も、口で「うわあ」の形を作る。

「もう、何が何だか」

運転士なんて、なりたくてなった人間でもつらいのに、なりたくなくてやらざるを得ない人間はさらに地獄だろう。そしてさらに、民間の（まだかすかに）人権のある教育ではなく、軍での教育だ。あまり変わらないとはいえ、さぞ辛かろう。

「あれ、じゃあ三軍委派遣運転士ってみんな軍属さん？」

「あ、いや、何名か聯隊の方もいらっしやるようで」

「じゃあ、同僚が軍人かもしれないんだ」

「かもですね。一応三軍委から派遣されているのは10名弱らしいですけれど」

ふーん、と軽く流す大宮。尾羽育ちの人間にとって、日常的に身近に軍人が居るのが当たり前であった。生きるのに窮してた大宮を救ったのは元軍人の教師であったし、一番の友人の親は軍人だった。職場でもしよっちゅう軍人の相手をするし、そもそも石を投げれば軍

人に当たるとような尾羽で、軍人は特別視されない。

だが、本土生まれの東京育ちである楠木には奇妙なもののように感じる。

軍人は居るには居たし、日常的なものではあったが、ここまで密になることはそうそうないからだ。

「軍人ねえ」

「お嫌いですか？」

「いや、特にそういうのではないが、ちよつとびっくりするな」

「ああ、本土の人はそう言いますよね」

大宮は何でもないように言う。それも、楠木にとっては

「やっぱこういうところだよなあ。慣れていかない」と

楠木はため息をつく。この凍てついた大地は、本土の常識では計り知れないことがたくさんだ。

「さ、おしゃべりはここまでだ。乗務だぞ」

「うひい、そうだった。お手柔らかにお願いしますよお」

「俺が手を抜くとも思ったのか？新人教育をもう忘れたようだな」

「ひいー！」

まるで猫のように引きづられていく大宮に、区長は無責任な応援をした。

「がんばれよー」

「がんばりまあすう」

帰ってきた大宮の返事は、あまりにも頼りなかった。

「本当に、この樺太と言う土地は難しいな」

「北海道とも違いますからね。苦労しましたよ」

大宮たちが話していた所から電車で数十分、発鉄本社・尾羽市合同庁舎の11階会議室で、越谷と久留米も今しがた同じ様な話をしていた。

「まさか、こんなことが尾羽で起こってた、あいや、起こっているとはな」

「ええ。ですが、事実です。ここは日本ですが、しかし最前線です。革命戦争時の本土戦闘地域では、今現在も戦闘継続中と言うことですよ」

「戦の終わり目が戦の始まり、だな」

だが内容は、比喩ものにならないほどに物騒だった。

「しかし、ソ連か」

「ええ、あそこの諜報局です。もうすでにかかなりの浸透が見られます」

久留米は顔色を変えずに話すが、その眼には悔しさが浮かぶ。

「とりあえず、詳しくぐ説明します」

「ああ、頼む」

久留米が会議室の机に鉛筆で直に書き始める。

「現在、尾羽は奴らにとって喫緊の攻略対象です。目的は、来る侵攻^{きた}作戦への備え」

カリカリと、机に鉛筆を走らせる。

「主な活動内容は、現地での活動資金の調達と、武器の確保。そして現地反社会勢力への武器供与」

「反社会勢力？」

「ヤのつく奴らですよ。抗争を煽って、次々と傘下に入れてるようですよ」

「なんだと、それは初耳だ」

ニユースなんかに流れてこないのは当然として、退役軍人会やその他の情報筋でも、聞いたことがなかった。

「まあ、こちら辺はマル暴でもアタリをつけられてないようですよ。公安が海情レベルにならないと厳しいですよ。一応、三軍委にも話は通してありますが」

久留米はなおも机に諸々を書き足していく。

「尾羽は恐らく、樺太で一番武器の密輸入がしやすいところですよ。そこから中に武器器具が転がってる様な、そんな環境下で武器ごとの適不適を見分けるのは難儀ですよ」

「そこに付け込まれている、と言う訳か」

「まあ、木を隠すなら森の中、というところですよね」

カリカリと書いていた図が完成した。

「これは？」

「今現在判明していることです」

図には、たくさんの組織の名前と構成員の名前、そして活動の内容が示されていた。

「最近活動が報告されているのが、大きく分けて二系統のグループ。共赤会系と旧満州連合系です」

「共赤会……確か、前社長は」

「ええ、そうです。前社長の喜多川康志が関わっていたのが、この共赤会です」

喜多川康志。この兇鉄の窮状を創りだした張本人だ。

「そうか、まだ尾羽は奴らの勢力圏域にあるのか」

「ええ、その可能性が高いです」

考えてみれば、喜多川康志という表の顔を潰しただけである。まだ、奴らの息の根を止めるには至っていない。

この会社から多額の資金を横領し、そして運営を大混乱に陥れた人物の後ろがまだ生き残っている。これは由々しき事態だ。

「で、君がこれを私にわざわざ講義してくれた理由はなんだ」

だが、越谷はそれをわざわざ越谷に教えた久留米の意図が気になった。

「だって、半官半民の鉄道ですよ？知っておいて損はないでしょう」

「いや、まあそれはそうだが、しかし私は今はイチ鉄道会社の社長だ。一般人の社長ごときにここまで詳しく説明するかね。……もしかして私を戦線に引っぱり出すつもりじゃあるまいね？」

越谷の言い方がおかしくって、久留米は噴き出してしまった。

「いやだなあ社長。そんなわけないでしょう。まあ、社長ぐらいたったら今でもイケそうですけれどね。試しにヤツてみますか？」

「断固、拒否するね！」

そういった後で、越谷も久留米につられて笑った。だが、越谷はな

おも腑に落ちない。

「しかし、本当に理由はないのか？」

越谷がきくと、久留米は肩をすくめた。

「まあ、ないと言えはウソになりますね。だって、そうじゃなきゃわざわざ機密情報を渡したりしませんよ」

彼女が机にガリガリと書いていたのは、機密情報をすぐさま消せるようにだ。

ねずみ色の机ならば、黒光りする鉛筆の文字を見つけるのは容易だ。だから、消し忘れも少ない。そもそも紙に比べて、後々の処理がたやすい。

その程度の機密保持で済む情報ではあるが、その程度はしなければならぬ情報ではある。つまり、気安く漏らせる情報ではないということだ。

「なら、何が理由だ？」

「簡単です。知っておいていただきたかつたんですよ、これから社長が向き合う都市が、今どのような状況にあるか」

こともなげに彼女は言う。越谷はついつい、その裏の意図を探つてしまう。

「それは……海情としてか？ それとも何か他の意思系統からか？」

「いえ、私個人としてです」

この発言に、越谷は驚く。これが本当ならば、これは彼女の独断専行だ。

では、なぜ彼女はこんなことをしたのか。

「それは何故だ？」

「社長には、予想外を一つでも減らしておいて欲しいんですよ。これから先、尾羽は少々荒れる可能性がありますから」

「とうとうっ」

「考えてもみてください。喜多川康志は打倒された。それすなわち、我が社は共赤会の勢力下から脱したということです。これがいかに奴らにとって危険な状態か。わからないわけではないでしょう？」

「なるほど、それは確かに彼らにとって不都合な状況だ。彼らはその

状況を脱したいはず。……と言うことはなんだ？ 私を暗殺しに来るとでも言いたいのか？」

「現時点では、それも否定できません。切羽詰まって直接的な行動に出ないとも限らないでしょう？」

越谷はやれやれとかぶりを振る。自身が狙われているにしては、冷静な反応だなと久留米は思った。

「ふむ、それもそうだ。奴らからしてみれば、意のままにできない私は憎いだろう。いや、なんとという貧乏くじを引いてしまった。と言うより、よくも国鉄の連中は私をこんなところにニコニコと送り出してくれたな。あとで意趣返しをしてやろう」

「その際はお声掛けください。助太刀いたします」

「そうだな。あと、幸谷君あたりにも声をかけよう。あれもなかなか業が深そうだ」

まあそんなことは良いとして、と越谷は話を元に戻す。

「既に行動は始まっているのか？」

「はい。これまでも既に二件ほど処理しました。今後も活動は続くと思います」

処理、と言う言葉に先日の大立ち回りを思い出しうすら寒いものを感じるが、それ以上に敵の行動の速さに驚く。

「そう遠くないうちに、我が社に影響が出るレベルの行動が起きるか？」

「ええ、可能性は低くない……いえ、高いです」

「そうか」

厄介だった。経営の事だけに頭を使いたいこの時期に、こんな面倒ごとはごめんこうむりたいものだ。

だが、現実は無常だ。越谷に仕事に専念させることを許さない。

「はあ。なんでこうなるかなあ」

「やはり、狙われるのは怖いですか？」

ため息を狼狽だと感じた久留米は、英雄でも恐怖するのかと驚く。

「ああいや、家庭内でも問題を抱えていてね。この時期は運営の事だけ考えていたんだが、どうしてそうは問屋が卸さないかなと思つて

いたとこだ」

「ああ、なるほど。そういうえば、娘さんの転校に際して手続き上の厄介があったのでしたね」

「やはり君も知っていたかね」

「ええ、かなりの大ごとになりましたから」

そう、大ごとになったのだ。書類数枚と少女一人の為にちよつとした大騒動になったのだが、それはまた別の話。

「まったく、厄介だ。ああ、厄介だ！」

越谷にしては、どうしてこうも公私ともに面倒ごとが雪だるま式に増えていくのかと、頭を抱えて転がり回りたいくらいの心持ちだった。

「社長。できる限り手伝いますから」

「ほんと、すまないと思つてるよ」

「いいんですよ、部下なんですから」

いい部下を持ったと、越谷は心底感謝した。

「ではすみません、社長。今日は少し早く上がらせてもらいます」

「構わないが、どうしたんだい？」

「すみません、今日中に二人ほど処理しないといけなくなつて……」

保母のような笑顔なまま部屋を出ていった久留米を見て、越谷は危うく前言を撤回しそうになった。

繰り返しになるが、越谷は改めて久留米の素晴らしさに感謝をした。なぜなら、先ほど久留米が教えてくれたことと同じことを三軍委の人間から聞かされたからだ。

それも、限りなく回りくどく、かつ限りなくわかりにくく。

「以上が、この尾羽を取り巻く現状です。いかがですか？」

越谷は何と言つていいかわからない。口が裂けても「もうすでに聞いた」とは答えられないし、まるで初めて聞いたであろうような表情

を作るので精いっぱい、彼らがどこまで説明したかさえも覚えていなかった。

「なるほど。それで、それを私に通知した意図は何ですか？ 我々にどうしろと」

越谷はとにかく単刀直入に問いかけた。まどろっこしい政治家的な灰色の会話は、根っからのカタギの人間である越谷にとってはあまりにも操ることが困難なものだった。

もつともそれ以上に、越谷はこの三軍委という存在を甘く見ていたのも確かである。

三軍委——三軍調整委員会——、それは当鉄道を監視するために発足した、陸海空軍からなる組織である。

軍部——特に、国鉄に基地を焼かれた陸軍——は鉄道を敵視している。尾羽における軍用鉄道の民間開放に、最後まで反対したのも陸軍だった。

そんな軍部との利害の調整を図るための三軍委ではあるが、今現在は特に要求を出してきていない。それどころか、鉄道聯隊の人員を発鉄に寄こすようにこちらから要求したり、資金の都合を頼んだり、何かと融通を頼んでいた。

そんな三軍委だが、今日は少し様子が違った。

「ここからが本題です。開業から数日間、この鉄道を観察していましたが、その結果この鉄道には国防上いくつかの不都合が見受けられます」

「不都合。といたしますと」

「まず、旅客輸送についてです。越谷社長、貴方は発鉄線直通の列車をいつまで運行なさるおつもりですか？」

「はっ？」

越谷はいきなり飛び出てきた言葉に絶句する。

発鉄には、都市間高速鉄道たる北鉄線との直通普通列車が運転されている。

地域輸送のための大切な列車であり、それを廃止するという考えなど毛頭なかった。

「ですから、発鉄線内に直通する列車を、いつ頃廃止されるおつもりですか？」

「それは以前になにか取り決めのようなものがあつたのですか？ 申し訳ないが、その委細について私は承知していない。もしよければここでご教授願いたい」

そう答えると、三軍委の人間は大きくため息をついた。

「ハア、英雄越谷サマならお察しただけるかと思つたのですがねえ。いいですか？ この都市はある意味での秘密都市です。そんな場所に直通列車だなんて。少し考えれば国防に差し障りがあることぐらいいお判りでしょう。貴方の戦地では、どのように線路は破壊されましたか？ 作戦を阻害されましたか？ つまり、大規模不特定多数を市街に呼び込むようなそう言つた施策のひとつたる、北鉄との直通を取りやめてください」

いきなり不躰に言われたものだから越谷もむっときて、ついつい言い返してしまう。

「取り決めはおありですか？」

「そんなものがなくとも、こんな場所の輸送を引き受けた鉄道事業者なら、当然ご配慮いただくべきことです」

「取り決めはないんですね？」

「無かつたとしても、そんなものは理由になりません」

議論は全くの平行線だ。これには比較的温厚な越谷も、ついつい語気を強めてしまう。

「このダイヤはこの街の為に国鉄・北鉄・尾羽市並びに関係各所と協力して設定したものだ。また、尾羽駅並びに南尾羽駅の施設は当駅どまりの列車を折り返すに不十分である。であるから、直通運転として発鉄の余剰線路へ車輛を振り分け、車輛留置設備を確保している。直通は我が為にやっているわけではない。直通の中止はできない」

「南尾羽駅構内の物理的理由によるものであれば、車両基地のある駅まで回送すれば良いだけの話でしょう」

「お客を乗せない列車を動かすほどの余裕は、わが社にはない！」

「そこですよ。そこ」

三軍委の人間は、越谷の言葉ががっしりと捕まえた。

「今、無駄な列車を運行する余裕などないとおっしゃいましたね？」

「ええ、そう言いました」

「そこなんですよ。そんな列車を運行する余裕が無いくらいに列車本数が詰まっている、又は運行費用がかさんでいることが問題なのです。一体、一日に何本の列車を運行するおつもりですか。明らかに過剰です。時間一本でも多いぐらいだ。」

「この鉄道のダイヤは、樺太庁や尾羽市の試算に基づいて設定している」

「それにしても常識からかけ離れすぎている。ここは東京はおろか、本土ですらないのですよ。それがなんです、ここの鉄道のスローガンは。『待たずに乗れる』ですつて？ まるで阪神電車の様だ。ハッキリ言つて異常です」

「それはつまり利便性が高いということじゃないですか。鉄道と街にとって喜ばしいことです」

「違います。軍郷にとっては喜ばしくないことです。ここは北方防衛の砦。あまり人の動きを作りたくはないのですよ。今一度、適正な範囲内でのダイヤ作成を要請します。この鉄道は、あまりにも尾羽という土地を理解していない」

「それはお互い様でしょう。繰り返しますが、このダイヤは尾羽市などと共同で制作したものだ。直通先の都合もある。今すぐには決められないし、単独では決定できない。まずは尾羽市に話を通してからにしてください。そうでなければ受け入れられない」

越谷はそう言つて、拒絶の意思を腕組みで示した。もうこれ以上は、譲歩も交渉もしないという意味表示だ。

「……。いいでしょう。しかし、この鉄道はあくまでも軍のための鉄道であるという事実をお忘れなく」

そう捨て台詞を吐く三軍委の人間を、越谷はぶぜんとした表情で見送った。

ちょうどその頃、海軍尾羽基地の一角では久留米についての話がなされていた。

「鵜沢さん、いい加減何とかしてくださいよ」

そう嘆くのは、公安の二野警部だ。二野警部の眼前には、苦笑いを浮かべる男が居る。今しがた、鵜沢、と二野に呼ばれた男だ。

基地のトイレを除くどの箇所よりも鬱蒼として暗い部屋の中で、二野は煙草を吹かしながらその鵜沢に詰め寄った。

ここは尾羽基地内、海軍情報局の尾羽区支部だった。そして今、鵜沢は二野に詰められていた。

「久留米さんは戦闘力も高く、国内のテロ組織に対抗するのにいい切り札です。が、あまりにも狂犬がすぎる。良いですか、我々が依頼したのは『捕縛』です。『手と足だけ捕縛すればよい』等と言った覚えはないのですよ。欠片しか残っていない犯人に、何を聞けばいいというのですか」

「二野さん、いつもうちの久留米が本当にご迷惑をおかけしております。いやはや、なんと申していいのやら」

鵜沢は仕立ての良い椅子に腰を掛けながら、申し訳なさそうに笑う。その緊張感のない顔に二野は苛立ちを覚えるが、しかし彼も被害者であることを思い出す。

「まったく、彼女はなんなんですか？ この間は発鉄の社長相手に大立ち回りを演じたらしいじゃないですか。おかげで、裏ルートを通じてウチまで注意を受けましたよ」

「ああ、そちらの方にも話が行っていましたか。本当に申し開きようがありません。何から何までうちの責任です」

「本当に、お願いしますよ。海情さん」

海情、海軍情報局。つまり、この鵜沢は、本当の意味での久留米の上司であった。

鵜沢信也。それが本当の名かどうかさえ人は知らない。わからない。この防共最終ラインにおいて、彼は情報戦におけるキーストーン

であった。であるから、公安であろうとも彼を無碍にはできない。あくまでも協力体制を敷くという形で、間接的に制御する以外に方法はないのだ。

「善処いたしますよ。何分、こちらはそちらにおんぶにだっこの状態ですから」

何を白々しいことを。二野は心の中で毒づく。

「まあいいです。……で、件の社長が何者なのかは分かりましたか？」

二野はまるでこれが本題であるとしても言いたげなふりをした。本来は、海情の過ぎた行動に文句をくれてやるのが本分であったが、それでは格好がつかぬとおもったのだ。

だから、あまり情報は期待していなかった。

「そうそう。その件ですが、面白いことがありました」

そう言うのと、鵜沢は乱雑に綴じられたファイルを目の前に出してきた。

「それは？」

「久留米君が上げて来たレポートです」

「ほう、レポート」

二野は目線で許可を得ると、それを手に取って読み始めた。

「対話の結果、間諜の恐れなし。……これだけですか？」

「ええ、それだけです」

「おかしいですね。彼女がこれだけで済ませるはずがない」

「そうなんです。これだけじゃ済まないんですよ。そして、もう一つご覧いただきたいものがあります」

鵜沢は、もう一つのファイルを取り出した。

「それは？」

「久留米君と越谷氏のやり取りを監視していた者、まあつまりは三軍委の人間なんですが、それによる報告です」

二野はそれを受け取ると、読み上げた。

「久留米は越谷に対し急激に激昂し、刃を振るった。越谷もそれに応戦し、両者激突。久留米の刃が越谷ののど元に迫るを認め、停戦を勧告した。……いつも通りの、対話でしたか」

「そう、いつも通りなんですよ」

「……なるほど、そりや不自然です。彼女が一度対話を始めたら、それを説得できる人間はいない」

つい先ほどの事件のようね、と二野が混ぜ返す。

「本当にその通りなのですよ。一度中断を余儀なくされたぐらいで彼女は対話を止めない。彼女にとって、行動に出ると言うことはそれほどまでに重いと云う事なんです」

「それは我々も重々承知していますよ。彼女の嗅覚は本物だ。止まらないが、冒進することもない。きわめて奇妙なバランスの上に居る。それが彼女です。では、なぜ攻撃を行ったのにも関わらず、彼女はそれを取りやめたのですか？ 彼女の柄じゃない」

まったくもってわからない。二野は狼狽した表情を見せる。

「まさか久留米君は、他の意思によつて動いているわけじゃあるまいでしょうなあ」

「他の意思、とは？」

わからない、という表情を見せる鵜沢に対し、二野は語気を荒げる。「とぼけないでいただきたい。久留米君の行動が何かの演技なのではないかと言う話ですよ。陸軍は発鉄を信用したくないと思ってる。そして、発鉄を信用させたくないものと、発鉄を信用させたいものがある」

「だから、何らかの意思によつて、発鉄の越谷卓志を信用させる、もしくは信用させないための演技をした、と。なるほど」

「今までこちらもノータッチでしたけれど、久留米君が『アカ』でない確証は、ない」

二野は鵜沢を睨みつける。

「そろそろ、疑ってかかるべきでは？」

さもなくば、我々はあなたたちを疑わざるを得なくなる。二野は言葉外にそう付け加えた。

それに対して、鵜沢は悲しげな顔で言った。

「彼女はシロですよ。アカでもクロでもない。真つ白だ。ただ……」
「ただ？」

「悲しみを負っている。その悲しみは、消えることがない」

窓の外を見つめながら、鵜沢は物憂げに言う。似合わない。二野はそう思った。

「何のことだかさっぱりわかりませんな。禅問答かなにかですか？」

「禅問答、ですか。仏様でも、あの棘を抜くことは不可能でしょう。彼女の心に、それだけ深く刺さっている。棘が抜けるまで、彼女が止まることはありません」

皮肉のつもりで言った言葉も、鵜沢は受け流した。二野はただならぬものを感じる。

「……その先に、待っていると信じているから。ありもしない目的地にたどり着くまで、久留米君は復讐の炎を燃やしながら走り続けるんですよ。悲しみの石炭をくべ、復讐の炎を燃やし、涙の水を蒸気の力に変える。だから、止まらない」

「本当に何のことだかわかりません。何が言いたいのですか？」

「久留米千佳子という女は、何も考えちゃいない、と言うことですよ」

ここから先は、話せない。彼の眼差しがそう言っている気がして、二野はそれ以上の追及を止めた。

「……涙が枯れる前に、解決するといいいですね。そうでなければポイラー爆発ですよ」

二野はそうとしか言えなかった。そして、久留米と越谷への謎は、深まるばかりだった。

特9. く第一仕業く1レ：雲行き怪しく。前方注意

その日、越谷は尾羽南港の港湾局に居た。最上階の一つ下の、海が良く見渡せる場所。だんだんと解け始めた氷の大地は、もう少しすればたくさん船舶が行き来するだろう。

この部屋は港湾局ビルの展望台だ。一般に開放されており、誰でも許可なしで立ち入ることができる。部屋の中央にはここぞとばかりに港湾局の宣伝が掲示板に張り付けられている。が、それを見る観光客はまばらだ。越谷は、逆にまばらほども観光客が居ることに驚かされたのだが。

ここは、もう一つ別の意味がある。海と陸の監視塔としての役目だ。

一つ上の最上階では、港湾局の職員が船舶を監視・誘導している。では、ここでは何を監視しているか？

答えは、窓辺であんぱんを啜えながら必死に凍てついた海を凝視している男にあった。男の名は日田井裕司。海軍情報局の構成員である。

「こちらイッシー。流水上に影がある。海軍管轄区の真東。岸壁から二キロ」

『了解。対処する』

日田井が無線に呼びかけるとすぐに返答があり、眼下に見える海軍の詰所からワラワラと人が出ていった。

「なるほど、これは反共防衛の最前線だ」

越谷はその姿を後ろから見ながらひとり納得した。

「兄貴、つまりあれかい、氷を渡って日本まで来るのかい」

日田井も、そして今しがた「対処」のために出ていった海軍人も、赤軍対処の為に編成された特別部隊「海軍情報局」の面々である。

彼らはずまり、流水伝いにやってくる赤軍（と思しき者）の調査、保護、対処を行っているのである。

「ああそうだ。大昔の樺太・北海道先住民はそうやって交易していたらしい。奴らも、同じ手を使ったという訳だ」

ついてきた宇佐美に、着任前に調べ上げたことを教える。

自分で言つてきながら、越谷は、尾羽は常に脅威にさらされているのだと改めて認識する。

そんな越谷の目線の先を、派手な青い塗装の飛行機が駆け抜ける。越谷はいささかびつくりした。

「驚いた。ここまで低空を飛行するのか」

ビルの高さはもちろん制限空域より下である。尋常ならざる飛行に越谷は腰を抜かしそうになった。

「今のは何だい？」

「空軍の戦闘機だろう。懐かしいな、隼だ」

「なんでこんな低空飛行をしてるんだい？」

「ああ、それはだなあ」

越谷はその問いに答えようとして口を開く。そして、ぽっかりと口を開けたまま言葉が出てこない。

「わからん」

「なんだ、兄貴いでもわかんないのか」

「分からんものは分からんのだ。まあそんなことはどうでもよろしい。問題は、ここが砦だということだよ」

改めて、宇佐美はあたりを見渡してみる。

「すごいな。港が開いていない状態なのに、たくさんの貨物が集まっている。何の貨物だい？　これは」

「それはバラバラだ。物流の動きが本格化するまでここで滞留している貨車もあれば、ここで臨検をしている貨車もある」

「臨検？」

「違法物資を運んでいないかどうかの検査だよ。日本でも、そんなのを行うのはここだけじゃないかな。正直、面食らったね」

このタワーのもう一つの意義。それは、貨車の監視だ。このやや低めに作られたビルからは、海の様子と共に操車場の様子がよくわかる。ここは、貨車の監視塔も担っていた。

「へえ、そんなことしてるんだ」

「まあ、尾羽市街へ出る貨車だけらしいがな。市内行きは行わないよ」

「しかし、ここからの監視でわかるもんなんですかねえ」
「試してみますか？」

疑問に思う宇佐美に双眼鏡を差し出したのは、先ほどまで海を凝視していた日田井だった。

「兎鉄の越谷さんと宇佐美さんですよ。久留米から話を聞いています。どうですか？」

「いいんですか？」

宇佐美は困惑している。だが、日田井はなんてことないよと肩をすくめた。

「ええどうぞ。空軍の戦闘機が飛んでったので、暫く敵は姿を見せませんから」

「はあ、なら……。あ、兄貴の分もあるよ」

「おお、これは。ありがとうございます」

礼を言っただ双眼鏡を受け取ると、貨車の方を覗く。

「ほう、意外と見えるものだな。お、見てみる。車番までしっかり見えるぞ。ワムの37564だ。ミ・ナ・ゴ・ロ・シで覚えると覚えやすいな」

「ワム……ですか。なんですか？それ」

聞いたことない、と日田井は額にしわを寄せる。

「ああ、有蓋車と呼ばれる貨車です。小さな倉庫のような貨車ですよ」

そう言うと、合点がいったとばかりに日田井は顔をほころばせた。

「ああ、あれですか。あれの検査はここではやらないんですよ」

「え、そうなんですか？」

今度は越谷が眉をひそめる番だった。初耳の情報だ。

「ええ。確か伊留真駅まで回送して検査を行うはずですよ」

「ああ、そうなんですか。じゃあここでは……」

「コンテナとその他貨車だけなはずですよ」

なるほど、と越谷は相槌を打つ。自分の鉄道の事なのに、知らないことばかりだ。越谷は未だつかみきれないこの街と鉄道の全容に眩暈がする思いだった。

「奥鈴谷で事故ですって」

三日後、越谷が出社するなり電話のマイクを片手で塞いだ幸谷がそう伝えた。越谷はすぐさま机に戻り、国鉄謹製メモセットを引っ張り出す。

幸谷は、電話の相手に礼を言って受話器を置いた。

「奥鈴谷……というと、南樺太の方か。豊原の近くか？」

電話を終えた幸谷に越谷は聞いてみる。どうやら幸谷の電話の相手は、豊原にいる彼の元同僚らしかった。

「豊原から出ている豊真線の旧線ですね。えーっと、確か鈴谷線だったかな」

「ああ思い出した。旧線を復旧させた鈴谷線か。たしか奥鈴谷から鈴谷の間は線路状態も悪かったな」

「ええ。どうやら貨物の事故らしく、現状では軌道破壊による脱線の可能性が高いそうです」

南樺太の南での事故。北の端の小規模鉄道にとってはなんら関係のないことではあるが、しかしそれでも気になるのである。

整備が行き届いていないローカル線での事故。明日は、とまでも行かなくても、数年後には我が身だ。

我らが“発鉄”は、準高速・高密度運転に対応した屈指の高規格路線だ。しかし、それは開業直後の現在だから言えることだ。

高規格と言うことは、整備維持に費用がかさむということ。今後、もし経営が悪化して整備が行き届かなくなってしまうたら……。

そう遠くない将来、この高規格線を維持できなくなる可能性がある。さすれば、同様の事故が起きてもおかしくない。発鉄としても、他人事ではないのである。

越谷は幸谷に、事故の詳細を求める。幸谷は今しがたの話をメモで整理すると、「暫定情報ですけど」と前置きしたうえで話し始めた。

「発生現場は鈴谷駅北方11キロポスト地点。当該はEF62牽引の普通貨物。有蓋車3両編成で、中一両が脱輪したようです」

「二軸の普通貨物か。ちようど峠を越えて一安心と言った区間だな。気を緩めて速度を出し過ぎたか、それともブレーキが効かなかったか。どちらにせよ速度超過だろうな」

そんな推測をしていると、久留里美里記者が顔を出した。

「どもっ！ 毎度です美里です。どうかされましたか？」

「おお美里さん。ちようど、奥鈴谷で事故があったと聞いたもので。その話を」

「ああ今朝の事故ですか。派手にやったそうじゃないですか」

美里記者がもう情報を手に入れていることに幸谷は驚いた。

「もう取材してきたんですか？」

「いや、本社から事故の一報が入りましたね。もしかしたらこの後取材に行くかもしれません」

「なるほど、そういうことですか。しかし、脱線事故とは恐ろしいものだ。今回はまだ軽微な被害で済みましたが、時と場合が違えば、死人が出ていたかもしれない。どうだ、桐谷。我が社で類似の事例が出てくる可能性はあるのか」

幸谷が桐谷に話しかけると、桐谷は至極面倒くさそうに答える。

「ああ、同様事例？ あるんじゃないの」

「あるんじゃないのとはなんだ。やる気がないな。首を飛ばしてやるうか」

売り言葉に買い言葉。一触即発と言った感じで二人はそのまま言い争いに入る。

「具体的な資料もクソもねえのに検討できるかってんだ。それに、事故は起こるときは起こる。〃起こり得ない〃なんて返答を期待してんなら、新人教育からやり直しな」

「ほーお。頭まで機械油で詰まってる貴様にはわからんだろうが、こういう場合は想定しうる最も具体的な返答をすべきだ。そんな具体性のかけらもない答えでよくもまあ幹部職が務まるな。貴様こそ、新人からやり直した方がいいんじゃないかな」

「あんだあ！ やるかクソ眼鏡！」

「上等だ！ 貴様の油を精製して、予備発電機の中で腐らせてやろうじゃないか！」

「やめんか二人とも！」

つかみかからんばかりの勢いで殺気だった二人を、越谷は慌てて止めた。

このまま二人に会話をさせておくと、また喧嘩を始めそうである。美里記者は無理やり越谷に話を持っていく。

「そういえば事故と言えば、越谷社長は武蔵境事件で一躍有名になられました。武蔵境事件の立役者であり西東京鉄道管理局長でもあった越谷さんから、何か事故について一言ございますか？」

「ん？ ああ、武蔵境事件かあ。懐かしいなあ」

越谷は、久しぶりに聞いたその言葉を口の中で転がした。

「失礼。私はその言葉を始めて聞きました。なんですか？ それ」

瀬戸が恥ずかしそうに聞いてくる。

「そうか、鉄道畑の人間じゃないとなかなか知らないかもな。それに、今から十年以上も前の話だ」

「とすると、1960年前後ですか？」

「そうだ。中央東線武蔵境駅で起きた重大事故未遂のことだ」

「ああ、なら私は丁度満州に居ました。なるほど、道理で知らないわけです。そんなに大きな事故だったのですか？」

「いや、事故は防がれましたよ。越谷社長のおかげでね」

宇佐美が、まるでわがことのように自慢げに話す。

「今でも思い出すよ。アレは夏の盛りに差し掛かる直前だった……」

無閉塞運転というのを知っているかな？ 鉄道において（閉塞）信号が赤の場合に、一旦停止後安全を確認すれば時速15キロ以下で赤信号を無視していいという特例による運転の事だ。

いろいろとルールがあつて、例えば駅に入る前等の（絶対）信号は無視してはいけないとかいろいろとあるのだが、ともかくそういうモノがあるのだ。

これは、その特例が引き起こした事故未遂だ。

私は当時、中央東線武蔵境駅で駅員をやっていた。その日は梅雨が引つ張てきた大雨で視界が悪く、更に本線に微妙な遅れが出ていた。

当時武蔵境駅は、調布飛行場行の燃料輸送車や弾薬車、または回送の蒸気機関車やらが停車中だった。これは中央線遅れに伴うもので、普段はこの時間にここまで貨車が滞留することはない。

そして、下りホームに普通新宿発甲府行2435レが停車中。これが9時36分発のところ、9時41分発車予定で5分遅れ。

そしてそのすぐ後方、三鷹駅では東京発浅川（現：高尾）行472Hが3分遅れで発車した。

詳しい経過は省略するが、ともかくこの472Hが重大なミスをする。武蔵境駅に2435レが停車中だから、427Hには赤信号が現示される。それなのに427Hはこちらに向かって速いスピードで向かってくる。そう、無閉塞運転だ。

だが、無閉塞運転で定められた時速15キロを大幅に超過しているように見えた。そして、駅の手前で停車しようとしているには見えなかった。

駅を見ると、まだ2435レは発車しておらず、そしてその周りには、弾薬や燃料を満載した貨車がたくさん居た。

私はまずいと思って、カンテラ（信号灯）を持って427Hの方へ向かって駆け出した。

「止まれー止まれー」と叫びながら走ったら、427Hの運転士がようやく事態に気が付いて非常ブレーキを掛けた。

427Hが停車した時、目の前の車輛との間隔はたった数センチだったよ。

これが武蔵境事件の顛末さ。

「記録によると当時、確かに武蔵境駅には調布基地への石油列車などが存在していました。もし社長が事故を防いでいなかったら、立川のように、駅や町が火の海になっていたであろうことは想像に難くありません」

「そうだな、当時は『立川の二の舞』を防いだとして、新聞やニュースにも大きく載ったもんだ。いやまあ、とっさの行動がこんなに大きく報道されるとは思わなかったよ」

「へえ、そんなことが」

瀬戸は大きく感心して見せた。越谷にとつては慣れたことではあるが、それでもやはり気恥ずかしかった。

「ま、大したことではないさ。時期が時期だけに、取り沙汰されただけだ」

「立川事故から5年の節目でしたものね。市民は大盛り上がり、国鉄としても、世間が『国鉄は成長した!』と浮かれているうちに対策を練って、批判を避けたかったでしょうし。政治的な浮力があつたことは間違いありませんが、それを差し引いても、社長のご活躍は立派なものではないでしょうか」

「立川事故はこの件と同様の事例で事故に至り、それで街が一つ焼けたからなあ。それを防いだとあつては、国鉄本省は私をないがしろに出来なかつたというわけだ。まあ、ないがしろにしてくれても良かったのだがね。面倒が少なく済む。ああ、そういえば、陸軍が国鉄に対してあたりを強くし始めたのはこの辺りの時期だったね」

自分の昔話をされるのがこそばゆくなってきた越谷は、これまた強引に話を変えた。

「まあ自分の基地を火の海にされたら誰でも怒るとは思いますよ。それにしても陰湿だなあと思えますけれどね」

「まつたく、もう少し話の分かる連中だと思つたのだがなあ」

陸軍人は頭が固くて仕方がない、とひとしきり陸軍の悪口で盛り上がっているところで、越谷は後ろから肩を叩かれた。

「社長、ちよつとよろしいですか?」

越谷が振り向くと、そこには久留米が居た。

「おっと、君は確か三軍委経由でウチに来たんだつたな。すまん、悪く思わないでくれ」

越谷は、少しバツが悪くなつて久留米に謝罪した。すると久留米は、きよとんとした顔をした。

「え？ ああ、私は海軍の出ですから。そういう方面は陸軍の熱血漢サマのお仕事です。それはさておき、今から早退させていただいてもよろしいでしょうか？」

久留米の反応があまりにも冷めたものだったので、越谷は肩透かしを食らった気分になる。まあいいやと、越谷は久留米の要件を聞くことにした。

「なんだ、そんなことか。なにかあったかい？」

「先ほどの脱線の件で、海情に呼ばれました」

「へえ、そうなのか」

脱線になんて情報組織が関わっているのかよくわからないが、とりあえず越谷はOKを出した。

「しかし困りました。こんなことになるとは思っていなかったのでカメラを忘れてしまいました」

「あ、それなら、私も一緒にしてもよろしいですか？」

困り顔の久留米に、美里が助け舟を出した。

「私もこの後行く予定だったんです。どうですか？」

「うーん、しかし……」

予想外に渋る久留米に対し、美里は不思議に思いながらも説得にかかった。

「お邪魔は致しませんから、ね？」

「まあそういうことなら。では、申し訳ありませんが写真撮影をお願いいたします」

その言葉を聞いて、美里は頬を紅潮させながら飛び上がって喜んだ。

「しかし、久留米君。一体なんで君が呼ばれたんだ？ 民間人一人同行させるのがためらわれる現場なんて、どんな現場だい」

久留米の態度を不思議に思った越谷は、久留米にそう質した。すると久留米は、手を頬に当てながら困ったように漏らした。

「詳しくは言えないのですが、実は赤軍関係らしくて」

「なんだってえ！」

社内の人間が一斉にこちらに注目する。

ここは対ソ防衛の殿。国内の赤軍情勢はまるで他人事ではないのだ。

「え、ちょっと待ってください。脱線って、そういう脱線ですか？ これテロですか？」

サーッと血の気が引いてくる美里。ずりずりと後ずさりを始める美里の腕を、久留米はがっしりと掴んだ。

「では、よろしくお願いいたしますね」

「ヒイイ」

物騒な言葉が飛び交う狂騒の中で、越谷はただ一人考えていた。これから何が起ころのだろうか、そして、この鉄道の未来はどうなるのであろうかと。

「久留米君、何かわかったら連絡してくれ。情報を知りたいし、何か協力できるかもしれない」

「ありがとうございます。では」

「え、本当に、ほんとにですかあ!？」

引きずられていく美里を見送りながら、越谷は数十年前の大陸戦線に思いをはせた。

「これは、荒れそうだな」

窓から空を見上げる。空からは、雪が降り始めた。

越谷はまるで、音もなく何かが忍び寄ってきているように感じた。

「まさか軍事機密の取材をすることになるなんて思っていませんでしたよ」

美里は涙目になりながらシャッターを切る。目の前には惨状が広がっていた。

機関車が脱輪した状態で止まっている。その次の貨車は斜めになっただけで、そしてその後ろの貨車が横倒しになっていた。幸いにも被害者は出なかったが、無残にも引き裂かれた車輛たちの断末魔が聞

こえてくるような現場だった。

貨車は脱線の衝撃で破壊されていて、荷物が散乱している。そしてその荷物は、黒光りする凶悪な得物。AK-47を含む東側兵器だった。

「しかし、これは……」

「カラシニコフ、トカレフ、RPG-2、及びその弾薬。舐められたものですよ」

線路脇に散乱する武器を一瞥して、久留米はそう吐き捨てる。

「これ、密輸ですか？」

「ええ、大方到着先は大泊港でしょう。大泊港の端は今工事中で、アカの拠点になりやすいんです。ああ美里さん。これの写真、お願いします」

久留米は分析しながら、目に留まったものを美里に撮らせた。

「久留米さん、私雑誌記者ですよ。本当にいいんですか？」

「ええ構いません。まあ、その代わり、情報の管理は私にさせていただきますけれど、その分お礼は致しますよ」

につこりと笑う久留米の顔が、今までに見たことないぐらいに恐ろしいものだと思里は身震いした。

その禍々しい微笑に今日何度目かわからない血の気が引く思いを感じつつ、美里は取材を続けた。

「ところで久留米さんは、この脱線は赤軍のテロとお考えですか？」

「いや、それはないでしょう。テロリストからしたら、この脱線で武器密輸の存在が露見してしまった訳です。まったくもって不幸な事故だったと言うことができると思いますよ」

「はあ、となるとこれは単なる事故……。原因はなんででしょうか」

「それはちよつと私は門外漢なので……。ちよつと調べてみましょうか」

そう言つて久留米は現場へと近づいた。現場に近づくほどに、何やら揉めている声が聞こえて来た。

見てみると、声の主は警備の軍人と作業服に身を包んだ役人だった。

一人は動輪のマークを、もう一人は「運輸省」と書かれた名札を持っていた。

彼らは、彼らの現場入りを阻止せんとする警備の軍人と押し問答を繰り返していた。

「事故調査は我々の管轄でしょう。なんでそちらが出張ってくるんだ」

「これは単なる脱線事故の領域を超えたんです。もう既に高度な政治性を有する事態に発展しています。以後は、陸軍が事故調査を担当します」

「あのねえ。これは国鉄管内の、国鉄車輛の事故なんですよ。実際、国鉄機関士が怪我をしているんだ。この件は国鉄案件です。国鉄に調査をさせなさい」

「いやいや、国鉄による調査では中立性が担保できないでしょう。こっちは武蔵境の事故で証拠の保全をそちらが怠ったことを忘れてはいないですよ。ここはしっかりと事故調が……」

ついに陸軍・国鉄・事故調査委員会が三つ巴の言い争いを繰り広げはじめた。堂々巡りの議論のちに、ついに陸軍の兵士が口を滑らす。

「あのですねえ。先ほどから申し上げている通り、これは既に国防レベルの話に発展しているんです。イチ外局の人間なんて通せるわけが……」

「なんだとおー！」

「イチ外局と言ったな！そうかそうか、よく覚えておきたまえよその言葉を！」

まさに電光石火。軍人の失言に、そろそろ堪忍ならんという思いの役人どもは雷に撃たれた花火のように怒り始めた。

「運輸省経由できつちり苦情は通させてもらうからな！」

「軍用列車なんざ止めてやらあ！」

「おうおうおう上等じゃ！ 基地一個街ごと吹き飛ばしたモンらのクセに生意気じゃのう！ やれるもんならやってみい！」

「ちよつと、君！落ち着いて！」

丁度現場に到着した警察官が、その様子を見て止めに入る。青い制服に身を包んだ警察官。きつと所轄の者だろう。

久留米と美里は、これで騒動が収まると思った。

「はい、はい！ 樺太庁警です！ この事故の管轄は我々ですから、どうぞお引き取りください！」

だが現実には、火に油を注ぐ結果にしかならなかったようだ。

「なんだとお！警察風情に何が解る！ だいたいいつもいつも何かあると証拠品をかつさらいやがって！ 捜査能力もないくせに威張るな！」

「これは既に国防問題だとさつきから申し上げている！ 外局風情も警察風情も、通す訳にはいかない！」

「事故の捜査権は警察にある！ それを捻じ曲げるとは何事か！ 偉ぶった奴らの言い分を聞いては司法が歪む！ ええいここは、なにがあっても通させていただくぞ！」

「コラッ！ ピストル野郎が無理をするな！ こっちは小銃だぞ！」

「貴様ごときにピストルなんぞ使うかいな！ 腰抜け一兵卒め、警棒で十分じゃ！」

ついに乱闘騒ぎ一歩手前と言ったところで、鉄道連隊の人間が到着した。軍の制服を見て、騒ぎは鉄道連隊の人間にまで広がった。

「オイ貴様あ！ 貴様も軍人だなあ？」

「まずはおめえさんからじゃあ！」

「オイ、馬鹿、わしらは何もしとらん！」

すったもんだの大騒ぎへと発展したのを見届けて、久留米と美里の二人は静かに事故現場へと向かった。

「お疲れ様です、的場さん」

「ああ、久留米さんじゃないですか。お疲れ様です」

久留米は、作業をしていた一人に声をかけた。その男は作業の手を止めると、久留米に軽く会釈した。

「原因は何ですか？」

「速度超過による軌道破壊がもたらした脱線でしょう。まあ、もしくは他に要因がある可能性もありますが、現在のところ作為的なもので

はないと思われます」

「そうですか。詳しく見ても？」

「ええ、どうぞ」

許可を得ると、久留米はぐちゃぐちゃにひしゃげた貨車のそばまで足を進める。

「車番がかろうじて読めるわね。ワム37564……。この貨車のここ数日間の動きを追わないと」

久留米はポケットから電話機のようなものを取り出す。

「それ、なんですか？」

「携帯電話ですよ。的場さん、電信は生きてますか？」

「大丈夫ですよ。3スパン向こうの柱です」

「すみませんどうも」

久留米は的場に礼を言うと、現場から三つ離れた架線柱へ向かった。そして『携帯電話』から伸びるコードを、架線柱に突き刺した。

「こうすると、電話ができるんですよ」

「へえ、鉄道電話ですか。便利ですね。一般にも開放したらよろしいのに」

「そうしたら輻輳ふくそうしちやいますよ」

久留米は笑いながら電話を掛けた。

「ああもしもし……。はい、久留米です。事故の件ですが……」

黒電話が鳴き声を上げたのは、定時近くの16時50分だった。越谷が電話を受け取ると、電話の相手は久留米だった。

「おお、久留米君か。何かわかったのか？」

『はい、とりあえず脱線は事故らしいことと、当該貨車の車番が分かりました。そちらの情報網を通じてこの貨車の足取りを調べていただきたいのです』

「分かった。……。信頼できる人物の方がいいよな？」

『ああいえ、調査自体はこちらでダブルチェックをするので、別に特に配慮の必要性はありません。それに、しばらくすれば情報規制も解除されるはずなので』

「そうかわかった。ちよつと待ってくれ」

越谷は国鉄謹製メモセットを用意した。書き留める体制が整ってから、久留米に先を促した。

「では、車番を頼む」

『えー、事故当該はワム74203・37564・38674で、脱線し密輸兵器があることが確認されたのがワム37564のみです』

「えーと、ワムの37564を調べればいいんだな。37564か。

ミ・ナ・ゴ・ロ・シで覚えれば覚えやすいな。……あっ」

越谷は思わず声を上げる。その声に、電話口の向こうで久留米が訝しがる。

『どうかされましたか?』

「めんどくさいことになった。帰って来てから話すよ」

越谷はそれだけ言つて電話を切つた。

「兄貴、それって……」

「ああ、不味いことになった」

ワム37564。ミ・ナ・ゴ・ロ・シの語呂合わせで覚えていたそれは、つい数日前に彼らが目撃したそれだった。

「これは、不味い!」

「なあ、分かつてるな?」

暗い部屋の中で、男は問いかける。この極寒地であるにも関わらず、隙間風が吹きすさぶようなところで、男は黙り込んだ女に詰め寄る。

「……」

無言を貫く女に、男は忌々し気にモノを投げた。

「聞いてるんだ！」

女はひるんでその場にへたり込み、祈るように目を閉じる。

「良いか。港から密輸兵器^ッが上がったら、貨車に乗せる。お前は“徴用貨車”と書かれた札と、荷票を軍用に偽装したものに換えればいいんだ。できなかつたら、わかるよな？」

男は武器など使わない。服も着ていない。だがそれゆえに、女にとっては恐怖でしかなかった。

「全ては来る革命の為に」

男は女の頤を上げると、喉元に無理やり口づけをした。

「もちろんです、兄さん」

三田恵子は、涙を流しながらそうつぶやいた。

9. く第一仕業く1レ：雲行き怪しく。前方注意

「どうなさるおつもりか!」

三軍の男が、会議室で青筋を立てながら怒鳴りつける。怒鳴りつけられているのは、発鉄幹部の面々だ。

「やはり原因は尾羽で、そしてその主原因は発鉄ではないか! これはいかがなさる。いかがなさるのか!」

「発鉄といたしましたは、警備体制の強化を行っていきたい考えです」
「それでは足りぬと言っているのだ!」

男は口角泡を吹き飛ばしながら怒鳴りつける。もはや堪忍ならなといった様子に、発鉄の面々は何も言うことができない。

「そうは言われましても……」

「ともかく、早急に対応しろ! さもなくばいかなる手段も辞さないぞ!」

男はそう言つて、勢いよく立ち上がると、そのまま部屋を飛び出した。

男の名は颯田さつた義男よしお。陸軍から三軍委に派遣されてきた男である。

原隊は千葉第四鉄道聯隊。慣れない寒さに身体を震わせながら、三軍委の事務所までたどり着いた。

「颯田、帰着しました」

「お疲れ様です」

陸軍出身の颯田からすれば有り得ないほどに崩れた返礼を返す男は、民間出身の事務員だ。颯田は苛立ちを隠さずドカツと席に座る。

「その調子だと、芳しくなかった感じですかね」

「あゝクソ、どうしてこうなった!」

事務員がお茶を出すと、颯田は腹立たし気にゴミを投げ捨てた。見事にゴミ箱の上を空過したゴミを、事務員は拾い上げて捨てた。

お茶をすすりながら、颯田は広げた地図を眺める。その地図は、尾羽市北部地域がまるまる白塗りになっていた。

「君はこの白塗りの意味が分かるかい」

「要塞地帯法の定るところの要塞地帯であるため、軍事機密保護の観点から詳細な地図が秘匿されている、ということではないですか？」

「模範解答をどうも」

颯田の机の中から、今年修正されたばかりの地図が出てくる。そこは、尾羽市街の様子がはつきりと描かれている。

「市街地域はすべて、要塞の一部だったんだ。だが、市民生活や今後の北方防衛の強化を考えたときに、市民生活区域を開放し適切な管理の下で都市開発がなされる方がよいと判断されたから、我々はこの地域を手放したんだ。しかし、これではどうだ！」

颯田は窓から駅の方を見る。駅前には、観光客を迎え入れるための商店が立ち並ぶ。

「役所には知らぬ間に『観光課』が出来上がっているし、町内会には『観光推進本部』があるし、聞けばそれは市の指示だというし、極めつけは越谷さんのスピーチだ！」

「そんなに問題なんですか？ アのスピーチ」

「大問題だ！ 誰も何も触れていなかった。ひいては無かったことまでされているが『観光発展の一助となるべく』と言ったんだぞ！

観光開発だぞ！ 日本中、いやともすれば世界から客が要塞地帯のすぐ隣にやってくるんだ。どれだけ恐ろしいことかわかるか？」

ひとしきり激昂した後、颯田は椅子に沈み込んだ。

「越谷さんは我が日本陸軍の誇りだったのに。彼だけは我々の見方だと思っていたのに」

在りし日の英雄越谷の姿を思い起こしながら、颯田は悲し気に目を瞑った。

その頃本社会議室では、不穏な空気が流れていた。原因は、三軍委の対応に腹を立てた久留米である。

ことは、三軍委が尾羽の勢力図と言う機密を越谷に漏洩した、とい

うことを久留米に話したことに始まる。

本件情報は海軍情報局が三軍委に対し情報共有したものだが、海情は本件に関して一切の漏洩を禁じていたのである。

「と言うことは、三軍委は機密情報を社長に漏らしたんですか？」

しかし、三軍委はそれを越谷に対し漏洩した。相手が越谷だったからよかったものの、三軍委の行為はれっきとした協定違反である。

「どうしてそういう事するかなあ。情報の扱いはこっちに一任するって言つてたのになあ」

怒髪冠を衝くという言葉を思い起こさせるほどに、彼女は怒っていた。

「まあ落ち着いてください久留米さん」

「そうですね。落ち着いて処分しなければ」

「流石にこれ以上の刃傷沙汰はやめてくれ。平和に行こう。和を以て貴しとなす。聖徳太子もこういつていることだ。とりあえず、向こうさんの意見としては発鉄は市内輸送のみにあたり、決して市外輸送にはあたらんで欲しいというものだ」

今にも皇軍相討つの危機に発展しそうな気配のする久留米の肩を抑えながら、越谷は状況を整理した。

「陸軍は、北鉄に対しても既に佐保を境界に普通列車の運転系統を分離するように指示しています。本土から樺太に移り住んでくる人はお金もないので普通列車でこちらに来るわけですが、陸軍が指示したダイヤの為に多くの人は佐保で降り、そのまま佐保に居つくそうです。今佐保は本土から移り住んできた人たちや外国人で溢れかえっていますよ。財閥系や国策企業系が重要視していないために尾羽の方が潤っています。数年後には佐保の方が尾羽よりも賑わうでしょう。ただ……」

宇佐美は気まずそうに目配せをした。越谷が目線だけで先を促すと、少し逡巡してから話をつづけた。

「佐保の治安は正直言って尾羽より数段落ちます。そして、佐保からもあぶれた人間は更に北を目指して尾羽にやってきます。現在でも、

毎日そうした人が普通列車で尾羽に来ていることは事実です。陸軍が、そのあたりを不安要素としているのは事実でしょう。そして、尾羽市は逆にそれを好機ととらえています」

「ああ、確かにそうだな。尾羽市は人口拡大を狙っている節がある。この都市計画の資料にもそう書いてある。そしてそのうちの施策の一つに観光開発がある。尾羽市は観光などの面からも尾羽市の発展を狙っているようだ」

越谷は、市から寄せられた都市計画資料をめくりながらため息をついた。

「もう、直接市と軍でやってくれんかね」

「そうですね。決定権の乏しい我々に言われても、という感はありません」

「そもそも、この件に関しては決定の主体は我々ではないわけで……。しかし、樺太庁は尾羽市の都市開発には乗り気ですが、観光開発にはそこまで乗り気ではないんです。そもそも、都市開発に観光は不可欠なわけではありません。なぜ尾羽市はここまで観光にこだわるのでしょうか」

宇佐美が不思議そうに言うと、越谷もそれに同調した。

「トウジ……宇佐美の言う通りだ。尾羽の観光開発はあまりに性急過ぎるくらいがあるように思える。財政は大丈夫なのか？ 宇佐美」

「僕に言われても……」

「問題ありません」

口ごもる宇佐美の代わりに、瀬戸が答えた。

「尾羽市の財政は発鉄の財政に直結する為確認を続けていましたが、現時点では尾羽市財政にそこまでの破綻は見られません。ただ……」

「ただ？」

「まるで資金を使い切ってしまうおう、と言わんばかりの大盤振る舞いには、少しうすら寒いものを感じますね」

「うーむ、これはいかに。将来的には尾羽市がアテにならなくなる時が来るやもしれんなあ。瀬戸さん、我が社単独の財政はどうなってるんですか？」

「まだ開業から一カ月もたつてませんから何も言えません。が、とりあえずは順調であると見立ててはいます。ただ、雪による運行の乱れが気になることはありませんが」

瀬戸が桐谷の方をチラリとうかがうように見ると、桐谷が続けた。「現業からの報告ですが、雪が深いこともあつてかそこまで人は乗つとらんそうです。まあ、これから先雪が解けるにしたがつて利用者も増える事でしょう」

「うむ、結構」

とりあえずの心配がないことを確認した越谷は、鷹揚にうなづいた。

「じゃああとは三軍委をどうするか、だけだな。これは久留米君、君と話し合おう。君も一応三軍委の人間と言うことだからね」

「分かりました」

越谷はそれだけ確認して、会議を終了した。

「それで、貨車の方は？」

「社長が正しいようです。確かに、尾羽発でした」

残った久留米は越谷に声を潜めて伝えた。

「荷票は本斗↓大泊港。恐らく尾羽から列車を継いで本斗まできたのでしよう。荷主欄は架空の企業名がありました。運び込み先はもぬけの殻で、恐らくはまたここからどこかに輸送されるはずだったものと考えられます」

「尾羽では貨車に対して臨検があるはずだろう？」

「それなんです、どうも記録があやふやなんです」

「どういうことだ？」

「同じ番号の貨車が何両かいるんです。それに、貨車の記録を追っているのですが、矛盾点が多くて……」

深刻そうな顔で言う久留米に、越谷は何か思いついたような顔をした。

「そういえばおかしいな。ワム37564と言ったな。しかし、そんな車両は樺太には来れないはずなんだ」

「どういふことですか?」

「ワム37564、番号表を見るとこれはワム23000形のひとつと言うことになるが、だとするとこの車輛はもうすでに改造によってこの番号ではなくなっているんだ。つまり、この番号を名乗る貨車は現時点では存在しないことになる」

「……とすると、あのワムと呼ばれる貨車は偽装された車番が書かれていたと?」

「かもしれない。写真はあるか?」

越谷がきくと、久留米の懐から昨日美里が撮ってきた写真が出て来た。

貨車は褐色で、白い帯が入っていた。

「二軸単車……。車軸は二段リンク式だな。この時点でやはりワム23000ではない。ワム23000は二段リンク式への改造と共に形式番号をワム90000に変更しているからな。……いや待てよ? これはもしかして、ワム3500改造車か? ワム7564にインフレンバーの3を植えたように見せかければ見栄えはする。いやしかし……」

写真を見るなり、越谷はぶつぶつと何かを言い始めた。

「ええと、つまり?」

「国鉄において同じ番号の貨車が複数存在するというのはままあることなんだ。だから国鉄の人間も特に怪しまない」

「なんとも杜撰ですね。おかげで足取りを掴むだけでも一大事ですよ。見てください。樺太だけに絞っても、この番号で変な動きをしている貨車がたくさん……」

久留米がそう言っただけで来たのは、「ワム376564」の足取りを詳細に記した紙だった。

「貨車車票か。良く残っていたな……。列車番号は書いてあったか?」

貨車車票とは、その貨車の行先や輸送品目、あるいは急ぎかどうか、更にはどの列車に連結することが求められるかなどが記載された紙である。久留米が持っていた紙は、それを丁寧に書き写したものだっ

た。

「すみません。どれが列車番号ですか？」

「いや、ほとんどの場合書いていないんだ。ああやっぱり、本斗から大泊港への車票は空車で私有貨車の回送と言うことになっている。特に急ぎの荷物では無いから列車の指定はされず列車番号の欄は空欄になっているな。こういう場合は空いてる列車で適当に運ぶんだ。それで、肝心の尾羽から本斗への車票だが……。あつた。おや？」

そこまで言つて、越谷は変な顔になる。

「列車番号の指定があるな。ええと、『配1088レ』？ 聞いたことがない列番だなあ」

「ああ、これが列車番号だったんですね。それで、どういう意味ですか？」

「この配1088レというのは配給列車というもので、国鉄都合の荷物、例えば余りの貨車や新車、廃車、もしくは切符に使う紙だとかの小物や交換用の車輪、そんなものを運ぶための列車だ。ちよつと待ってくれ」

そう言つて越谷は業務用時刻表を取り出した。

「ええと、配1088レは……。尾羽駅から佐保駅へ向かう列車だ。思い出した。これは試運転列車だ！」

「どういうことですか？」

「山本駅の先に車輛の検査などを行う山本工場があるだろう。そこで検査を終えた貨車はこのスジダイヤで試運転を行うんだ。配給列車の中にはそういう列車もある。そして検査開け試運転とするならば、まさか中に荷物が入っているとは思うまい。検査なんかしないだろう」

「そんなこと、できるんですか？」

「簡単さ。ここの列車番号のところに配1088レと書いてしまえばいい。そうして安全に尾羽を出れば、あとは勝手に適当な列車につなげられて本斗まで行つてくれる」

「なるほど……。尾羽駅へはどうやって？」

「南港のあたりの倉庫群には専用線がたくさん伸びていただろう。そこからどうやってか運んだんじゃないかな。とにかく貨車さえ用意

「されていれば、国鉄はそれを運ぶだけだ」

「倉庫……。そういえば、この間空き倉庫を根城にしていたグループを叩き潰しましたが、まさか？」

「可能性としては高いだろうな」

「ここは極寒地尾羽。冬季はもぬけの殻になる倉庫があることもある。そこに拠点を作り、他の業者に紛れて荷物を発送する。久留米は、確かにバレにくいだろうなと思った。」

「なるほど……。かなり巧妙に練られていますね。社長、こういった列車はほかにもあるのですか？」

「もちろん。日本全国どこでもいつでも走っている。それこそ、帝都のど真ん中でもだ」

自分で言つて、越谷は背筋が凍る思いがした。

これの中身が武器でなく、爆弾だったら。

その列車が尾羽でなく、山手貨物線を走行し新宿駅を通過していたら。

まさか関東の鉄道工場である大宮、熊谷で同じ事態が起きるとは考えにくかったが、それでも怖い思いがした。

「ともかく、捜査に光明は見えずとも道は見えました。ご協力感謝します」

「別に構わんさ。して、どうするつもりだ」

「持ち帰って、港湾部の捜査の徹底を進言してみようと思います。これは、なかなか大変な戦いになりそうです」

「というのが事の顛末です。十合さん、とりあえずお知らせしておきますよ」

電話の向こうから、「私はもう長官でもなんでもないのでだからやめてくれ」、という抗議の言葉が聴こえて来た。

それを越谷は笑い飛ばした。

電話の相手は、越谷の昔からの知り合いで、鉄道業界の重鎮たる人物だった。越谷は今、その人物に帝都での懸念について話したところだった。

「何をおっしゃいます。新幹線の英雄にして国鉄再生の英雄じゃないですか。何も動いてくれと言っているわけじゃありませんよ。ご報告までです。ちゃんとやっていますというね」

『英雄とは君の代名詞だろうに』

そう言われて、越谷はまた笑った。それにつられて電話の向こうからも笑い声が聞こえて来た。そしてそのあとに、こちらでも動いてはみる、という言葉ももらい、越谷はすっかり弛緩していた。

しかし、電話口の相手は急に真面目な声になって言った。

『しかし卓志くん。君には悪いことをしたね』

「何がですか？」

『そんな場所に送ったこと、だよ』

ああそんなことか、と笑おうとすると、相手は更に深刻な声でこういった。

『話によると、三軍委とえらく揉めたそうじゃないか』

「……もう知れ渡っていましたか」

越谷は、電話口の相手が東京から遠い極北の些事の情報をもうすでに得ていたことにひどく驚いた。

『どうだ、“陸軍”は頭が固いだろう』

「ええ。しかし、慣れていきます。それに尾羽には空軍も海軍もいます」

言外に「頭の柔らかい連中もいるはずだ」と付け加えた越谷であったが、相手はそれを遮るように言った。

『問題はそこだ』

「そこ、とは……」

『君がいるところは尾羽なんだ。中央じゃない。雪と霧に閉ざされた日本の最北端だ。協力し合わなければとても生きていけない』

「どういうことですか？」

半ば禅問答になり掛けた話に耐えきれず、越谷はついつい率直に聞いてしまう。電話口の相手は、それを聞いてコロコロ笑った後にこう

言った。

『中央での政治的構造は、尾羽では通用しない、ということだ。君の眼には陸海空がいがみ合っているように見えるかもしれない。だが、それは東京病というものだよ。卓志くん』

「東京病、ですか」

『ああそうだ。よく覚えておきたまえ。いいかい卓志くん。樺太とは、日本の中に小さな地球があるようなものだ。そこにおいては東京の常識はおろか、日本の常識でさえ通用するかどうか怪しい。まずは、君の見ている世界が、東京の色眼鏡を通した景色であるということを強く認識すべきだな』

「……十合さんの時は、どうされたんですか」

『ひたすら、現地の人間の言うことに耳を傾ける。それだけだ。彼らなら、“樺太”を肌で知ってる。なに、彼らは東京人の無知に寛容だ。私も随分と助けられた』

現地に精通した人間、と言われて、咄嗟に久留米の顔が越谷の脳裏に浮かんだ。だが、彼女は違う。現地人ではない。では、誰か？ 思案しているうちに、相手は先をつづけた。

『抽象的な話で済まないね。より具体的な話をしよう。君が思っているほど、昨今の尾羽現地の陸海空は仲が悪くない。陸が動けば空も海も動く。それからもう一つ。この国には、国鉄があつては困る人間が、陣営の左右、もしくは国の親・反を問わず一定数存在する。彼らは、“英雄”を疎んでいる。気をつけなさい』

「ご忠告、感謝します」

今までにない声色の相手に、越谷は顔を引き締めた。

『何を。君と私の仲じゃないか』

相手は朗らかに笑った。その優しそうな笑い声は、昔から変わらないう優しいものだった。越谷は少し、緊張を解いた。

『運営は順調かい？』

「ええ、好調です」

『そうかい。それはよろしいことだ。雪に気を付け、無理はしないこと。では、また会おう』

「では」

電話を切り、越谷は煙草に火をつけた。なんだか嫌な予感が、胸の内を支配した。

10. く第一仕業く1レ：誤算

「戸ジメ点灯、後方確認よし、軌道進行！ 郵便局前発車、次停、尾羽中央停車！」

ハリのある声が運転室に響く。

本来なら混み合う朝時間帯、市街道路上に行くこの列車も普段は2両もしくは単行であるところ、4両に増車されている。モーターも大混雑に耐えられるように大幅に増強された車両を使用している。

「地獄」と評される朝ラッシュに完璧なまでに備えたこの列車は、少々どころでなく力を持って余し気味に前へ前へと進んでいった。

そんな列車を運転する運転手、大宮明雄は今日も淡々とマスコンを握り、この5000系電車を堂々と前に進める。路上には自動車、バス、軍用車、そして歩行者がひしめき合う。

「いやあしかし、これが滑り出し好調な路線のラッシュ時間帯、なのかねえ」

横でぼやいているのは、業務の為に尾羽駅まで便乗する三田だ。

「……これ、ほんとに大丈夫なんですかねえ」

信号待ちの間に後ろを振り返る。軌道線での運用を前提としている5000系は客室と運転室との仕切りがなく客席を直に見る事が出来るのだが、利用客の姿を認めることはやはり、できなかつた。

「ね、大宮君。今まで朝ラッシュ運転してて手ごたえあったこと、あった？」

「新羽線の朝ラッシュ以外はいいですかねえ」

今、大宮が運転しているのは軌道線、つまりは路面電車線の環状線だ。この鉄道で一番の稼ぎ頭として期待されている路線で、初日の営業成績でも一番をたたき出した線区だ。

話に上がった新羽線は新団地と尾羽駅を結ぶ通勤路線。この鉄道で最も採算が合わないであろうと危惧されていた路線である。

「やっぱりおかしいですよね。ここが一番混むから覚悟しろって、試運転の時からおやつさんにドヤされまくったのに」

「ほんとによねえ。私、開業の日以外で乗車率が二割を超えたの見たこ

とないわよ」

「あ、僕もです。やっぱ乗ってないですか」

自動車用信号が青になる。割り込んできた交通違反の自動車を先に行かせて、ゆっくりと走り出す。

「ねえ、本当に大丈夫なの？ この鉄道」

「大丈夫なんじゃないですか？ お偉いさん方はなんか数字見ながらよかったよかった騒いでましたし」

「……それ、新羽線の数字だけ見たんじゃないでしょうね」

「さあ……。そう言われても……」

二人はそのまま押し黙った。振り返るとお客は3人しか乗っていませんでした。

本来なら立客が出るほど混み合うだろうとされていた車内には、誰かが捨てた新聞紙が暖房の風に揺れているだけ。

そのまま止まったり行ったりを繰り返しながら、電車はよつこのことで終点へたどり着く。その頃には、もうお客は乗っていませんでした。

二人は顔を見合わせて、首を傾げた。

「じゃあ、とりあえずの数字は明日出るんだな？」

「ええ、そのつもりです」

越谷は入社してきた瀬戸を呼び止めて話をしていた。内容は明日出るというとりあえずの鉄道運輸収支だ。

「開業一カ月の間の暫定の数値ですから、あまり意味のあるものではないでしょうが、とりあえずの動向ぐらいはつかめると思います」

「乗車率やなんかの話もそこで出るかい？」

「いえ、そちらは運輸部の方の話になるかと。桐谷さんの管轄です」

「あい分かりました。じゃああとで桐谷君に話を通しておくか。すみませんね、忙しい時に呼び止めちゃって」

「いえいえ……。と瀬戸は力無さげに答えた。」

越谷はそのままいつも通りに立ち去ろうとすると、その越谷を珍しく瀬戸が呼び止めた。

「あ、あとすみません。本日私は昼で抜けさせていただきまますので……」

「ん？ 何かご都合でも？」

「娘の病院に呼ばれていまして。すみません」

「瀬戸さんの娘？」

越谷が首をかしげていると桐谷がやってきた。

「ああ社長。瀬戸さんの娘っ子、今佐保の中央病院に入院してるんですよ」

「あら、それは大変だ。報告は多少遅れてもいいから今日は休みますかい？」

「いえ、それには及びません。病院からは夕方来るように言われておりまして……。定時だと間に合いませんが昼に出れば十分間に合いますから……。では……」

瀬戸は弱々し気な声でそのまま消え入るようにどこかへ行ってしまった。

「桐谷君。瀬戸さんのご息女の病気って？」

「ああ、ナンタラカンタラ症候群だか病だかいう難病だそうです。心臓手術が必要とか何とか」

「なんだって？ そりゃあ大ごとじゃないか。大丈夫なのかい？」

「大丈夫じゃないからここに来たんですよ」

桐谷の言葉の真意がつかめず、越谷は困惑する。

「どういうことだ？」

「あの人、もともと復興道路建設って会社のお偉いさんなんですけどね、娘の世話ができるようになって忙しい本店幹部職を降りてこっちに来たんですよ。今はああやって何回か病院に通ってるそうです」

「復興道路建設？」

「飯田重工系の会社で、尾羽の道路だとかを作ったところですよ。ああ、道路工事全般請負なんで、軌道線の線路敷設も請け負ってるはずですよ。まあ、飯田系ですから盤石な会社ですよ。そこの幹部職蹴ってます」

たわけですから……」

「そういうことか。なんだなんだ大変じゃないか。こちらとしても十分に配慮してあげなければいけない。しかし、よく幸谷君は文句言わなかったな」

「社長、貴方は私を何だと思っておいでですか？」

噂をすれば、奥の扉からひよっこり幸谷が顔を出した。

「私は悪魔や鬼畜の類ではないんですから。それに、彼は『経理の鬼』の二つ名をもつやり手ですよ。仕事さえまともにこなしていただけるのなら、こちらは何も言う権利はありません」

「いつもは社内秩序秩序うるさいくせに、珍しいこった」

桐谷が茶々を入れると、幸谷はムツとした顔をした。

「あの人は特別なんだ。貴様の何倍も優秀で謙虚で、なおかつ年上だ」

「おい。俺もお前の年上なんだが」

「社会人の、それも幹部職もなつてまで歳の差なんて気にしているのか？ 器の小さな奴だな」

「おい、お前今数秒前になんて言ったよ。ねえ社長、自分の今しがたの言葉さえ覚えてない奴に何が務まりますか。今からでも遅くないから国鉄に返品しましょう」

「まあまあそこらへんにしたまえ。ともかく桐谷君。君には乗客の利用状況の情報の用意を頼みたい」

面倒くさい方向に話が流れたのを悟った越谷は、半ば二人の話を無視するかのようには話を切り替えた。

「ああ、わかりました。けど何をするんです？」

「初動の利用状況を鑑みて、列車のダイヤや修正を行う」

ガタン、とモノが落ちる音がした。一瞬の静寂の後に、発鉄本社4階フロアは騒然となった。

「ちよつとまってください。本気ですか？」

そう血相を変えて越谷に詰め寄ってきたのは、桐谷の部下、運輸部運転管理課計画掛の藤波だ。

「オイ待て藤波。お前さんは戻れ」

桐谷に制止され、藤波はひとまず引き下がった。越谷は、計画通り

とばかりににやりと笑う。幸谷は何かおかしいと勘付き、社長席の前に立ちはだかった。

「みんな、仕事に戻りなさい。君たちが口を出すことではない」

幸谷が社長席に背を向けるとそう言い切る。社員は憎々し気な視線を幸谷に向けながら仕事に戻っていく。

それを確認すると、幸谷は振り返って越谷の前で仁王立ちをした。

「しかし、こればかりは社員たちの言い分も理解できます。社長、ありえませんか。せめて10月改正まで待つべきでは？」

滅多に社員の肩を持たない幸谷が、こればかりは社員の肩を持つた。

「なぜ、そう思うんだい？」

越谷は幸谷に対して挑戦的な笑みを浮かべる。幸谷はあからさまに不機嫌な顔をしながら口ごもった。

「私は現場のことなど知らないのです、ダイヤの策定に何カ月かかるのかは存じ上げません。が、しかし、制定から一カ月のダイヤを弄るなど正気の沙汰ではないことぐらい、私だって存じ上げています」

「なんにも知らない幸谷おぼっちゃまの代わりにあつしが答えましょう。通常改正であれば一年、小改正でも半年、白紙改正であれば5年を要して各部との折衝の末にダイヤ改正を行います。こんな『数週間単位』でのダイヤ修正は異例、というより、無謀ですな。旧東武管区の連中なら絶対に、旧西武管区の連中でさえも止めるでしょう」

歯切れの悪くなった幸谷を鼻で笑いながら、桐谷が越谷を諫めようとする。

「もちろん、承知している」

「ならばなぜ……」

全てを判っている、といった面持ちの越谷に、幸谷は食ってかかった。

「しかし、それでは遅いのだよ。ここは樺太の最北。雪は6・7月まで残り続けるし、秋は10月くらいから雪が降り始める。そんな環境で、通年計算で造られたダイヤが役に立つと思うのかい？」

「それはそうですが……」

言いよどむ幸谷に越谷はまくしたてる。

「であるから、発鉄はこの通年ダイヤを基軸としつつ、きめ細かなダイヤ修正を行いダイヤの適正化に努める」

ついに幸谷は頭を抱え込んでしまった。そこに桐谷が珍しく幸谷の肩を持った。

「しかし、あつしも少し疑問に思いまさあな。そんなことができないで？ ダイヤの修正なんてもんはさつきも言った通り楽なもんじゃないですよ」

桐谷の質問に、越谷は胸を張って答えた。

「国鉄西東京鉄道管理局というものがあるね？ 君たちの中には知らない人間もいるかもしれないが、私はそこに居た。そこは中央線を始めとする首都圏中枢路線を管轄する部署なわけだが、私が居た時代、すなわちテロ後の復興輸送では、比喻でなく毎日ダイヤを変更して運行を行っていた」

「ああ、聞いたことがある。中央線奇跡の復興輸送！」

扉の隙間から盗み聞きをしていた藤波が勢いよく飛び出してきた。

「君、桐谷に帰るように言われていたのでは？」

「すみません幸谷さん、つい。社長、あれですよ。復旧状態や沿線の復興状態、その日の交通状況を見極めて毎日ダイヤを修正したっていう、あの伝説の復興輸送ですよ！」

藤波は幸谷を押しつけるように前のめりで話し始めた。

周囲からは、あれか、と思い出したような声が漏れだし、だんだんと空気の温度が変わっていくのが越谷には分かった。

「そうだ。あれは有事の緊急対応であったし、あそこまでやれとは言わないが……。この作戦は日本屈指の過密路線たる中央線でやってのけたのだ。まさか、この鉄道で出来ないと言うまい？」

越谷の煽るような発言に、発鉄の社員たちは徐々に気色ばんでくる。その中で幸谷だけが険しい顔をしていた。

「しかし、非常時でもないのに非常時体制を敷けと言っているに等しいですよそれは」

幸谷の指摘に、越谷はまさに！ と指をさした。

「考えても見てくれたまえ。夏は濃霧で、冬は大雪。落ち着いたころには大規模演習やらで特別列車をしたてる、旅客は後回しだと陸軍が無理を言ってくる。常に非常時みたいなものだ。どうかね？　ここでも十分通用しそうだろう？」

「私は反対ですね」

越谷の雄弁な語りに皆が我を忘れて目をきらめかせる中、幸谷は一人冷たく言い放った。

「今は、平時です。それに、有事であったとしても、その作戦は酷い混乱をまねいた。模倣すべきではないでしょう。まあ現場がどうなつたとしても私の知ったことではないですが、しかし場当たりの運行計画は、のちのちの車輛計画に支障をきたします。最悪、年単位で車輛繰りに支障がでることになります。これは問題です」

幸谷の真つ当ともいえる意見に、ここで桐谷が水を差した。

「いや、良いじゃないか。運輸部は協力しますぜ」

「何を勝手なことを」

「なんだよ。この件は運輸部が飲めばそれで終わる案件だろ？　どうせ他社が絡むところは変えられないんだ」

桐谷は完全にその気のような。ひとり取り残された幸谷が怒りだす。

「だからなんだ！」

「大枠は変わらんのだからぐちゃぐちゃ言うなと言ってるんだ」

幸谷の激昂に桐谷は珍しく落ち着いて応えた。

「まあまあ幸谷君。君にも言い分はあるだろう。とりあえず、明日、数字が出る。その数字を基に話をしよう。桐谷君、感触では数字は良さそうなんだろう？」

「ええ、心配されていた新羽線の乗車率は良好です。一番の懸念線区が良かったので、まあ他の線区は見れていませんが一安心と言ったところできあ」

「こうなってくると、増発が必要かもしれん。今この街は急成長期にある。その流れを輸送量不足などで止めてはいけないんだ。もつとも、これが雪解けによるものなのか、尾羽の人口増によるものなのか

の見極めもしないといかん。修正ダイヤを適用してからまた一カ月後にはダイヤを変更する。こうやって妥当な落としどころを探っていこうというものだ。こう聞くと悪くはないだろう?」

「それは……」

幸谷が言いくるめられようとしているのをいいことに、桐谷は調子に乗って動き出そうとする。

「車両繰りを考えにやならん。こうなつてくると眠ってる旧型国電も叩き起こした方がいいですかねえ。関係他社との折衝も必要になつてくる。楽しくなつてきますよう!」

「おい、桐谷!」

幸谷は口角泡を吹き飛ばしながら反対を表明し続ける。

「いけません。10月改正まで待つべきです。それに安易な増便は運営の破綻を招きます!」

「君の気持はよくわかる。だから、とりあえず明日出る数字を見よう。私も慎重論には賛成だ。それに、私が提案するのはダイヤの適正化だ。わかるね? 決して無鉄砲に増やそうつて言うんじゃない。減らすべきところは減らそうということだ。それには君も賛成なんじゃないかい?」

越谷の、ある種の幸谷擁護とも取れる姿勢に憤懣やるかたないといった面持ちで押し黙ってしまった。

「という訳だ。とりあえず明日だ」

越谷は幸谷に申し訳ないと思いつつ、その場を締めくくった。

「大宮君すまない。待たせたね」

身支度を済ませた大宮のもとに越谷が小走りで行ってきた。

「いえいえ。ただちよつと急がないとまずいかもしれないです」

大宮が懐中時計を見ながらそう告げた。その正確無比な鉄道時計は17時丁度を指示していた。

二人の目的地は、お互いの娘が通う小学校である。なぜ、そんなところに行かねばならないのか。事は、昨日の晩にさかのぼる。

「明日の夕方は用事がありますから、優香の迎えはあなたがやってくださいね」

「迎え？ なんのだ」

越谷が残業で少々遅くなって帰宅すると、すっかりぬるくなった夕飯と共に、そんな言葉で出迎えられた。

「優香の小学校での下校訓練ですよ」

妻であるよし子に、一枚のガリ版刷りの紙を渡された。そこには「下校訓練の為、父兄は迎えに来るように」と書いてあった。

下校訓練、とはこの時期の尾羽の小学校で行われるひとつの年中行事であった。

非常時を見越して児童を緊急帰宅させる訓練である。毎年入学式直後の4月に行われる。そしてこれは一週間ほど続き、その間保護者は毎日子供を迎えに行かなければならないのである。

越谷家も、そんな行事に巻き込まれた一つの家庭であった。

「用事……ならまあ仕方があるまい。わかった、私が行こう」

そして、どうせなら大宮君に会っているいろと現場の事を聞いてみよう。そう考えながら越谷は下校訓練へと赴くこととなったのである。

「そうか。なら急ぐ」

本社ビルを出て、二人は歩きだす。目的地は安塚小学校。幸子と、越谷の娘の優香が通う学校だ。

足元は湿っているが歩きにくいということはない。ただそれは大通りだけで、路地に入るとそうではなさそうだった。

もうすでに定時を過ぎた時間であり辺りは急に暗くなっていく。商店の親父がたまり水が氷にならないように箒ほうきでひたすら水を掃いていた。

「尾羽の夕暮れは早いな」

「そりゃ、最北端ですから。じきにうんざりするぐらい昼の長い季節がやってきますよ」

尾羽の道路は整備されていて歩きやすい。が、ところどころに罨のようなくぼみがある。大宮の言葉に気の利いたことを返そうと思っていた越谷は、見事に転んでしまった。

「大丈夫ですか？」

「いやはや、英雄が聞いてあきれれる。ああ、ありがとう。しかし……」

越谷はあたりを見渡して言う。

「尾羽の人間は慣れているんだな」

「尾羽の街は整備されていますし、それに街もまとまっていますからね。尾羽は歩きでどこまでも行ける、とはよく言ったものです」

「その言葉は初耳だな。こんな極寒豪雪の地で、市民は歩きで移動するののか」

「もともと人通りが多い町でしたから、尾羽は。昔から身を寄せ合って生きて来た街ですよ。アジア人は寒さには弱いかもしれませんが、集まって重なり合えば耐える事が出来る……。と、恩師が言っていました」

「にわかには信じがたい話だな。しかし、見る限りそうなのだろう。冬でも街に活気があっていいじゃないか」

「まあ商店は不死鳥通の商店街以外はかなりの店が閉まっちゃいますけれどね。それでも、活気があることはいいことです」

コンクリート製の歩道を進む。ところどころでマンホールから蒸気が上がっている。

「欧米人はこういう光景に郷愁を感じるそうだ。そういえば、この街にもちらほらと見えるな」

「欧米人が見たきや佐保とか、もつと南の方が多いですけど、確かに尾羽にもいますね。彼らは本当に寒さに強いんですよ」

「うらやましい限りだ」

そうこうしているうちに、校門の前に着いた。

「現在、17時42分。上出来なのは？」

「何とか間に合ったな。さて、二人を迎えに行こう。きつと待ちくたびれている」

二人は小走りに校舎へ急いだ。

優香は、友達とおしゃべりに夢中になっていた。それとは対照的に、幸子は隅っこで一人ぼつんとしていた。

「越谷さんのお父さんと大宮さんのお父さんですね。明日は訓練の最終日でPTAがありますので、必ず父兄が参加なさるようになさってください」

これは明日も早退することになりそうだ。越谷は手早くメモを取った。

ともかく二人は自分の娘を引き取り、家へ帰ることとなった。

「しかし社長、気になることがあるんです」

帰り道、大宮は思い切って越谷に聞いてみることにした。

「ほう。ぜひ聞かせてくれ」

「前、桐谷さんがうちの会社は出だし好調だと言っていたのですが、どあたりが好調だったんですか？」

大宮から経営に関する疑義が挟まれるとは思っていなかった越谷は、自分の考えを整理するがために話してみることにした。

「一番懸念材料であった新羽線において、沿線の新団地の入居者が当初予測を大幅に上回ったためか非常に乗車率が好調だった。であるから、おそらく運営は順調だろうという見立て、ということだ」

越谷がそう言うと、大宮は渋い顔をした。

「新羽線と、あと工業線その他と……鉄道線だけで収支は黒になるんですか？」

「新羽線だけでは無理だな。工業線を入れても不可能だ。なぜならこの二つの路線は通勤定期券利用が多いからな。割引率の大きい日本では、これらだけでは他路線も含めた収支を保つことはできない。そして、昼間の不定期収入も見込めない。市街地と基地を結ぶ各線も同じ理由で収益率は悪く、これを足しても収支はギリギリ赤といったと

ころだ。やはり、市街を走る軌道線の収入があつて初めて黒になるだろうな」

そこまで言つて、越谷はハツとした。

「……軌道線の感触は確認していなかったな」

「やはりそうでしたか」

不安が的中した、という顔で大宮が越谷を見た。

「その顔から察するに、悪いのか？」

「ええ。朝ラッシュでさえ、定員の2割を超えたことがあります」

「なんと」

越谷は腰を抜かしそうになった。まさかそんなに悪いとは。

時計を見る。時刻は18時を回ったところだった。

「その話を今聞けてよかつた。さあ大変だ。対応を考えなくちゃあ。今から会社に戻れば幸谷君か桐谷君が……」

と、越谷が踵を返そうとして、足元にいる自分の娘にようやく意識がいった。

「お父さん……？」

「ああ、すまん。今日は一緒に帰る約束だった」

越谷は優香のあたまをくしくしと撫でた。

「とりあえず今日は帰ろう。帰つて、明日のことを考えなければ」

越谷は胸に一抹の不安を抱えながら、優香の手を引いた。

翌日、越谷はいつもより早く職場に顔を見せた。

空はすがすがしく晴れており、何かの物語ならすべてがいい方向に転調し始める、そんな日和であつた。

空気がひんやりと気持ちがいい。まだ暗くグラデーションがかかった街の色が、特別な非日常間を演出してくれている。見ているだけで幸せになりそうだったが、越谷の胸中は穏やかではなかつた。

眠そうにあくびをする守衛に敬礼する。びっくりして眼鏡を落と

した守衛に、いつもであれば笑いながら眼鏡を拾ってやりなにか声をかけるだろうが、そんな余裕はみじんもない。

小走りに階段を上がり、社長席のあるフロアへ行く。もうすでに何人かの社員は出社していた。

「瀬戸君はいるかね」

そう目の前に居た一人に声をかけると、遠くからどたどたと誰かが走りくる音がした。

「社長！・ 大変です！」

瀬戸の声だ。そう認識した瞬間、越谷は頭が痛くなるのを感じた。状況は、限りなく悪そうだった。

11. く第一仕業く1レ：前途多難

「覚悟はしていたが、ここまでとは……」

改めてみる数字に、越谷は軽く眩暈を覚える。

「市長から呼び出されたそうですが、市長はなんと？」

「なんとかしてくれ、の一言だった」

そういうと幸谷も目頭を押さえるしぐさを取った。市長から何か指示なりがあつたのであればまだ動きやすいが、それもなければ自由に動ける代わりに面倒くさいことになる。

「なんとかしてくれ」の言葉が、それを余計に面倒くさくさせる。宇佐美はめまいがする思いだった。

「しかし、これほどとはね」

改めて、目の前にある数字を見る。

工業線、新羽線、北尾羽線と、普通鉄道線は上々の運賃収入があることを指し示していた。

問題はその下の市街軌道線、つまり路面電車線である環状線、南港線、山本・温泉線である。

ずらりと並ぶ明らかにケタが少ない数字は、損益分岐点よりもはるかに低いものだった。

「軌道線のなかでも工場街へ行く黒井線や灰原線はまだマシだな。こちらは微かにではあるがきちんと分岐点よりも上だ。問題は、一番の稼ぎ頭だった環状線と南港線、そして山本線だよ。なんだこれは」

環状線は市の中心部をぐるりと回る路線。そして南港線は旧市街地と新市街地、そして街の少し外れにある尾羽駅とを結ぶ主要路線だった。

山本線は軍の人間が多く住む山本地区と市街地を尾羽駅を経由せず直接結んでいる路線で、軍の保養地として扱われることもある尾羽温泉にも行ける路線である。

「運賃収入の傾向から見ると、工員のみが鉄道を利用しているということかね」

「さあ、それを含め、一切見当が付きません」

桐谷はそんな弱音を吐く。幸谷もこれにはなんの茶々も入れずに賛同した。

「もとは市内線は軍の管理の下に一部を工場勤務者に通勤の足として開放していたものです。その時の具体的な統計を軍は握っているはずなのですが、どうやら発鉄に移管するのが相当嫌だったらしく、具体的なもの一つも残っていません。ですので、最初一カ月の動向を見て諸々を判断しようということをやってきましたが、ここまで予想値と現実が食い違っているともうどうしようもありません。宇佐美君、樺太庁からは何か見解はないのかい？」

「樺太庁としても、ここまでの誤差は予想外です。新羽線と工業線の数値が予想より好況と言うことは我々の都市計画に狂いがあったわけでもない、ということなので、ますますわかりません。本来ならばすべてがうまくいくはずの状況です」

「しかし現実はいまうまくいっていないわけだ。尾羽市街は共同住宅やなんかも建っていて、万単位で人口が集中しています。山本地区だって軍関係者を中心にかなりの人口があります。どんなにこちらに非があつたところで、乗車率が2割を切るだなんてあり得ないんですよ。そうじゃないですか、社長」

幸谷のうめき声にも似た論述を聴きながら、越谷は考えを巡らせていた。そして一つの結論にたどり着く。

「……習慣がないんじゃないか？　公共交通を使うという」「どういうことですか？」

「これは聞いた話なんだが、どうやら尾羽の人間と言うのは徒歩で移動することあまり抵抗がないらしい」

「ああ、それはそうですね。樺太の中でも交通機関が未発達な北部はそういった傾向があるようです」

宇佐美が自説を補強してくれたことに安心したことで、越谷の語気は強くなる。

「ここだけ尾羽の人たちは公共交通を使用する、という発想がないんじゃないか？」

「あり得ますね。なんてったって、バス路線さえまともに整備されて

ない街です」

幸谷が街の地図を開きながら言った。

「現在尾羽は三社局のバス会社が参入していますが、そのうち現在も運行されている路線は二路線です」

幸谷が地図に線を引いていく。バス路線を示す線だ。だが、越谷は幸谷の言葉に引っかかる。

「……どういふことだ？」

「二路線を二者共同で運行していますね。南尾羽駅から尾羽駅、尾羽市街を経由して北にある寒果村へ至る路線、それから尾羽駅から西へ進み隣の小湾村へ至る路線です」

言い終わると共に、地図に線を引き終わった。バスは都心部から早々に閑散区へ入り、目的地へ一直線に向かっていく。途中で街中を移動する需要を見込んでいるような経路には見えなかった。

「どちらも共同路線で、なおかつ市外へ至る路線か。当然尾羽市民は使用しないんだろう？」

「尾羽交通事業者懇談会こんだんかいでは、そのような旨の発言があったと記憶しています」

越谷にとつて耳慣れない言葉がたくさん聴こえてくるが、とりあえず越谷は自分の認識は現実から近からずとも遠からずの位置にあるであろうとの認識をした。

「ということは本当に、尾羽市民は公共交通を使用するということが知らない？」

「現時点ではそう推測を立てるしかないと思いますが、久留米さんは不満ですか？」

「ええと、本当にそれだけなのかなって」

久留米は首を縦に振らなかつた。この中で一番尾羽に詳しいのは宇佐美だが、この中で一番鋭い嗅覚を持つているのは久留米だ。久留米がうんと言わないこと、不安になる。

「その、尾羽市民が鉄道利用に対して慣れていないことを含めて、開業一カ月間はいろいろと安定しないであろう、というのが当初の予想でした。そして、一カ月たちました。当初の予想だと市民はもう慣れて

いるはずですよ」

「それが、そうならなかった。違うか？」

「本当に、本当にそれが理由でしょうか。いくら鉄道利用に慣れていないといったって、市民のうち相当数が以前は本土に住んでいた人間です。尾羽生え抜きの間は17歳以下の未成年だけです。学生や若者が使わない理由はわかりました。しかし、17歳以上、もつと言えば30代の奥様が鉄道を利用しない理由にはならないわけです。本土の人間なら、少なくともこの街に来るまでの間に鉄道を利用してはいるはずですよ」

「鉄道を長距離移動手段としてとらえている場合は？ それなら、ちよいとそこまで」に鉄道を利用しない言い訳は立つ。君の出身は稚内だったろう。稚内でもそうなんじゃないのか？」

「それはそうですが、それは私が市街に住んでいたからと、鉄道が市街と市外を結ぶように創られているからです。もし稚内の市街に市電があつたら、私は使っていると思います」

久留米が言い切ると、誰もこれを論破できなかった。

先の見えない議論に、越谷が真つ先に音を上げた。

「さて……これはどうしたものかな。解決策がまるで思いつかない」「本当ですね。これではどうしようもありません。当座のしのぎとして、金策に走るほかなさそうです」

幸谷がそう言うと、瀬戸の目の奥が不気味に光った。

「それはお任せを。最低でも半年は持たせて見せます」

「対米戦争か。縁起でもないな」

越谷はそう言つて苦笑いした。

「ああ、しかし今日は帰れそうにないな。どうしたものか」

「社長、何かあつたんですか？」

「実は今日、娘の学校で昼から保護者会があつてね。それに出席しなきゃならなかったんだが、こんな状況で早退するわけにもいかん。学校には断りの電話をかけておこう。……もう時間もないな。今のうちに少し失礼するよ」

越谷がそう言つて受話器を取った。すると、幸谷がその手をそつと

押して受話器を戻させた。

「……ああ、悪かったよ。外で守衛さんの電話を借りてくる」

「ああいえ、違うんです」

てつきりこの場で電話を掛けることを咎められたと思った越谷は怪訝な顔をする。

「違うって、何が」

「社長、保護者会に行ってください」

幸谷はしごくまじめな顔でそう言った。

「どうしてまた」

「保護者会に参加する父母に聞いてきてください。彼らは鉄道の主たる利用客になるはずだった人々です。彼らになぜ、鉄道を利用しないのか聞いてきてください」

幸谷にそう言われ、越谷はポンと手を打った。

「それもそうだ。では今から行ってくる。あとは任せてもいいかい」

「ええ、構いません」

そう幸谷が答えるや否や、越谷はかばんをひつつかんで出支度をすませた。

「では行ってくる」

そして越谷は部屋を出た。その時、幸谷の「よし、厄介払い成功っ！」という言葉が聞こえた気がしたが、それは無視して越谷は先を急いだ。

階段の採光窓から太陽が見える。越谷は、少しだけ先が見えた気がした。

越谷を見届けてから、幸谷は「厄介払い成功！」と叫びながら小走りにトイレへ入った。

さあ私の天下だ。たとえ三日、いや三時間しかなかったとしても今この場においては自分が最高責任者である。

久しぶりの解放感に浸りながらチャックも閉めずにトイレから出ると、そこに美里記者が居た。

「きゃっ！」

出会い頭にぶつかりそうになった美里はいきなり現れた幸谷に驚き、そして閉められてないチャックに驚いた。

「申し訳ないっ！」

出鼻をくじかれた気分である。もつとも、厄介者がいないと言ってもどうせ明日には戻ってくるし、保護者会が終わったら「重大発見だ！」とかなんとか言いながら走ってくるだろうから、どうせ天下はすぐに終わる……いや、そもそも天下も取っていないのである。

幸谷が気分的に現実に戻されていいると、美里が顔を覗き込んできた。

「どうしたんですか？」

「いえ、いろいろありまして。ちょっと難儀しているところです」

「ああ、収支の件ですね。大変そうじゃないですか。おつとご心配なく。我々は発鉄のプロパガンダに徹するつもりですから、都合が悪いことは黙っておきますよ？」

「なら、一つ頼みたいことがあります」

冗談を言ったつもり的美里は目を剥いた。越谷はそのまま美里の肩をはつしとつかんだ。

「少し調査を頼みたいんです。内容は……」

幸谷の言葉に、美里は目をまわしながら首を縦に振った。

幸谷は、にやりと笑った。

12. く第一仕業く1レ：異音検知

教室に入った瞬間に、騒々しい声が一層うるさく感じられた。越谷は耳を塞ぎたい気持ちをこらえた。こうも耳をつんざくような音を聴くと、戦場を思い出してしまう。

教室に一步入ってあたりを見渡す。保護者会の為にコの字型に机が並べられている。

そして、比較的教壇に近い方に今日は非番だった大宮が見えた。どうやら、出席番号順では大宮の丁度隣になるらしい。背の高い方ではない大宮が、一生懸命に身体を小さくするようにして席に収まっているのがいささか滑稽だった。

「やあ、君の言った通りだったよ」

越谷は身をよじるようにして席に着くなり、大宮にそう言った。

「あら、やはり芳しくないですか」

「ここだけの話、君の予想は全部的中だ。他の事にかまけていないで、もつと君たちからきちんと話を聞くべきだった」

こここのところ挨拶回りや調整、その他判を押す仕事に忙殺されていた越谷はそれを反省するが、大宮はそれに対し変な顔をする。

「お偉いさんって普通そんなもんじゃありませんか。郵政時代、局長さんなんて一度も現場に来ませんでしたよ」

「まあ普通はそうかもしれない。だが、これは私のやり方なんだ。私は今までこのやり方と幸運でのし上がってきたわけだから、当然私はそれを期待されているということだ。できませんでは済まされないと、私はこれ以外にいい方法を知らない」

そんな会話を繰り返したところで、先生が入ってきた。

先生は神経質そうな女性だった。尾羽は全体的にこういつた役職に女性が付いている割合がやはり高いなあとよそ事を考える。

「ええ、ではすみません。今から紙を配りますので、順番に回していただけばと……」

消え入りそうな細かい声で先生はそう指示しながら、一番前の人間に紙を渡した。前から順々に紙が回ってくる。

プリントは三枚あった。うち2枚は学校だよりと連絡事項その他だった。学校だよりには校長の恐らくほとんどの人が読まないであろう挨拶文が大きく取り上げられており、その他に保護者会会長の挨拶、各先生の挨拶と続いていた。連絡事項には、こんな問題が起きただとか、三丁目で不審者が、だとか、父母会による通学路見守りに関する提言だとかが乗っていた。

越谷が気に留めたのは、その二枚では無く、最後の1枚だった。これは明らかに紙質が違い、越谷の注意を引いた。

「なんだこれは」

越谷が紙に視線を落とすと、それは三軍委の名前が書いてあった。

仰天して内容を見ようとすると、そこには「鉄道利用自粛の要請」と書かれていた。

「ええ、それでは」

「すみません、少しいいでしょうか！」

保護者会を始めようとした先生の言葉を遮って越谷が手を上げると、先生は身震いして首を縦に振った。

「申し訳ない。ええ、皆さまこんにちは。はじめまして。北部樺太開発鉄道から参りました『越谷卓志』と申します」

一気に教室がざわつくが、越谷はそれを無視して続けた。

「先生、お聞きしたいのですが、この紙はなんでしょうか」

先生は慌てて三軍委の紙を見る。そしてそのまま、あわわわ……と口を覆って固まってしまった。他の奥様方も、なんだなんだと紙を見て、そして気まずそうに口を押えて黙ってしまった。

「先生、これはどこからどういった命令で出たものですか？」

「え、ええと、あの、その、えっと私は」

泣き出しそうになりながらうろたえる先生を見て、大宮が立ち上がった。

「辻先生、先生が悪いわけじゃないってのは社長だってわかっていますよ。センセ、これどったんですか」

どうやら、大宮は先生と顔見知りのようだった。その大宮の方に目配せすると、「担任の辻先生です。このクラスは去年から持っています」

と耳打ちしてくれた。

その間も辻は完全に固まって話せなくなっていて、見かねた一人の母親が話し始めた。

「越谷さんね、これ、同じ紙が町内会にも他のところにも来てるのよ。たぶん、紙貰ってない人でも、軍に関係者がいる人なら知ってると思うわ」

「そうね、うちにも来ているわ。だから、先生は悪くないのよ」

「うちの亭主が悪いのよ。目くじら立てちゃってさ」

「言い出しつぺ、三丁目の日比野さんでしょう。あの人は昔っから……」

「6年の颯田さんの奥様が言っていたけれど、今回はかなりお冠だつて……」

やいのやいのとそれぞれが口々にいろいろなことを言い出す。

「ああ、失礼。驚きの余り語気が強くなってしまったことをお詫びします。大変申し訳ない。そして情報提供感謝します。先生、失礼いたしました」

越谷は一旦身を引くことにした。再び、身体をよじる。

ホツとした表情を見せた先生は、それから予定通り保護者会を続行した。耳の端でそれを聞きながら、越谷はどうしたものかと思案する。

陸軍に乗り込むか、海軍や空軍に根回しをして陸軍のこの「制裁」を解いてもらうか。

ここで疑問が上がる。なぜ、陸軍と仲の悪い海軍や空軍はこの件に賛同したのだろうか。

きつと、この「制裁」は陸軍の独断専行であろうから、海軍や空軍が従う道理もないし、このような極端な物言いに対しては彼らもきつと反対してくれるはずだ。

しかし、実際にはこれは軍部を中心に深く受け入れられ、市民のほとんどが軍関係者で占められている尾羽において、現実として不買ならぬ不乗運動が成功しているわけである。

なぜだ。あんなに海軍は敵ではなかったか。あんな憎らしい相手

とそう簡単に和解するものなのだろうか。海軍は陸軍を嫌っていなかった？ いやそんなはずはない。

そこまで考えが至ったところで、ついこの前の会話が急に越谷の脳裏をよぎった。

『中央での政治的構造は、尾羽では通用しない、ということだ。君の眼には陸海空がいみ合っているように見えるかもしれない。だが、それは東京病というものだよ。卓志くん』

『抽象的な話で済まないね。より具体的な話をしよう。君が思っているほど、昨今の尾羽現地の陸海空は仲が悪くない』

そうだ、つい先日十合がそう言っていたではないか。越谷はやつとこの言葉の本意を得た。思わず膝を叩いたが、それと同時に自らの考えの甘さを痛感させられた。

「ええと、これで本日は以上です。ありがとうございました」

越谷が思考に没頭している間に、保護者会は終わってしまったらしい。慌てて周囲を見渡すと、越谷の周りに人が集まり掛けている。

「ダイジョウブ、日本の電車、New Yorkのregionalに比べればとてもSafety。おらっちは乗るぜ」

一番最初に駆け寄ってきたのは、白人然とした男だった。その後ろに、華僑系の男が続く。

「日本人、安全、気にしすぎ。電車事故するもの。発鉄は安全」

二人はそう言いながら握手を求めて来た。幸谷は苦笑いしながらそれに応じた。

気持ちとはともうれしかった。だが、理由に少し引つかかってしまった。そう考えていると、日本人の奥様方も寄ってきた。

「まあそう言うことだから、がんばってくださいな。私たちもう地吹雪の中なんて、せめて街中では歩きたくないの」

「そうよ、許可が出たらいつだって乗ってやるんだから。ほんと、はやくいざこざが終わればいいのにな」

奥様方は越谷の肩を叩きながらそんなことを言う。少し、元気を分けてもらえた気がした。

「ありがとうございます。必ずや、我が発鉄は皆様の信頼と安心を得られますよう安全確保に全力を尽くしますので、ぜひとも我らが発鉄電車をよろしくお願いいたします」

越谷はもう一度頭を下げた。

今度は先生も近づいてきた。

「あの、私、ずっと越谷さんの事を本で一目見た時からお慕いしておりました。私明日から発鉄で通勤します！」

そう言いながら辻と名乗った先生は越谷の手を握り、ぶんぶんと手を振った。

越谷は苦笑いしながらも、なんだか元気をもらった気がした。

ともあれ、貴重な情報を得た。越谷は大宮に明日また会おうと約束を取り付けると、一目散に本社に向けて駆け出した。

「ああ、これは重大発見だ！」

今すぐに報告しなければ。越谷は夕陽に向かいひた走る。

この発見は、発鉄を揺るがしかねないほどに重要で、そしてすべての力ギになるかもしれない。なかった。

肺に冷気をいっばいに含みながら、悲鳴を上げる足に鞭を入れて走る。

「見つけたぞ、幸谷君！これが、これが真実だ！」

目を輝かせながら、越谷は暮れなずむ街を駆け抜けていった。

13. く第一仕業く1レ：見通し不良

息せき切つて本社に舞い戻つた越谷は、「詳しいことは明日に」という幸谷に無事追い返された。

であるから越谷は悶々としたまま夜を迎え、そして夜明けとともに本社へ向かつて駆け出したのであつた。

本社に着くと、もうすでに久留米が書類の整理をしていた。

「お、久留米くん。今日の久留米君は“表面”か」

久留米の髪は自然にたらされ、表情は慈母の様に穏やかだつた。

「ええ。今日は“仕事”がないものですから」

おほほ、と笑う久留米。やはり久留米はどのようなときにあつても久留米なのだなど、くだらないことを考える。

「さて、そんなことは良い。皆ももう知っているだろうが、陸軍が発銃に対し不乗運動を開始した。開業当初から現在まで、乗車率が伸び悩んでいるのはこの影響であると言える」

「久留米さんは三軍委から……というのは建前としても、軍からの出向でしょう。何か情報はなかつたんですか？」

宇佐美がそう言うのと久留米は小さくなる。

「はずかしながら、察知することはできませんでした……ごめんなさい」

「どうやら公的な手順を踏まず、婦人会や町内会から浸透していったらしい。海情まで情報が来ていなくても当然だろう」

「海情は海軍であつても海軍とは違う組織です。そこに落とし穴がありましたか……。このような大きな動きを掴めていなかつたとは、お恥ずかし限りです」

「しかたがない。君は今大きなヤマを追っているんだ」

慰めるように越谷が言うが、しかし久留米は顔を上げなかつた。尾羽の中に自分の知らない力関係があつたことが相当悔しかつたようだ。

「しかし、まさか陸軍だけでなく、空・海が連帯してくるとは」

「三軍委……か。とうとう本来のお小言組織としての正体を現した、というところだが、しかしあれだな。最初に私と会った三軍委の人間は人当たりのいい海軍の人間だったもんだから、やはり少しびっくりするよ」

「大熊さんと海原さんですか？」

「そうだ。あの二人はどういう立ち位置の人間なんだ？」

「海原さんが三軍調整委員長で、大熊さんがその補佐です。我々によく絡んでくる颯田さんは発鉄担当ですね」

「颯田氏の暴走と言うことは考えられんかね」

「そうだとしても、こんなことをしでかす理由がわかりません。我が社には、陸軍からも出資を得ています。損をするのは陸軍です」

「……そこについては、金以上の事があるのではないかと、なんとなく心当たりはあるだろう。君も、私も」

そう言うとき幸谷は目をそらす。

越谷の言う心当たりとは、陸軍の鉄道不信である。

「立川事故。大戦末期の大事な時に、首都圏の重要な基地を一つ吹き飛ばしたんだ。もつとも、被害の拡大に陸軍の責がないとはいいがたいが、少なくとも、陸軍人や近隣住民に死者が出るほどの大事故を引き起こしたのは我々国鉄だ。帝都テロにおいても、残念ながら一部協力者は国鉄から出ている。陸軍が鉄道に対し異常な反応を見せるのも、仕方のないことだ」

「それにしたって不毛すぎるでしょう。こんな陰湿なやり方」

「陸軍には陸軍のやり方がある、のだと私は思う。元陸軍人の私にはそれ以上は言えない。陸の英雄と言われておきながら、まったく陸の事は分らん。一体どうなっているんだ」

「やはり社長でも本当のところはわかりませんか。では、そのあたりはのちのち詰めましょう。今は現状打開が先です」

幸谷の言葉で越谷の意識は目の前の問題に引き戻される。

中央の黒板には路線と地区名が書かれた地図が貼ってあった。

「実は、美里記者に手伝ってもらいまして旅客動向を調査してました」

幸谷が黒板に路線名を書き出す。

「黒字路線は各普通鉄道線と黒井・灰原線です。そこには軍基地へ向かう北尾羽線もすっかり黒字に含まれていますね。人に鉄道を使うな！　と言っている軍さんが平気な顔して鉄道を利用していると思うと面白いですね」

皮肉たっぷりな幸谷の言葉に、瀬戸が嘖き出した。

「瀬戸さんが笑うなんて珍しい。ああ、失礼。続けます。この北尾羽線も含め、黒字になっている路線には一つの共通項があることが分かりました」

「なんだ？　それは」

「鉄道以外では到達が困難な地域ということですよ」

地図上で黒字路線の沿線を丸で囲っていく。

「どういうことだよ？」

「黒井や灰原といった工場街は、近年治安の心配があり徒歩での移動は余り推奨されていないのと、地区内の道路は軍関係の車両が多かったり走行にいちいち許可が必要だったりで不便なんだそうです。新羽線の新団地の方は言わずもがな、尾羽市街へ出るには鉄道線しか利用できる交通手段がありません」

「北尾羽線は？」

「こちらは基地への通勤がメインの路線ですが、市街地から基地の正門までがかなり遠いらしく、鉄道でなければとても到達できないそうです」

「なるほどな。軍人でも、きちんと理由があれば乗るといふ事か。工業線の理由は？」

「悪水の方は、近年になってできた新しい工業団地なんです。黒井・灰原の工員は環状線の東側に居を構えています。悪水はもともと尾羽駅の西口に仮設の住居を置いていました。工場の本格稼働に伴い西口の仮設が撤去されたので、新団地に皆が越してきたのでしよう。そう言った経緯から、悪水勤務の工員は新団地からそのまま南尾羽で乗り換え、勤務先に向かうことが多いようです」

「それは到達困難であるというよりは惰性で、ということか？」

「それもあるでしょうし、悪水は比較的新しい工業地帯なので従業員
のほとんどが最近尾羽に來た者が多いのもあるでしょう。彼らには
地域のしがらみはあまり関係ありません。悪水は民需系の工業地帯
でもありますから、軍の影響力も小さいでしょう」

「なるほどな。そして、最近尾羽に來た者であればそこまで歩く習慣
もないから、到達困難であるようにも見えるわけか」

完全に理解した、という面持ちで越谷は膝を打った。しかし、そこ
でまた越谷は腕を組んでしまう。

「ここまででは分かった。問題はどうかやって現状を打開するかだ」

「社長の話では、市民自体の感情はそれほど悪くはなさそうです。件
の『お願い』さえ解消されれば利用してくれそうな気配です。軍に
対し、丁寧な安全性を訴えましょうか」

幸谷の意見を越谷は否定した。

「いや、こういうときの陸軍はテコでも動かない。それは私がよく
知っている」

「何故です？」

「私がそうだからだ」

身も蓋もない発言に幸谷はつい呆けたような顔をしてしまうが、目
の前の人物が陸軍の英雄だと思い出して面構えを変えた。

「そうでした。社長は社長でしたね。しかしそうすると、政治的工作
は使えません」

「市民に訴えかける必要があるだろう。『お願い』事態には法的な強
制力がないわけだから、市民だって使えるものなら使いたいと思うは
ずだ」

「それはそうです。いくら歩くのに慣れていと言っても限度がある
でしょう」

「だから、市民に対しての広告はかなり有効であると思うのだよ。向
こうの心理的牙城さえ崩せてしまえば、きつと乗ってくれるはずだ」
「なるほど。根比ベという訳ですね」

「そうだ。彼らが我々の誘惑に負けてこちらを利用するか、それより
も先に我々の資金が尽きるか、のな」

「縁起でもありませんが、その通りでしょう。では、どのように広告しますか」

久留米が手を上げる。

「ここは営業広報部の出番ですね。いろいろと考えてあります」

久留米の発言で、越谷は彼女が戦闘要員ではなく広報の人間であったことを思い出した。

「そうだった。君の本来の仕事はそっちだったな。どんな案だい」

「まずはチラシです。時刻表をチラシとして配るんです。宣伝文句に『冷暖房完備』『高頻度運行』などと入れておけば市民受けはいいでしょう」

「あ、それなら大きさは財布に入る程度にしましょう。財布に入れて持ち歩いてもらえば見る機会も多いでしょう」

「でしたら全線の時刻表じゃないくて、最寄り駅の時刻が分かる時刻表でもいいかもしれません。これならかさばりませんし」

「それ、いいな。すぐにやろう」

「早速検討します」

「あとは、何と云うかこう、鉄道を親しみやすくする工夫なんかをしたらどうでしょう」

次々に意見が出てくる。越谷は満足げに頷いた。

「それもいい考えだ。首都圏でも、国鉄より愛想のいい私鉄の方が人氣が高かった」

「ようがす。運輸部の方でちよつと話してみます。みんな気のいい奴です。これぐらいならすぐにできると思いますよ」

「では、桐谷君。頼むよ」

「任しといてくださいませ」

「しかし社長。本当に市民に働きかけて効果はあるでしょうか」

「お、それはどういう意味だね」

宇佐美の顔を見る。ただの慎重論ではなさそうだ。越谷は目線で先を促す。

「感情論として、誰も乗っていない列車に乗るのはかなり抵抗がありますよ。何と云うか、にぎやかさを演出した方がいいのでは？」

「それは盲点だな。にぎやかさの演出は有効かもしれない」

ガラガラで誰も乗らない電車より、適度に人が乗っている電車の方がこういう状況では乗りやすいかもしれない。なにより「皆やってますよ」に弱い国民性であることは、自らが日本人としてよくわかっていることだ。

「という訳で、全国版の時刻表やなんかに広告を出すのはどうでしょう。発鉄に外部から人を呼びこむんです。外部の人間は現地のしがらみなんて気にせず、鉄道を利用するでしょう。現に、現地とは一切関係のないビジネス客やなんかは利用していると聞きます」

「いい考えだが、陸軍が承服するだろうか……」

幸谷の懸念に対し、宇佐美は笑いながら答えた。

「どーせ陸さんには嫌われていますから、このぐらいじゃ心象は変わらんですよ」

「それもそうか。社長、やりましょう。瀬戸さん、予算は大丈夫そうですか？」

「ええ、なんとか。補助金のおかげでまだ余裕があります。今後収支が回復すれば、多少の赤字で済みますから、財務的にはむしろ好都合です」

「久留米さん、どうでしょう」

「美里記者をたどれば時刻表に安価に広告を打てると思います」

「しかし、そんな程度でわざわざ尾羽にまで来ますかね……」

瀬戸の言葉に、みんな黙りこくってしまった。

「何か、尾羽に来たいと思わせる決め手が必要です。何かありませんか？」

越谷はそう言われて、頭の中を巡らせる。ビジネス……といっても限られている。その他の用としてもこれと言った名所は思いつかない。温泉は観光地と言うより軍の保養地（候補）であるし、神社も線路が境内の中まで引かれているだけであって特に首都圏から見行くようなものでもない。

そこまで考えたときに、越谷はふとあることを思い出した。

「そういえば、私が尾羽に来た時、とんでもない数の『鉄つちゃん』が

いたな。あれは何か使えんのか」

「ああ、前までは時たまいました。ここは古い車両が多かったり、車輛の製造工場があったりでてっちゃんたちの観光ポイントらしいですわ」

「それ使えないか？」

「別に彼らは通年で尾羽に来てくれるわけじゃありませんし、時たまフラツと表れて写真を撮っては帰っていただくだけですや。何かをなしてくれるわけじゃありません」

幸谷は冷ややかだった。

「いや、それで十分だ。にぎやかしになればそれでいい。なんとかして、そういった趣向者を呼び寄せられないか」

「なら、特別列車でも仕立てますか。余っている車両を使って何か企画でもしましょうや」

「企画、とは？」

「まあ適当に余っている車両か何かを装飾して走らせればてっちゃんも喜ぶでしょう」

「装飾というと……」

「例えば、色を人気のある色に塗り替えたり、ヘッドマークを付けたりだ。武蔵野鉄道では、ボロ電の急行にヘッドマークを付けて運転したらそれだけでよく人が乗ったし、よく撮られたもんだ」

「効果がありそうだとは思えんが、まあいいか。それぐらいならいいだろう」

「しかし、これだけやってもまだ課題は山積みですよ。そもそも、治安の悪いこの地域に来てくれるのか、という問題が付きまっています」

宇佐美の言葉の裏には、先日の武器密輸事件がある。そうでなくとも年がら年中どこかで撃ち合いが起こっているような街である。もともとの街のイメージもあいまって治安について余りいい印象は持たれていない。

「北九州や九龍クイロンとどっちがマシか、なんて言われ方をする尾羽ですよ。実際には尾羽で起こる治安的不安はほとんどが組織的なもので一般犯罪はほとんど起こらないので比べるべくもありませんが、しかし一

般にそう言った印象を持たれているのは事実です」

「どうだい久留米君。治安的不安の解決の見込み、差し当たっては先の脱線事件についての解決の見通しは立っているのか？」

越谷にそう言われた久留米はただ首を振った。

「ダメです。あれからも度々、小荷物輸送を利用した密輸が発生しています。全て水際で食い止めている、と言いたいところですが真相は分かりません。それに、新たな手口で輸送される可能性も依然高く、やはり大本を叩かないと……。現状、しつぽすらつかめていない状況です」

「やはりそうか。こればかりは我々ではどうにもならんからなあ」

越谷は、先の見えない問題だと思った。いくら思考を重ねたところで、手詰まり感がぬぐえないままであった。

しかし、そんな中で越谷には、暗闇の中にクモの糸が一本垂れてきている、そんな感覚が確かにあった。

「これが勘違いとは言わせないぞ」

越谷は固くこぶしを握り締めた。

14. く第一仕業く1レ：栄光の陰に

「いったいどうしろというのだ！」

東京・丸の内、国鉄新庁舎ビル。その最上階に近い会議室で、特命人事委員長に任命されたばかりの蒲生将司がもうしようじはペンを机にたたきつけた。

「自業自得じゃないですか」

「わかっている！ だから腹立たしいんだ！」

彼の苦悩とそれに伴う激怒の訳は、3月22日にさかのぼる。

東京駅に万歳三唱と歓声が響き渡る。7年ぶりに東京駅に列車がやってくるのだ。

身体を芯から震わせるような警笛の音が聞こえてくる。その音は有楽町の方からやってきて、少しづつ少しづつ近づいてくる。

列車は新大阪発東京行こだま114号。あの凄惨な帝都テロの日、小田原駅で来るはずのない出発合図をずっと待ち続けた列車である。

その列車が、7年と約470分遅れで終着駅に到着するのだ。

21番ホームの奥に鋭い光が見える。その二つの眼はだんだんと近づいていき、ついにその精緻で優美な姿をスポットライトの下に映し出した。

0系新幹線。その丸く突き出したノーズが空を切り、青いラインを光らせながら堂々と入線する。ブローアー音が響き渡りながらも静かにゆつくりと、停車位置まで身体を滑り込ませ、ついにその巨体は静止した。

車体上部のドア灯が点灯、ドアが開く。歓声を上げながら乗客が降りてくる。

万雷の拍手と歓喜の声を聞きながら、当時こだま114号の車掌長であった男はこうアナウンスした。

「毎度ごと乗車ありがとうございしました。終点、東京です。途中、7年と470分もの遅れが発生いたしましたことを、詫わびいたします。どうか皆さま、お気をつけて」

3月22日、0時0分。新生東京駅の各番線から一斉に警笛が鳴り響いた。その音は有楽町を優に飛び越え、遠く汐留まで響いたという。この音を最後に、汐留は旅客駅としての役目を、再度終えることとなった。

列車が動き出す。あの日のあの時、東京駅在来線ホームには5本の列車が存在した。

そのうちの 하나가、動くホテルとも言われたあさかぜ、その中でも名士列車と言われたあさかぜ号である。

一人の婦人が涙を流しながら列車に手を振った。その視線の先には臨時あさかぜ91号がある。

帝都テロに巻き込まれ、灰塵と帰した「あさかぜ号」のひとつである。

このご婦人の主人は、あさかぜ号に乗って遠い東京で出産に臨む彼女を見舞いに来たところで、テロに巻き込まれた。

帰りは、このあさかぜ号に乗車する予定だったという。

婦人の隣には、すっかり大きくなった息子の俊樹君（7）が、亡くなった主人の遺影を持ちながら列車を見送っていた……。

あさかぜ号だけではない。中央線電1124H列車、横須賀線電1020S列車、東海道本線855M列車、同3233列車、同電8711M列車、山手線、京浜東北線……。

あの日、東京駅を発車できなかった列車、東京駅にたどり着けなかった列車。それぞれが、一斉に動き出した。

割れんばかりの喝采。煌びやかに光るフラッシュ。悲喜交々の歓声。それらすべてを包み込むように、太い警笛が鳴る。

「とうきょうよう、とうきょうよう。終点でございます」

深夜であることが信じられないような熱狂の中で、人々はここにテロの終結を感じ、そして新たな復興の段階へ進んだことを実感したのだった。

ここまでではいい話である。問題は、この出発式に出席した来賓であ

る。

このテロからの復興のその最たる象徴である東京駅の再開業式である。各界から早々たる面子がそろった。

しかし、そこに二人の姿はなかった。二人とは、十合特別復興総局長と、越谷卓志西東京鉄道管理局長（当時）のことである。

特別復興総局とは、壊滅した首都圏の鉄道を再生するために設置された部署である。当時の国鉄における最重要部署である。そのことは新幹線総局などの「総局」の更に上である「特別総局」とされたことからも明らかである。

その中で、総局長である十合氏の活躍は絶大だった。その確かな信頼と実績、そして「国鉄大家族の家長」とまで称されたカリスマ性はこの窮状であつてもいかなく発揮された。

片や、越谷卓志は八王子指揮所の活躍やその後の復興輸送における西東京鉄道管理局長としての活躍が大いに評価されていた。

当然市民はこの二人が式典に呼ばれているものだと思っていた。いや、呼ばれているものだと思ひ込んでいたために、呼ばれていないことに誰も気が付かなかったのである。

それに気が付いてしまったのは、熱狂から一日たったあるテレビのニュース番組であつた。

映像をいくら確認しても両名の姿が見えない。国鉄に確認を取ると「両名は出席していない」との返答。これが報じられた直後から、風向きが少しおかしな方向へ変わり始めた。

「大オヤジと英雄をのけ者にするとはいい度胸だ」

翌週の世論調査では「両名が式典に出席できなかったことに関して「理解できる」23% 「理解できない」36% 「どちらでもない」41%」という結果。こうなるほどには、市民はそこそこの問題に対し興味を持っていた。

また、国鉄現場は荒れに荒れていた。労使問題を「親子不和に終止符を打つ」とばかりに解決した親父十合、現場出身でスターダムを駆

け上がった英雄越谷。この二人を排除することすなわち、現場への抑圧であると捉えた国鉄現場職員は少なくなかった。

早速、四国鉄道管理局や八王子管理所、中央線沿線の駅などから連名で事情の説明や事態の打開を求める上申書が提出された。

更に、各鉄道管理局や現場なども同調の姿勢を見せ、北海道などでは当局を非難する集会が行われたこともあった。

これ以上の騒動の拡大を恐れた国鉄は、その元凶たる蒲生を緊急的に更迭し、事態の收拾を図りながら対策にあたらせることにしたのである。

ここは特命人事委員会。ただの人事局ではない。この問題を解決するだけの特別な人事委員会、つまりは窓際部署であった。

「まあ、元はと言えば蒲生さんが問題起こして、そのしりぬぐいを十合さんと越谷さんにさせたのが悪いんじゃないですか。十合さんは責任取って辞めちゃうし、越谷さんは樺太に居て式典参加できないし」「仕方がないじゃないか！ 私だってあんなことになるとは思わなかったんだ」

彼、蒲生がしたこと。それは、北部樺太開発鉄道の新社長に、つい先日逮捕された「喜多川康志」を強く推したことである。

喜多川康志の逮捕で国鉄は混乱。事態收拾の為に上司である十合は責任を取り総局長を辞任。越谷は新社長に抜擢され樺太へ。ダイヤ改正の日までに、二人は国鉄を去っていたのである。

国鉄を不名誉辞職した者、そして新たな任務の為に樺太へと赴いた者。どちらも東京の式典には出られまい。なぜそんなことになったのだと問われても、何かの因果で、以上の答えは見つけられない。蒲生は歯を食いしばりながら唸ることしかできない。

「最初からまともな者を樺太に送っていけば、と私でも思うよ。しかし、まともな人間が樺太なんかに行きたがるか？」

喜多川康志は「まとも」ではなかった。少なくともテロ後、急にまともではなくなったうちの一人だった。

「樺太行きを飲んでくれるような人材は貴重なんだ。一時は北樺太出向が人権侵害だと騒がれたことだってあったんだぞ？」

「最近は人気らしいじゃないですか」

「そうじゃない。まともなポストにある人間にとって、だ。いいか、あそこまでの地位に居ながら簡単に北樺太行きを決断できる人間なんて、まともじゃない人間以外にはこの世に英雄越谷しか居ないんだよ！」

蒲生は頭を抱えて座り込む。何もできない、無為な時間が蒲生をたまらなく焦らせた。

ここはいわゆる窓際だ。しかし、蒲生にとっては完全な窓際とは言えない状況なのだ。なぜなら、ここはかろうじて本庁にあるからだ。

国鉄はこの件を憂慮している。全体では国民の36%がこの件に不満を持っている。この話題に興味を持っている者だけで集計すれば過半数がこの件に不満を持っていると言える。

国鉄批判に花が咲かないうちに、この問題を可及的速やかに解決したいと、国鉄は考えている。

つまり、ここで結果を出せば出世コースへの復帰はあり得るし、ここでしくじれば“本物の”窓際への移動もあり得るのである。

「鉱業課は嫌だ……鉱業課は嫌だ……」

「鉱業課の人に失礼じゃないですかね」

まるで鉱業課が島流し先とでも言わんばかりの蒲生に、部下である篠井が水を注す。

「今、鉱業課に配属になれば、このまま直接樺太行きだぞ！ 樺太行きなんて認められるか！ クソツタレ！」

肩をいからせながら蒲生は叫ぶ。篠井はそれを冷めた目で見つめていた。

「どうやったら二人を取り戻せる……。せめて、越谷だけでも……」

「あきらめましょうよ。一度放してしまった鳥が、二度と帰ってくると思いますか？」

「訓練すれば帰ってくるだろう」

「帰ってこないから数日に一回は『飼い鳥を探しています』っていう張り紙を見るんですよ」

「ええい！ うるさい！ とにかくだ！ どんな手を使ってでも取り

返さねばならんだ！ ……ツハ！ そうだ！ いいことをひらめいたぞ」

「なんです？」

「発鉄が無くなれば越谷は帰ってくる。そうだ。どうにかして発鉄を潰せばいいんだ」

予想通りロクでもないことを考え始めた蒲生を、篠井は形式的に止める。

「それ、国鉄の体裁は大丈夫なんですか？ それに、同じ引き戻すでも、発鉄を成功させて栄転という形で戻した方が恰好が付くと思いますけれど」

「物事と言うのは、何かを成すより何かを壊す方が楽で速いのだよ。考えてもみたまえ。発鉄の成功なんて待っていたら何年かかるかわからないが、発鉄潰しなら少なくとも一年以内にはなんとかなる。長期戦にはならない。それに遠い樺太で起きたことなんて、国民は誰も気にしないだろうしな！」

「体裁は？ 発鉄は一応国防名目の組織ですよ」

「それはこの間外事局の連中からいい話を聞いたんだ。どうも、外務省は発鉄をあまり良く思っていないらしい。それに、陸軍の一部も発鉄を潰したがっているらしい」

「まだ開業から間もないのに」

「なに、開業直後の路線が廃止になるなんてよくある話じゃないか。日本最短記録は、開業前に廃止になった案件だぞ」

「あれはテロ絡みの部品供出の為でしょう……」

篠井はあきれ果ててもものも言えない、といった面持ちで蒲生を見つめた。

「よし、これから我が委員会は全力を挙げて発鉄を潰すぞ！ いいな！」

「勝手にしてください」

篠井は蒲生に取り合わず、静かに部屋を出た。

その後ろで、蒲生が喚き散らしているのだけが聞こえた。

ジリリン。机の上の黒電話が鳴った。他の者を手で制して幸谷は受話器を取る。

「はい。発鉄統合本部ですが」

『ああ、もしもし。幸谷か？』

「……いや待て。その喋り方は篠井だな？」

『よくわかったな』

笑い混じりにそういう相手に、幸谷は呆れ半分でこう返す。

「電話口でいきなり『幸谷か？』なんてつつけんどんに行ってくる奴はお前さんしかおらんよ。なんだい、樺太で一人寂しく働いている俺に、何か用かい」

『君と俺の仲じゃないか。迷惑だったら掛けなおすよ』

「いや、構わん。ちようど煮詰まっていた所だ」

幸谷はペンを置き、あくびをしながら答えた。

『何があった』

「ちよつと利用状況が芳しくなくなつてね。将来の見通しが立たん」

『意外だな。いくら私鉄と言つたつて、国や庁や市、軍から金が出るだろう。それに、国鉄じゃないから簡単に銀行から金も引つ張つてこれる状況で、窮することがあるのか』

「私鉄じゃなくて三セクだ。そう簡単にはいかないさ。収支の赤が一定を越えれば廃止議論が起ころし、一定以内の赤に収めたところで尾羽の財政に不安が起きれば補助金打ち切り議論、その先は存廃議論、そして廃止さ」

口に出してみても背筋が冷える思いがする。つい昨日、発鉄の利用状況について尾羽市議会で質問が飛んだばかりだ。尾羽市の放漫財政は未だ留まるところを知らないし、決して想定できない未来ではないことが幸谷には恐ろしかった。

『どうするのや』

「会議ではとにかく尾羽への観光客を増やすという方向性で決まった。何かいい案はないかい？」

『なるほどね。それならいい話がある』

「いい話？」

『国鉄いい旅1970、さ』

「……なんだそれは」

幸谷はとっさにペンを取り、素早くその耳慣れない言葉を書きとつた。

『国鉄復興計画の最終段階さ。観光復興を目指して、各都市圏から各地への直通列車を増発したり、日本全国使い放題の周遊券を発行したりするんだ』

「へえ。でもあいにく、尾羽には国鉄は届いていないんだ」

国鉄最北端は農線来である。そこから先は北樺太鉄道で最速一時間半、長ければ4時間の道のりだ。

『ところがどっこい。実は国鉄いい旅1970周遊券、一部私鉄でも使えるんだな』

「……なんだって？」

幸谷のペンが止まる。あまりの衝撃に受話器を取り落としそうになる。

『驚いただろう。今回は有田鉄道や島原鉄道、武蔵野鉄道や筑波鉄道、長野電鉄や定山溪鉄道、南樺太鉄道……挙げればきりがなが、とにかく国鉄と直通のある私鉄では利用可能なんだ』

「それは北樺太鉄道もか？」

『もちろんだ。それに、今から営業部に電話すれば発鉄でも使用可能になるんじゃないか？』

「そ、それは本当か？」

『営業部の辛島が、昨日も穂宜肥^{ホギヒ}鉄道から電話が来て調整を始めたつて言っていたし、なんとかなるんじゃないか』

これは僥倖だ。幸谷はペンを走らせながら小躍りしたい気分になれる。踊れない代わりに文字が踊りだし、とても本人にしか解読できない線の集合体がメモの上に紡がれていく。

『どうだ、役に立ったか?』

「ああ、最高だ! すまないな。今度おごらせてくれ」

『なに、君と俺の仲じゃないか』

幸谷は目頭がツンとするのを感じた。東京時代、この篠井と共にどれだけ苦難を乗り越えて来たか。日々が走馬灯のようによみがえる。

『そうそう、ついでにもう一つだけ、伝えておきたいことがある』
「なんだ?」

『お前さん、蒲生って覚えてるか?』

蒲生、がもう……。幸谷が頭の中の人物録のページをめくっていると、特別復興総局の欄に名前があったのを思い出した。

「ああ、俺の上司だった男じゃないか。なんとなく覚えているぞ」

『アイツ、ついに左遷されたよ』

「へっ! アレは俺をここまで飛ばしてきた挙句、喜多川康志まで超越してきやがった奴なんだ。当然の報いさ。しかし、それがどうかしたのか?」

『悪いことに、左遷先が越谷氏をなんとか国鉄に引き戻すための部署なんだ。蒲生の奴、発鉄を潰すことで越谷氏を東京に戻すことを画策している』

「……あの野郎、やつぱりロクなもんじゃねえ」

幸谷は怒りでペンを折りそうだった。脳裏に、あのへらへらとした笑みと不真面目な態度が浮かぶ。

『いいか、そこでお前に相談なんだ。国鉄は結局越谷氏を引き戻さないとまずいんだ。だが、蒲生の作戦でそれを成すのはいやだ。だから逆に、越谷氏を活躍させることで、栄転と言う形で東京に戻せないか考えている』

「なるほど。……さっきの話をうまく使えっか」

『そうだ。こちらでもできうる限りの支援はする。だからなんとかか、彼を英雄に祭り上げて欲しい。そうすれば、お前がなんとか東京に戻る道筋も整えてやれるかもしれん』

「気乗りはしないが、そういう事なら協力する。というより、協力をお願いしたい、だな」

『水くせえ！』

「君と「俺」の仲、だからな」

電話口で二人して大笑いした。身体がブルリと震えるのを感じた。『しかし、気を付けておくれよ。どうも、発鉄への逆風へは外務省や陸軍が噛んで良そうなんだ』

「……外務省が？」

陸軍は目下格闘中なのでわかっていたことだが、外務省とは物騒な名前である。ぎよつとして幸谷は聞き返した。

『ああそうだ。蒲生はそう言っていた。気を付けてくれ』

「わかった。ありがとう」

『樺太は俺の故郷なんだ。頼むぞ』

幸谷は受話器を置いた。そして一抹の不安は感じながらも、目の前に転がってきた機会を逃してなるものかと、幸谷はさっそく久留米のところへと走るのだった。

「うまくやってくれよ、幸谷」

東京駅前の広場で、英国積みレンガの壁によりかかりながら篠井は煙草に火をつけた。

「私はどうだっていいんだ。どうなったっていいんだ。だから……」

その続きは、にわかには降り出した雨にかきけされた。夏の匂いを運んできた曇天に向かって、篠井は何事かを言っ、そのままどこかへと消えていった。

15. く第一仕業く1レ：前途には

会議室はまさに風雲急を告げられていた。

「国鉄いい旅1970」への参加が具体的な段階に進んだのだ。調整と変更が絶え間なく決定され、会議室の電話がやむことなくなり続ける。

騒々しい状況で、桐谷はつぶやいた。

「流石にそう二つ返事でいいですよ、とはならんよなあ」

幸谷の情報網により知ることとなった「国鉄いい旅」計画であるが、発鉄からの公的な問い合わせへの国鉄の態度は硬かった。

「どうも、樺太方面への無秩序な適用線区拡大に、運輸大臣が待ったをかけたようだ」

「結局国鉄は運輸省の外局でしかありませんや。国鉄長官も、次のポストが惜しくてはどうもならんでしよう」

目の前にある国鉄からの通知書。そこには以下の通りの旨が記載されていた。

国鉄は北部樺太開発鉄道に対し、国鉄いい旅計画への参加を認めるものとする。しかしながら、参加申し込み期限を大幅に過ぎたる上に、当該地の情勢不安なるものと認められることから、以下の条件を申し付ける。

- 1) 治安上の不安を払しょくすること
- 2) 鉄道を多客に耐えうるものとする
- 3) 鉄道として魅力のあるものとする
- 4) 以上の条件が達成されたとしても、印刷期日の関係上からパンフレットその他による誘導は確約できないということを了承すること

「なかなか困難で、なかなか実りの少ないものになりましたな」

幸谷の話では、国鉄いい旅計画への参加に伴って、様々な便宜が国鉄から図られるはずだった。そしてそれは、国鉄の全国津々浦々鉄道計画に則って、復興予算を用いて行われるはずだった。

この計画は、いわば帝都復興に協力してくれた地方へのお礼であ

る。もつとも、そこに鉄道利用の増進や議員の地方票の確保などと言うウラ事情が見え隠れするわけではあるが、建前上は車両を供出させられた地方鉄道や線路を供出させられた内子線などへの、協力してくれた地方線への感謝というものが前提であった。

そして、これは観光復興、つまり観光を担う鉄道としての役割の復興もにらんでいる。魅力的な鉄道を使って魅力的な観光地へ行く。

ただ輸送に徹する鉄道、からの脱却。すなわち多角的に必要なとされる鉄道を目指した、国鉄の賭けであった。

「もともとは樺太の鉄道は範囲外にする予定だったんだが、後者の理由により樺太にも適用することが決まったらしい。しかし、本音を言えば国鉄はあまり発鉄に協力したくないらしい。なんでも『地方線のお世話はもうこりこり』だそうだ」

越谷に取り次いだのは国鉄本庁の若い担当だった。ちよつときつめの物言いをしただけで本音をぼろぼろ漏らしてくれたものだから、越谷はそれ以上問い詰めることができなかったようだ。

「どうなんです？ 英雄越谷の権威を使ってねじ込めないんですか」
「今の鉄道長官は十合派の後藤さんだし、運輸大臣は立憲党の中でもかなり親国鉄派の吉田さんだ。出来なくはないだろう。だが、そうやってツテをたどってねじ込んだものがない方向へ転がったためがないと、十合長官が言っていた。やめておこう」

できなくはない。その一言が幸谷をムツとさせたが、幸谷は涼しい顔をして会議を前に進める。

「とりあえず、(1)に関しては治安当局や軍当局のお仕事ですからいいとして、その他ですね。(2)はどうでしょう。多客に耐えうるようにする、とあります」

「その件についてだが、私はこれを機にやはり増発したい、と思う」

この発言には、役員全員びつくりした。てつきり、利用状況の不振を見て、話が流れたと思っていたからだ。

今まで割と越谷寄りの立場であった桐谷でさえ眉をひそめた。

「社長、あのですね……」

呆れたように声を出す幸谷を手で制して、越谷は続ける。

「利用率不振で、増発。矛盾しているように聞こえるのはわかる。ただし、これは決して矛盾はしていないのだよ」

「増発により、今まで以上に待たずに電車に乗ることができると。つまり、利便性が向上する。そういうわけですか？」

幸谷がすらすらと越谷の言おうとしていたことを言い当てる。

だが、そこには重要な点が抜け落ちていた。

「そうだ。それを、既存列車の輸送力を減じた上で行う」

桐谷は目を見開いた。列車を削減せずに連結する車両数を減らすという考えはこの男の中にはなかったからだ。

「イチ列車から減じた分の車両、つまり6両編成であればこれを4両又は2両編成に減じ、余った2両ないし4両、を増発分に回す。すると、輸送力は変わらずに列車本数は二倍になる。現在、最頻区間では10分に一本列車が来るから、それが倍になれば5分に一本だ。5分間隔。関東人の間隔としても便利であると言えるんじゃないか？」

そして、全国の「市電」における平均的な待ち時間でもある、と越谷は付け加えた。しかし、これには決定的な難点がある。

それを幸谷は見逃さなかった。

「社長、騙されませんよ。それを達成するには先頭車が足りない。先頭車がなければ列車は動きません」

いくらエリート組だって、クハとモハぐらい知っているんです、と幸谷は付け加えた。

通常、電車は両端の運転台を持つ先頭車（制御車）と動力車によって構成される。例えば、以下の通りの編成があったとする。

・制御車（クモハ）＋動力車（モハ）＋動力車（モハ）＋制御車（クモハ）

この場合、制御車＋制御車、動力車＋動力車の組み分けを産むことになるが、これでは制御車＋制御車の組み合わせはまだしも、動力車＋動力車の組み合わせは運転を行う事が出来ない。

それについて越谷は対策を持っていた。

「それについては手がある。例えば、環状線の列車は一方向にしか向かないのだから、最後尾に制^ク御車^ハは不要だ。また、車庫で事故や雪の

時まで暇を持って余している機関車や牽引車、それに予備の制御車を活用すればそう難しいことではあるまい。なあ、桐谷君？」

越谷の提案は、つまりこうである。

環状線で運行する場合、終端駅で折り返す、と言うことがないので、先頭のみ制御車があればよい。よって、制御車の数は二分の一でよい。

さらに、動力車＋動力車の組み合わせの両端に、除雪用に調達した機関車などを組み込めば、同じように問題が解決するというのである。

「しかし、そんな無茶苦茶なやり口でなんとかありませんか？」

なおも食い下がる幸谷に、越谷は一言、つぶやいた。

「ユーファーズ、だよ」

「は？」

「有法子、だ。満州でよく聞かされた言葉だよ。漢語で『やってやれないことはない』という意味らしい」

なぜ今、華国の言葉を。皆が一樣に頭にハテナを並べたところで、越谷は雄弁に語る。

「これは、かの有名な国鉄の雷帝、十合元局長の言葉だ。局長は新幹線建設のずっと前、満州の時代からこの言葉とともにあったわけだが、結果として不可能と思われるいた新幹線建設を、この言葉とともに成し遂げている。幸谷君、君もこの言葉を知らない訳ではあるまい？」

幸谷の記憶の中で、あのおっかないオヤジさんの顔が浮き出ている。そういえば事あるごとに、まるでくしゃみのように何かを叫んでいた気がした。

「あれ、ユーファーズって言っていたんですか」

冷めた目線を送る幸谷だが、それに反比例するように越谷は熱弁をふるいだす。

「そうだ。あれは元長官が満鉄幹部だった時代に民国の有力者から教わった言葉だそうだ。もともとは没法子メイファーズと対になる言葉で、没法子の方は『仕方なし、やる方なし』という意味だそうだ。

そして、華国ではずっと、没法子の方が多く使われ、それではいけ

ない、有法子の精神でなければならぬ、とその有力者は民国人を奮い立たせて回ったそうさ。

さて、見てみたまえ。今民国は急発展を遂げている。まだまだ我が国に遠く及ばずとも、我こそがアジアの屋台骨たらんと死力を尽くして、今や民共国境線を単独で維持できるだけの国力が育つてきている。我が国からの支援が必要無くなる日も近い。これは、彼の国が有法子ユイファーズの精神を取り返したからだ。そして、取り返したその精神で邁進してきたからに他ならない。

では、日本ではどうか？

十合長官は不可能と言われていた弾丸列車計画を大成させた。30年はかかると言われた帝都復興を、たった7年で成し遂げた。当然、苦勞はひとしおだ。陸軍との折衝、土地のやりとり、事故、事件、様々だ。だが、その度に十合長官は有法子ユイファーズと一声発して、前へ前へ進んできた。

さあ諸君、まさか我々にこれができないとは言えない。新幹線開通も、東京五輪も、帝都復興も、全てを成し遂げた我らが日本人に、何もできないというのかね？

それは有法子ユイファーズが足りない。この精神があれば、君たちも必ず目的を成せるはずであるから、決して仕方なしと、没法子とは言ってはならないのである。

さあ、有法子の言葉と共に、進もうじゃないか！

越谷が言い終わると、桐谷が感極まっていた。桐谷は越谷の手をはつしと握る。

「そうです、その通りです社長！ やってやりましょうや、こんなもん。今すぐ持ち帰って検討させます。まあ、大方うまくいくでしょうし、うまくいかなきゃ車庫で寝てる廃車予定車でも叩き起こしてなんとかさせませう！ 鉄道としての魅力、の件は、こちらの特別列車構想で何とかして見せましょう。有法子、いやあいい言葉です。やってやれないことは、無い！」

目を潤ませながら首をぶんぶん振る桐谷を、幸谷はまるで馬鹿を見る目で見つめている。

「我々の行く先は確かに苦しい。だが、ここで諦めては長官に合わせる顔がない。きつと、策はあるからそのつもりでやろう」

思い出すは暗中模索の新幹線計画期、そして絶望の復興期。天から降り注いだ雷「有法子！」を胸に、やるしかないんだ。

越谷の胸中は穏やかじゃない。暗闇に出口の光を見つけたと思つたら、それがトンネル灯であったかのようながっかり感に襲われていた。

だけれども、この線路の向こうには必ず出口がある。越谷は信じるしかなかった。

悪いことは、続くものである。

尾羽駅の西にある、治安の悪い地域の粗悪な建屋に、三田はあられもない姿で寝かされていた。

「分かっているだろうな」

男がそう言うと、三田はびくりと身体を震わせた。

隙間風が吹きすさぶ暗闇の中で、三田は薄いボロ毛布一枚を身体にまといながら鼻をすすらせている。

何も答えない三田に業を煮やした男が、三田の髪の毛をひつつかむ。

「きちんと情報は伝えたはずじゃ」

「それじゃ足りなくなつたんだ」

「そんな……」

三田は涙を流しながらひたすら目をつぶっていた。男はその瞼を無理やりこじ開けるかのように顔面を揺さぶってくる。

「いいか、今度はお前がやるんだ」

三田は、か細い声で了承を伝える以外に何もできなかつた。

それを認めた男は、暗闇の中で笑い始めた。

「これで、これでいいんだ。まったく、冷や冷やさせる」

三田は笑い声から逃げるように耳と目を塞ぐ。きつとひとしきり笑い終わったらまた自分を求めてくるに違いない。今度は朝まで続くだろうか。

絶望の淵で、声にならない声で三田はつぶやいた。

「たすけて、おおみやくん」

その声が、絶対に届くはずがないと知りながら。

16. く第一仕業く1レ：尾羽とは

「首尾はどうかね。久留米君」

越谷は社長席から暗闇に向かって話しかけた。

「芳しくありません」

物陰からにわかにな久留米が現れた。越谷はさして驚くそぶりも見せず、話をつづけた。

「とりあえず説明を聞きたい」

「了解しました。では」

久留米は隣の席、つまりいつもは幸谷の席であるところに腰掛け
た。

「先日の脱線事件以来、敵は目に見える動きをしていません。です
で、しつぽさえもつかめていない状況です」

「にらみ合いということか」

「ええ。しかし、長期戦にはならないでしょう」

まるで矛盾した結論を告げられ、越谷は少し混乱する。

「なぜだい？」

「尾羽において、敵が最も活動しやすい時期は冬だからです」

「冬が？」

越谷は少し意味が分からない。そんな越谷にな久留米が丁寧に説明
してくれた。

「冬の尾羽は雪に包まれます。一部業種などは冬季の操業が困難で、
冬季は営業を取りやめる工場、倉庫などが存在します。すると、その
空き倉庫・空き工場はいいアジトにできます」

「……そうか、倉庫が話題に上ることが多いのは、そう言う訳か。で
は、夏になると？」

「ダメー企業でも用意していない限り、発見されて追い出されるで
しょうね。ダメー企業を用意していたとしても、樺太の同業なんてほ
とんどが顔見知りですから、不審がられて通報されるのがオチでしょ
う」

「なるほど。冬が主たる活動時期とは、ソ連人らしいな」

まるで冬將軍だ、と越谷はつぶやいた。

「しかし、なぜ奴らは尾羽を根城にするんだ？ 別に北海道でもいいだろうに」

「理由はいろいろあります。例えば、流水伝いに歩いてこれる中で最も警戒の薄い場所である、というのも一つです。しかし、理由はそれだけではありません」

「なんだね？」

「……社長。そこに防災ロッカーがありますよね。開けてみてくださいいい」

防災用具入れ。越谷には耳なじみのない言葉である。東京ではこんなものは見たことがなかった。

形状は、普通の、仕事場によくあるような細長いロッカーだ。暗証番号式のように、番号は0000のままだ。

ノブに手をかける。力を籠めると、暗証番号は設定されてないようですぐに開くようだった。

「おっと、その前に。何が入っていると思います？」

久留米がロッカーのノブにかけた越谷の手をそつと握り、挑戦的な笑みを浮かべる。

そう言われても……。越谷は困惑する。

「防災……？ 除雪器具でも入っているのかね」

防災、つまり災害を防ぐ、災害時に損害をより軽微にする。

では、尾羽における災害とは？ こんな辺境の地で地震は起きないだろうから、地理的要因を加味したうえで「雪害」と捉えるのが妥当であろう。

であれば、除雪用の排雪具など。その他で事故や火災対応に向けての消火器や担架が入っていいようなものだが、そこまで大きなものは入っていいそうにない。せいぜい入っていて簡易担架や救急箱だろう。と、越谷は論理的に考えるわけである。

そんな越谷を、久留米は目線で笑う。

「さあ、どうぞでしょう。どうぞぞ」

目線で促されてロッカーを開ける。瞬間、越谷は腰を抜かしそうに

なった。

「なんだこれは！」

ロツカーから転がり出てきたのは、無骨に黒光りする黒鉄の得物。越谷にとつては、ある意味で見慣れていて、ある意味では見慣れていないものだった。

「しよ、小銃じゃないか！ それに弾薬まで！」

小銃。紛れもなく軍用の、低コストに敵を薙ぎ払うことに特化された銃である。

越谷は小銃を持ち上げる。現役の時とはまるで構成が変わっているが、それでもわかるものはわかる。これはセミオートの小銃で、近代的で凶悪なものだ。越谷は身震いを覚える。

「昭和38サンパチ式小銃、戦闘服、鉄帽テツパチ、救急箱。おおよそ戦闘に必要なものは全て用意されています」

「サンパチ？ サンパチだつて？ 嘘つけ、こんな近代的で、しかもセミオートなものがサンパチであつてたまるか！」

こんなサンパチがあれば民国戦線で苦勞することはなかった……。いやいやそうじゃない。なぜこんな火力の高そうな銃がここにあるのか。

「ああいえ、明治三八式歩兵銃ではなく、これは昭和38式小銃です。正式名称は清洲工業M38カービン……。正式愛称は清洲カービンです。樺太庁警察制式小銃です」

「庁警制式だつて？ なんでこんなものが鉄道会社にあるんだ！」

ちがう、だからそんなことを聞きたいんじゃない。これが明治三八年式か、昭和38年式かは関係ない。なぜここに、この場所にこれがあるか、が最大の問題だ。

「鉄道会社だけじゃありません。樺太、特にこの尾羽にはこの防災ロツカーがいたるところにあります」

あつてたまるか。喉奥からはじけ出そうな悲鳴のような叫びを必死で食い止める。

「法的根拠は？」

喉から変な音を出しながら、かろうじて絞り出した。つつけんどん

な言い方に聞こえるそれは、越谷の混乱の表れだ。

それに対し、久留米はまるで当然のことを当たり前前に話すように、淡々としている。

「一応、猟銃名目での配備です。まあ、樺太に熊は出ませんが」

「熊狩りに小銃はいらんだらう！　なぜそこまでして配備しているんだ？」

「自己防衛ですよ。有事の際、どれだけ強大な敵が攻めてくるかわからない。しかし、敵がどれほど精強であろうとも、市街戦においては市民の方に分があります」

「……市民も戦わせるのか」

「樺太では、それが市民の権利なんです。社長だつてご存知でしょう。敵は市民だとか戦闘員だとか関係なく、まるで地を均すかのように殺戮を行う。であれば、たとえ大義名分を敵に渡してでも一矢報い防衛への希望をつなぎたい。尾羽はそう言う街です」

市民が武装している。それは、敵が市民を滅ぼしつくすことへの口実になる。

国際的な慣習では、市民は攻撃の対象としてはいけない。だから、市民も攻撃に参加してはならない。万が一、市民が攻撃に参加すれば、その瞬間から市民は軍人とみなされ攻撃の対象となる……。

このタテマエは我が国も使用したし、利用されもした。徴兵制への慎重論が時たま噴出するのはこのあたりを理由とすることも多いし、軍が戦時においても市民に対して自発的な行動を避けるように呼び掛けるのも、敵に市民攻撃の口実を作らせないためである。

だが、樺太人は知っている。今や敵はそんなことを気にしないと。世界が二極化した今、正義なんてものは机上の空論に過ぎない。

バランス・オブ・パワーは、三勢力による「すくみ」の存在があったからこそ可能であったのである。今この世界には明確な敵か味方か、それしか存在しない。

正義をジャツジし、なおかつ第三者の立場から悪を罰するような勢力は、既に存在しないのである。

「なんとなく言いたいことはわかるよ。これは東京人には絶対に理解

できない心情だと思う。どちらかというところ、米国人なんかの方が理解してくれそうだね」

「まさしく、米国民の理論です。残念なことに、樺太人の危機感の前に、日本的な性善説は意味をなさないのでしよう」

「当然。性善説はドメスティックだからこそ成り立つのだ」

突然越谷から横文字が飛び出してきたので、久留米は目を丸くした。

「なに、私だって英語ぐらい話せるさ。そのほかにも、中国語や独逸語だって話せるんだぞ」

「失礼、意外でした」

久留米がそう言うと、越谷は破顔した。率直な物言いがあまりにも可笑しかったのだ。

「まあ、今の立場にあつては特に意味はないさ。とにかく現状は把握した。つまり、日常的に銃器が転がっているから、工作員が兵器を忍び込ませるには都合がいいということだな？」

「ええ。その通りです」

「なんてこった。樺太はいつの間になんか風になつてしまったのか」

思い出にある場所とはあまりにも違う。越谷はそう漏らした。

「変わりましたよ。人も、技術も、情勢も。もう樺太は、長閑な湿原地帯ではなく、静かなる火薬庫となりました。地中には石油と石炭が埋まっています、地上には導火線があります」

困難なのは、わかつていた。しかし、ここまで困難だとは。育ちの故郷だからと甘く見ていた自分を、いまさらながらに反省した。

そしてなんだか急に、ここが自分の故郷ではないような気がしてきた。

「この、市民武装状態を作り出したのは、宇佐美さんを筆頭とする昭和30年代入庁組、つまり復讐組です」

「復讐組？」

「ええ。正確には昭和28年度から昭和30年代を抜けて昭和40年度入庁までの世代を、復讐世代、その中でも昭和28年度入庁から昭和35年度入庁までの世代の中で樺太出身者を復讐組と言っています。」

彼らは樺太庁独自の防衛計画を策定したり、地方自治をいいことにやりたい放題ですよ。私兵を擁している、なんて話が出てくるぐらいです」

「確か宇佐美君は……」

「昭和28年度入庁のエリート組ですね。復讐組のリーダー格にあたるグループです。復讐組の中では上下や出世コースの差異に関わらず、より強固な防衛案を提示できるものが評価されます。その中で一定の地位を保っている宇佐美さんは、なんというか、軍としても一目置かざるを得ない存在です」

1953年、すなわち昭和28年終戦まで。それは日本において近代史上初めての事態が起こった時代でもあった。

敵が本土に侵攻してくる。ずかずかと土足で踏み込んだ挙句に、市民を虐殺して回る。樺太人は未だにこのことを乗り越えられていない。

昭和28年は、樺太解放の年である。長い長い対ソ戦争の果てに、ようやく解放された故郷^{からふと}。

もう二度と敵にこの土を踏ませないように。そう立ち上がったのが、「復讐組」と呼ばれるグループである。

「日本の脆弱な国力で樺太防衛が成り立つのは、明らかに樺太庁の施策によるところが大きいです。陸海軍は樺太内において、庁に対してそこまで強くは出る事が出来ません」

おかげで、ソ連は通常戦力による樺太侵攻を諦めているフシさえあります。と、久留米は付け加えた。

「ですから、樺太の中心はやはり、諜報戦です。諜報による樺太の脆弱化によってしか、ソ連は樺太の侵攻を行うことができないのでしよう」

「では、諜報戦はこれから拡大の一途か」

「そう考えるのが妥当かと」

越谷は頭が痛くなる思いだ。

樺太での諜報戦は、そのまま武力行使へと直結する。

反政府勢力を使用した抗争や破壊工作には事欠かず、またそれを阻

止しようとする当局との武力衝突も発生する。

諜報戦の拡大は、樺太においてはそのまま治安の悪化に繋がるのである。

「いい旅計画認可における三要件のうち、第一項目は尾羽の治安回復だ。どうだ、この際どこかひとつ大きい目の拠点を潰せないか？」

「と、言いますと？」

「尾羽の治安回復は、公的な数字によっては証明しづらい。であれば、ここはアピール合戦になる。どこか一つ拠点を潰す事が出来れば、尾羽の治安回復という問題に関してのアピールになる」

尾羽の治安が悪い、という根拠のある数字はない。なぜなら、諜報抗争においてはその殆どが国防機密に該当する為、正確な数字は公表できないのである。

公的に使用が不可能な数字は、つまり存在しないことと同じである。

これは不利にも有利にも働く。

国鉄側も尾羽の実情を数字と言う動かぬものさしで計ることはできない。つまりこれは印象論に帰結する。

尾羽で何か事件が起きれば印象は悪くなるし、何かが解決したと報じられれば印象は良くなる。

それを活用しようという提案である。

「……現場の戦闘員としては、あまり首肯したくないですね。その理論は」

しかし、ここで久留米はすぐに受け入れることをためらった。政治的都合による諜報計画の変更は、時に大きな破綻をもたらす。

現場の最前線に立つ久留米としては、受け入れがたい。

今から無理にどこか潰せ、と言っているのではない。だが、ここはひとつこちらの話を聞いてほしいんだ。越谷はそう前置きした上で、久留米に要求を突き付けた。

「もし次に、公表可能な工作員対処行動があれば、できるだけ大きくドーンパチしてもらいたい。全国紙の社会面に豆記事が出る程度の」

「……善処しますが、しかし私はウエからあまり暴れぬようにと言わ

れている身でして」

久留米は、苦しい。本来ならば言われるまでもなく、思いつきり暴れたい。だが、今でさえ抑えられている状況で、これ以上暴れることは難しい……。

珍しく自制的な久留米に、越谷は焚き付けるように言う。

「頼む。君だって暴れ倒したいだろう。次尾羽で作戦があつた時、新聞に載るような大事件を起こしてくれるだけでいいんだ」

「……。検討します」

これ以上、怒られたくない。久留米は言外にそう付け加えながら黙った。

「期待しているよ」

越谷も、それ以上は求めなかった。

17. く第一仕業く1レ：発鉄春の挨拶運動

寒空の朝に、気持ちのいい声が透る。

「おはようございます！　いってらっしゃいませー！」

ここは尾羽駅改札口。声の主は駅員の綱島太郎だった。

急遽始まった発鉄声出し挨拶運動。この少々喧騒に過ぎる声出しも、その一環だった。

乗客を見送った綱島は、踵を返して便所清掃へと向かう。

すべての始まりは便所から。これが越谷の師、十合元長官・元復興特別総局長の教えである。

十合元長官は、全国のありとあらゆる国鉄駅の便所を巡り、その清潔さ、整備の行き届き方でその駅、その管理局の現場の状況を把握していたという。

そして方が一掃除が不十分であろうものなら、容赦のない雷が責任者に直撃することとなる。

むろん、それが原因でクビが落ちることはない。改善のためには、責任者の首はつながっていないなければならない。それも十合イズムであつた。

越谷も、十合イズムの影響を古くから受けている。

全ての始まりは便所から。それは、越谷の教訓でもあつた。

そんな越谷は、他人を叱責することが大の苦手である。どちらかと言えば、やさしく説き伏せるような、そんな人間性の持ち主だ。

そして、偉そうに誰かにあれこれ言うよりも、自分から行動する方が好きだ。

であるから、今まさにこの尾羽駅の便所で、越谷自らモップとバケツと雑巾を手に掃除を始めているのである。

「よいしょっと。洗面器の汚れは心の乱れ〜」

どこかで聞いたそんな文句を口走りながら、せっせこせっせこ雑巾で吹き始める。

「ああ、社長！　だめですよ！」

悲鳴のような声を上げて、綱島君がやってくる。下つ端の仕事をとップに代わられたとあつては、下つ端の名が泣く。

「おお、綱島君だね。だいぶきちんとしているじゃないか。だが、少し甘いかな」

「すみません！ 今すぐやります！」

「はは、まあいいさ。がんばってくれ」

越谷にとつて、現場の見回りはある種の日課になっていた。

越谷は、二枚あるうちの一枚を綱島に渡し、なおも掃除を続けた。

「えつと、社長？」

「まあまあ、一緒にやろうじゃないか。一緒にやった方が早く終わるだろう」

二カつと笑いながらそんなことを言われてしまったら、もうどうしようもない。綱島は雑巾を受け取ると、今までにないぐらいの速度と正確さをもって掃除を始めた。

「おおー、いいねえ。若さを感じるよ。どれ、私も」

越谷もまるで競うかのように雑巾を掛けていく。雑巾の次はモップ掛け。洗剤を撒いて、水をかけて、ゴシゴシゴシゴシ……。

越谷は上機嫌に鼻歌を歌っているが、綱島にとつては気が気ではない。い。

胃が縮みあがるような作業の末、なんとか掃除を終わらせた時には、綱島は疲弊しきっていた。

「うむ。やはり、全ての始まりは便所から、だな。とてもきれいでいいじゃないか。ご苦労様」

それだけ言い残して越谷はとつとよそへ行ってしまった。

綱島は、へなへなとその場に崩れ落ちた。

「はい、お待ちどう様でした南港行です」

大宮ははきはきとした声でがらんだりの車内に呼びかける。乗客

は越谷ただひとりだ。

列車は以前の6両編成から2両編成に短縮され、代わりに本数は2倍に増えた。

この電車は尾羽駅前駅を9時36分に出発する南港行である。

その前の電車は以前なら30分発の山本行であったが、現在においては35分発の環状線内回り行だ。これは尾羽駅前駅から出発して環状線内回りに乗り入れ、その後また尾羽駅前駅に戻ってくる列車である。

運転台の方向が一周を通じて変わらないため、運転台付きの車両（制御車）が片側にしかついていない編成で運用される。

最後尾の貫通路は南京錠で施錠されていて、乗客が落ちないように配慮されているほか、最後尾であることを示す反射板も取り付けられていた。

36分。電車が発車する。そして、先行するその不格好な電車を見つめながら、ゆっくりと電車は走っていく。

「相変わらず、駄目か」

前の電車も、この電車も、2両程度の短い編成であるにも関わらず、やはり乗客の姿は見えなかった。

「ええ。ですが、乗ってくれた人の評判はいいですよ。また乗りたい、と何人か言ってくれましたし、定期的に乗ってくれる人も増えました」

挨拶運動のおかげですよ、と大宮は言う。

「挨拶運動が受け入れられたようでよかった。本当は、君たちに反抗されるのではないかと思っていたんだ」

そう言うと、大宮は笑った。

「確かに、命令したのが幸谷さんだったら、我々も少しは反抗したと思いますよ。でも、越谷さんと桐谷さんの言い出しとあらば、反対する理由はありませんよ」

「それはうれしいことだが、なぜだい？」

「当たり前ですよ。桐谷さんは、重役会議に出れない我々の代わりに、我々の意見を伝えてくれる。社長は、社長なのにわざわざ現場まで出

てきて、きちんと俺たちのことを見てくれる。それがうれしいんです。だから、手伝ってくれと言われれば手伝いますよ」

越谷は、ホツと胸をなでおろした。自分のやってきたやりかたは間違っていない、そう言われた気がした。

現場を見て回って現業の声を聞く、というのは十合が無職浪人時代から続けていたことだった。

現場はどんな苦労があるのか、どんな喜びがあるのか、何を考えて、どういう論理を持っているのか。それを知ることが運営の一丁目一番地であると、固く信じて疑っていない。

からこそ、他者から見てそれが評価されているかどうか、というのは怖いところがあった。

途中の停車駅で、何人かの旅客が乗車してきた。二人は顔を見合わせ、うなづきあうと、口をつぐんだ。

「前方よし、閉塞よし」

大宮は丁寧な口調で信号を確認しつつ、ハンドルをさばく。運転に詳しくない越谷でも、素晴らしいと思える運転だった。

しばらくしたところで、終点の南港に着いた。乗客はまばら。以前と比べて少しは乗客が増えたのではないかな、と越谷は希望的に見る。が、大宮の顔を見ると、そこまででもなさそうだ。

終点に着いた。

いつもなら扉を開けておしまい、であるが、大宮は席を立つてくるりと後ろを向き、数少ない乗客に頭を下げた。

「ご乗車、ありがとうございます」

数人の乗客が降りていく。そのたびに、頭を下げる。

そのうちの一人は、驚いたことに、PTAで出会った華僑系の親父だった。運転台後ろの料金箱に親父が運賃を入れたときに、相手の方がそれに気が付いた。

「アラ、大宮さんと越谷さんネ。仕事？」

「ええ。この間はどうも」

この親父は本当に乗りに来てくれたらしい。二人ともうれしくつて、つい破顔してしまう。

「頑張ってるネ。乗ったけど、よっぽど便利ヨ。文句言うところ無いネ」
「ありがとうございます。ご満足いただけただけでなによりです」

「色々言うアホいるけど、気にしちゃ駄目！ 電車増えてこの前までより便利になったヨ、頑張ってる！」

「はい。有法子の精神で頑張ります」

そう言うのと、親父は目の色を変えた。

「有法子！^{ユーファーズ} いい言葉知ってるネ！ そうヨ、それで出来ないことないんだから！」

笑いながら越谷の肩をバンバンと叩いてくる。越谷は、なんだか満州時代や革命戦争時代に、親しくしてくれた民国の人々を思い出してしまった。

「有法子なんてどこで教わったノ。日本人でしょアンタ」

「実は、華北に居たことがあります。総統にもお会いしたことがあります、この言葉は民国の友人から教えてもらいました。それに戦時は華南で従軍していました」

そういうと、親父はびつくりした顔を見せた。

「あんらあ、じゃあアンタたちは同胞も同じネ！ こんどウチに来るといいよ、サービスするヨ」

「王さんのところのチャーハンは絶品なんですよ！」

大宮が目を輝かせる。親父は豪快に笑った。

「大宮くんもいつでも来るといいネ！ 越谷さんも、みんな仲間ネ！」
仲間にも、発鉄電車に乗るように言っておくヨ！

よく響く大きな声でそう叫びながら、親父は電車を降りて行った。

「越谷さん、そういうえば最初に名を挙げたのは民国戦線なんでしたっけ？」

「ああ。民国防衛戦線の最前線にいた。民国人を見ると、他人事には思えないんだ」

あの時の労苦は無駄じゃない。そんな風に言われている気がして、越谷はますます自信を深めた。

「さて、ここでは数十分の停車だったね。いいよ、缶ジュースの一杯でもおごるよ……」

二人は、上機嫌なまま電車を降りた。

二人は凍てついた海を見ながら、ベンチに腰かけていた。目線の先では、海に降りて氷上遊戯にふける若者と、殺気立った態度でそれを捕まえんとしている当局の姿があった。

最初は当局側をおちよくっていた若者だったが、当局が空に向けて小銃を一連射すると、途端に静かになった。そのまま、まるで囚人の様にとぼとぼと歩き出し、めでたく詰所に吸い込まれていった。

「平和ですねぇ」

大宮は呟く。越谷は、平和の定義がすっかりわからなくなってしまう。

「さて、今日も大宮君にこれを聞きたい。現場で今、何か困っていることはあるかね」

すると、大宮は珍しく待ってましたとばかりに話し始めた。

「ひとつ、あります。それは、仕事量が増えたということですよ」

越谷は、胸に鋭く痛みが走る。

「続けてくれ」

「列車の本数が倍増しました。ですので、必要な乗務員の数も倍増しました。今は、余裕時間やなんかを切り詰めて何とかしている状態ですよ」

越谷は苦虫を噛みつぶしたような顔になる。

「……やはり、か」

越谷が増便案を渋る幸谷や桐谷に対して、知っていながら黙してたこと。それは、必要な人員の増加であった。

必要な人員が増加する。しかし、すぐに人員は補充されない。すると、どうなるか。

休憩時間や非番を削って、一人当たりの担当量を増やすことでしか対応できない。

現場に確実にしわ寄せがきている。本来なら、越谷は何としてでも阻止したかったことである。

「ええ。態度改善運動も相まって、少し余裕のなさが際立っているように思えます。どうにかなりませんか」

「策はある。……が」

越谷の頭の中には、長年培ってきた経験から生まれ出る様々な施策がある。だが、それを行使すべきか、今まさに迷っているところだった。

「策の一つに、毎日柔軟にダイヤを変えていく、ということがある。環状線なんかは、ダイヤが乱れやすく乗客がダイヤ感を持ちにくい。そういった路線において、例えば車両や乗務員が確保できない日は一部列車を運休していく、などの手段もある。又は、後方勤務の連中の中で鉄道免許を持っている連中を現場に回す、などの手段もある」

「……それは、実現するんですか？」

「厳しい」

越谷の表情がゆがむ。

これは、越谷にも経験があったことだ。

帝都復興に伴う中央線の大增発の時も、同じ問題が噴出した。あの時は、越谷に信頼があったこと、もともと越谷が現場出身であったこともあり、現場からは受け入れられた。が、事故が起きてしまった。

第一次・第二次お茶の水事故を筆頭とする、関東の鉄道軽微事故^{インシデント}・事故群である。

発鉄でも、同じことが起きるのではないか。越谷には不安がある。

「まあでも、しばらく頑張りますよ」

大宮はあつけらんかんとした顔で言う。

「要は、社長がそのことを考えてるか考えていないか、ですよ。社長が悩んでくれているのはわかりましたから、もう少しこちらでも頑張ってみますよ」

「まったくもって申し訳ない。もし、状況が破綻すれば、現場判断で運休を作ってくれても構わない。桐谷君にそう通達しておくよ」

「わかりました。……社長、優先すべきはダイヤではなく、安全ですね

？」

「ああ、そうだ。だが、挨拶運動や清掃運動などは続けて欲しい……。あれは安全の根幹にかかわるんだ……」

「社長が言うなら、そうします。我々もがんばりますから、社長も頑張ってください」

「ありがとうございます」

本当にいい部下を持った。越谷は鼻頭を赤くして、今にも泣きそうな顔だ。大宮はそれを見て更に笑った。泣かないでくださいや、社長。その優しい言葉が、更に嬉しかった。

ひとしきり感動した後で、ようやく越谷は平静を取り戻した。

「ほかに、何かあるかね」

越谷が促すと、大宮は少し考えた末にこんなことを言い出した。

「ちよつと違う話なんですけど、最近三田さんの様子が変なんです」

18. く第一仕業く1レ：突放

久留米千佳子、と言う人物は、非常に形容しがたい精神性を持つ人間であった。

例えば、治安の悪い西口地域における治安維持活動に際して、久留米は警護対象である現地女性従業員と大喧嘩を繰り広げたりしている。

この間だつて、あんまりにも彼女が暴れすぎるものだから公安から苦情が来たところだ。

海軍情報局において直属の上司である鵜沢は、この久留米の取り扱いに非常に手をこまねいていた。

「久留米君、一応部外のことに関しては、我々は干渉を貫かなくてはならないのでねえ……」

憲兵組織的な性格を持つ海情は、「民」の騒動に首を突っ込んではいけない。なし崩しの崩れつつある秩序を取り戻さんと、鵜沢はきつく久留米に釘を刺しているところである。

そもそもとして、海情には公安的な捜査・執行権は存在しない。あるのは軍内部の調査権と軍に関係する事件の調査権、又は公安などのその他諜報機関並びにそれに準ずる機関による要請があつた場合における執行のみである。

つまり、ここ最近の久留米の行動は、完全な越権行為であつた。

「いいかい、君は別に捜査をしなくて良い。要請があつたときにだけ動けばいい。わかるね?」

ああ、はい。と、ナマ返事が返ってくる。

「いいかい。君はね、少し暴れすぎなんだ。セクションとは必ず厳密に守るべきものであるから、これからは公安や私などから別命があるまで、必ず待機を行うこと。しばらくは、鉄道会社の人員としてよく働きなさい。いいね?」

ああ、はい。このようなことには基本的にナマ返事しかない久留米であつたが、顔を見ると少しは反省をしているようだ。

「まったく……。頼んだよ」

頭を下げる久留米。だが、その表情は飄々としていた。

部屋を出ると、外で待つていた日田井がやってくる。

「じゃあ、しばらくはお暇ですね」

「何言ってるの。今から私は貨物駅へ行ってくるわ」

「はあ？ 何を言ってるんです？」

まったく反省をしていない久留米の言葉に、日田井は目を丸くする。

「ねえ、日田井君。私は捜査をするな、とは言われたけれども、犯行現場を見学するな、とは言われていないわ」

「いえ、見学も捜査の内に入ると思いますが……」

「だからね、今から犯行の現場を見学しに行くの。じゃあね」

何も聞いていない久留米を止める手段を、日田井は有していなかった。

「あーあ、知らないよもう……」

貨車が縦横無尽に走っている。数本の線路の間を、まるで暴走しているがごとく走り去る。

いや、正確に言えば暴走していると言えなくもないのだ。なぜなら、貨車は機関車に突き飛ばされて無人で走っているからだ。

係員がその「暴走貨車」に飛び乗り、ペダルを踏みこむ。ペダルに連結されたブレーキによってそれは制動力となり、「暴走貨車」は所定の位置で停止する。

暴走は暴走でも、これは制御された暴走なのだ……。鉄道員は、今日もそう強弁する。

この一連の活動を、人は「突放」と呼んだ。

突放は命がけである。毎度死者が出る。残された未亡人の為に設立されたのがコーサイカイという組織で、そこが運営するキヨスクは未亡人の雇用確保という側面を持つ。

その危険な突放は、当然のように尾羽でも行われていた。

久留米は、その無人貨車の激走の合間を縫って走り回っていた。

「おお、嬢ちゃん。そんなところでうろつかないでくれよ！」

強面の男が怒鳴りつけてくる。きつと、久留米の事を心配しての事だろうから、B面久留米も怒鳴り返したりはしない。

「ごめんなさいねエ。なるべく気を付けるけど、私が死んだら塩でも撒いておいてね」

久留米はそれだけ言い残してズンズン進む。言われた方の男は呆然としている。が、お構いなしだ。

このように貨車が大量に並んでいる線路の事を、貨物側線と言う場合がある。

これは、まさしく貨物側線であった。

貨物側線には、多種多様な貨車が存在する。

有蓋車、無蓋者、タンク車、長物車、ホツパー車、石炭車……。とび色に黒色、青色、緑色……。本当に多彩な貨車が行き交っている。

有蓋車、というのは最も基本的な貨車で、まるで物置に車輪を付けたような形状をしている。しかし、外見は似たようなものでも、その用途や仕様は多岐にわたる。

例えば、今久留米の目の前にある貨車は軍用の貨車である。濃緑に塗られたそれは、迷彩なのであろうか、色彩のない駅構内では悪目立ちしていた。

軍の荷物は多岐にわたる。それを輸送するために軍は多数の貨車を配備しているが、しかしそれでは到底足りない。

その足りない分は、国鉄などの貨車を間借りして用を足すこととなる。そういった貨車を、「軍需代用」と呼んだ。

これは昭和30・40年代以降に生まれた比較的新しい用語で、アフリカ戦争に際して貨車が足りなくなつたがために生まれた概念でもある。

ゆえに、未だに統一された様式などが定まっていないのではあるが、現状においては、この「代用」は国鉄その他の貨車に対して、「ミ」という表記を貨車か荷票に対して行わなければならない。

久留米の目の前の貨車の横には、古びた鉄道省由来の貨車がある。

そこには、有蓋車を表す「ワム」の隣にそつと「ミ」の文字が書かれていた。

軍用貨車は、基本的に検査は行われない。これは、文民に機密の文書やその他物資を検められることを、軍が嫌ったためである。

久留米は荷票を確認する。行き先は、基地のある知取となっている。久留米はそれだけ確認してその場を離れた。軍用の貨車は今回は関係のないはずである。あまり、関係のない貨車にかけている時間はない。

ひとつひとつ貨車を見ていくと、とび色の貨車があつた。一般貨車だ。

すると、人影がやってきて、その貨車のまわりでなにやら作業を始めた。

作業員——この場合は操車掛という——であろうか？ 久留米はそちらへ向かう。

貨車の隙間からその人影を見つけた。よく見ると、女性のようにだつた。発鉄の制服を着た、若い女性である。

操車掛には、屈強な男しかいない。軍隊もびつくりな力仕事であり、いつも死と隣り合わせの職だからである。

ではなぜ、こんなところに若い女が？

久留米は貨車がいきなり動き出さないか注意しながら、その若い女の動向を注視していた。

若い女は、きよろきよろと周りを見回しながら、貨車に差さつていた荷票を抜き取り、懐から出した新しい紙をそこに入れた。

……久留米はハツとした。荷票の差し替え。この間の密輸事件の手口そのものだ。そして、この若い女こそが、久留米が探していた裏切り者である。

「ねえ、君」

久留米は女に声を掛けた。女はビクリと身体を震わせると、いきなり走って逃げだした。

「待っ!?!」

追いかけてしようとした久留米の耳元を、銃声と銃弾が駆け抜けた。

身をかがめて振り向くと、黒服を着込んだ男が拳銃を構えていた。男は久留米と目が合うと、貨車の陰にスツと隠れた。銃撃戦の構えだ。

「まどろっこしい。かくれんぼは嫌いよ」

久留米は拳銃ではなく、懐の短刀を手に取り、そして猛然と駆けだす。

驚いたのは男の方だ。走りくる久留米に向けて拳銃弾を放つ。弾のひとつが久留米の頬をかすめる。が、久留米は止まらない。

しかし、足場は具合の悪い玉砂利である。久留米は足を滑らせて前のめりに倒れこむ。

男は好機とばかりに久留米に襲い掛かる。が、それは久留米の罠だ。

久留米は華麗に受け身を取ると、そのままはじけるように飛び上がり、短刀を男の喉元にまで切り込んだ。

男は仰け反る。久留米は更に切りつけようと手を出す、今度は反対に男に身体をはつしと掴まれ、そのまま揉み合いの体勢になってしまった。

ゴロゴロと玉砂利の上を転がる体中に石が当たる。

すると、汽笛がなった。そのまま、密輸貨物を載せた列車が動き出した。

久留米は、男がニヤリと笑って気を抜いた一瞬を見逃さなかった。

久留米は胸倉をつかみ、走り出した列車に男の頭をこすりつけた。速度を上げた列車は、男の戦闘力を奪うには十分な凶器になった。

痛み之余り、男は久留米をきつく抱き上げる。

久留米は絡みついた体勢のまま、まるで切腹するかのように男の背中に刃を突き刺す。男のうめき声には一切の注意もくれず、そのまま男を引きがした。

列車は速度をゆっくりと上げる。止めなければ。久留米は男の身体を車輪に巻き込んで止めようと、線路に向かって男の身体を蹴り飛ばす。

が、不意に後ろから二人目の男の毛むくじやらかな腕が伸びてきて、

久留米を締め上げた。

意識が飛びそうになる中で、久留米の精神は、恐怖より怒りが勝った。

久留米は感情のままに後ろに向けてでたらめに引き金を引いた。

久留米のノールック・ショットは見事男の身体をとらえ、男はそのまま崩れ落ちる。

腕から解放された久留米は、男のおとがいを蹴り上げると、憎しみを込めて頭蓋へ向けて三発の銃弾を叩きこんだ。

パン・パン・パン。

規則的な音が鳴り響く。その音を合図にまたほかの男が飛び込んできた。

久留米のフラストレーションは最高潮に達した。

怒りに任せて、短刀を投擲する。

それは見事に喉元に命中し、そのまま後ろに崩れ落ちた。

久留米はやっと貨車の方を振り返る。もうすでに列車は遠くに行ってしまったている。

「止めなきや」

久留米はおもむろに拳銃を構えた。

いつもとは違い、しっかりと照星と照尺を合わせて、貨車の連結器を狙う。

短く息を吐いて、引き金を引いた。

銃声の後に、貨車から爆発音にも似た破裂音がした。

ブレーキ管が撃ち抜かれたのだ。

ブレーキ管から空気が漏れ出し、最大ブレーキが強制的に編成全体に掛かる。

ドン、ギイイイイイ!

耳をつんざく轟音が鳴り響き、不愉快な金属音がこだまする。列車は煙を上げながら停止した。

なんだなんだと操車掛が駆け寄ってくる。列車を運転していた機関士が、青ざめた顔で機関車から出てくる。

久留米は申し訳ないと思いつつもそれには一瞥もくれず、短刀を

回収した。

「おい、嬢ちゃん、大丈夫か……なんだこりやあ！」

久留米のことを心配していた先ほどの操車掛がやってきて、現場の惨状に目を覆った。

「ねえ、操車掛さん、若い女、見なかった？」

久留米が何事もなかったかのようにそう問いかけると、操車掛は慄きながら答えた。

「お、お前さん以外見ちゃいねえよ……」

「そう……。ありがとう」

逃がしたか……。密輸は何とか防止したものの、肝心の裏切りものには逃げられてしまった。

久留米は悔しくて臍を噛んだ。

19. く第一仕業く1レ：ワキ800

さて、戦後処理である。久留米は立ち上がった。

この際、ここまで大ごとになってしまえば、久留米は鵜沢に大目玉を食らうことは必至である。から、久留米は怒りを少しでも低減させるための有効な材料を、なんとかしてでも見つけたかった。

すなわち、久留米は今しがた停車した貨車に駆け寄り、物色を始める。

「あーあ、まただよ……」

うなだれる機関士に声をかける。どうやら、操車場内での事故は今年度2例目らしく、各現場には相当な注意喚起がなされていたらしい。

その若い機関士は、機関助士とともに顔を真っ青にして項垂れていた。

「私は海軍情報局の久留米よ。大丈夫、今回の事件はそちら側の責任事故ではないから」

それを聞くと、機関士と側で聞いていた操車掛がほっとした顔を見せた。

「いきなりフル制動かかったもんだから、何が起きたのかと……。して、何がありましたか？」

久留米は詳細をぼかしながらも機関士に状況を説明した。そして、邪魔にならないように当該の列車を使用頻度の低い番線へ押し込んでもらった。

そうこうしているうちに、中央制御室から助役がスツとんできた。息せき切って走ってきた助役に、久留米は淡々と事情を聴く。

「この列車はどこ行き？」

「はあ……え？　なんですか？」

「この列車です。どこ行きですか？」

混乱している様子の助役に代わり、少し落ち着いた様子の機関士が答えた。

「急行貨物の急貨522レ、農線来行です。農線来からは国鉄線へ継

走となり、それぞれ大泊、久春内、真岡へ行く予定です」

大泊は本土・北海道との一番メインの玄関口である。北海道で言うところの函館にあたる。

真岡は小樽のような、どちらかと言うと裏の玄関口だ。

久春内は、間宮海峡・日本海沿いの炭鉱街である。

「それ以外の荷物はない？」

「さあ、途中で継走扱いになる貨車もありますから、一概にすべての貨車がどこに行くかは、把握しかねます」

列車は直流軽機関車ED65―1504・直流汎用機関車EF65―2511を先頭とした17両編成。換算89.5車。貨車はバラエティに富んでおり、一般的な有蓋車から木材輸送の長物車、鉱物輸送の石炭車、ホッパ車など様々だ。

久留米は、先ほどの貨車を探し当てる。が、とび色の貨車はたくさんあって見分けがつきにくい。が、そこで緑色の貨車が役に立った。

「あの奇抜な色から三両目、だったわ」

軍用貨車「ワキ700形800番台」ワキ812。不気味な緑色に輝くその車体は、非常に見つけやすかった。

その貨車から三両目。「ワム75713」と書かれた貨車があった。機関士は叫び声を上げる。

「なんで、ここにワムが!？」

その声にびっくりして久留米は飛び上がる。それをみて機関士は軽く謝った後、久留米に訳を聞かせた。

「これはワム70000形貨車と呼ばれるもので、この貨車で出せる最高時速は75キロ毎時です。この列車は急行貨物列車なので最高時速は95キロ毎時……。脱線の恐れがありました」

機関士とともに、操車掛がみるみる青ざめる。久留米は、二人の表情で事の重大さを理解した。

貨車の扉に手をかける。鍵がかかっているようで開けられない。久留米は懐中から忍び錠を取り出して解錠し、戸を開けた。

中には、紙で包装された銃器、手榴弾……。危険物で一杯だった。停車の衝撃でか荷崩れも起きており、このまま運行を続けていれば危な

かったであろうことは想像に難くない。

戸を閉めようとすると、操車掛が待ったをかけた。

「おい、この荷票おかしいぞ」

荷票には、軍需代用を示す「ミ」の文字が手書きで付け足されていた。これを見咎めた機関士が久留米に詰め寄る。

「ちよつと、勘弁してくださいよ。もし高速走行中に脱線していたらどうなったか……」

軍需代用貨車の管理は軍の管轄である。もし、このミスを引き起こしたのが軍であれば、これは大変なことである。

久留米はなんだか申し訳ない気持ちになって縮こまるが、しかしここで違和感を覚えた。

「いや待って、この貨車は何者がが工作をしていた貨車……」

もう一度貨車の積み荷を見る。おおそ軍用には供されないような銃器や、日本では一般に出回らない火器しか見当たらない。

「ああ、そうか、例の女は荷票に細工をしていたんだ」

操車掛はそこに思い至り、ポンと手を打った。

「どういうことですか？」

察しの悪い機関士に、操車掛が説明する。

「いいか、このよくわからん貨車を軍用に化けさせるために、犯人は荷票に軍需代用記号の“ミ”を書き足したんだ。そうすれば、俺たち“操車掛”もお前ら機関士も、なんなら監査の人間も、これが軍用だと信じて疑わなくなる」

機関士はそう言われてやつと膝を打った。

「そうか。ぼくも軍需代用と聞けばなるだけ触れないようにしますもんね。こりゃあ巧妙だ」

「敵をほめてどうするんだい！ おかげで大惨事だ！」

辺りには未だ鉄臭い匂いが漂っている。機関士は再びげんなりとした表情を浮かべる。

その横で、久留米は笑みを浮かべていた。

「これは、これは素晴らしい」

「おいおい、アンタもかい……」

操車掛が呆れたような声を出すが、次の瞬間に久留米の尋常ではない表情を見てぎよつとする。

「軍用貨車が悪用された。これはつまり、軍が被害を受けた、とまでは行かなくとも、軍が関与すべき事態になった、と強弁できる状況になったと言えるでしょう……」

久留米は、腕にぐつと力を込めた。

「これは良い手土産ができましたよ」

「ここにこ笑顔でそう語る久留米を、二人は意味が分からず顔を見合わせるばかりだった。

「でかした！ これで我々も独自に行動できるようになる。これで君の今までのアレコレもチャラだ！」

鉄道電話で海情本部にそう報告した久留米は、直ちに南港の本部に召集され、そして参謀の激励を受けた。

「本当に大手柄ですよ、久留米さん。連中の新しい手口も発見して、しかもそれが軍と関係のあることだった。これで私達が行動を起こす口実になります。鵜沢さん、直ちに行動しましょう！」

色めき立つ部下たちをよそに、鵜沢は一人静かだった。

「久留米君、とりあえず今回の君の独断専行は不問にしよう。ただ……」

鵜沢は渋面を作る。

「まだ、こちらから積極的に動くことは止そうと思う」

「それは、なぜですか？」

久留米は手柄をフイにされた気がして不機嫌な表情になる。これには日田井も久留米の肩を持った。

「ボス、確かに久留米さんは悪かったと思います。人の話は聞かないし屁理屈で行動するし暴れるし怪人二面相だしどうしようもないです。ですが……」

「酷い貶し方ね……」

日田井の罵詈雑言に久留米はしよぼくれる。日田井は無視して続ける。

「ですが、今回は大手柄ですよ。密輸を事前に食い止めただけでなく、彼らの新しい手口まで発見したんですから。ご褒美にちよつとぐらい暴れさせたつていいじゃないですか」

「だから、久留米君の独断専行は不問に付すと言っているだろう？」

鵜沢は諭すような笑みを浮かべた。

「いいかい。確かに今回は軍という“シンボル”が使用された案件だ。だが、“軍が関与した”訳ではない」

そう言われて、日田井も久留米も押し黙る。

「我々の役目は、海軍内に“レッド”がいないかどうかの監査、取り締まり、そして処理だ。手当たり次第にア力を殴り飛ばすことが我々の仕事じゃあない」

そんなことは百も承知。久留米は表情でそう語るが、鵜沢は認めない。

「もちろん、樺太においてはそんなことを言っていられないのもわかっている。だが、今はまだ早い。いいかい。海情はあくまでもパツスィヴで無ければならないのだよ」

これには日田井もむくれてしまった。だが、当の久留米は受け入れたような顔をしている。

「仕方ありません。ここに引き取っていただくときの条件が、それでしたものね」

「ああそうだ。あの狂犬久留米がよくもここまで、と思うよ。だが、今の君ではまだ早い。こちらでも対応は練っておくから、君はしばらく待機するんだ。いいね？」

しかたありません。肩をすくめてそのまま納得したように引き下がった。

そんな久留米を、日田井は唾然とした表情で見送った。

「海情が密輸事件において軍のシステムが悪用された事実を突き止めたらしい」

公安の二野は部下にそう語った。

「……なんですって？」

「密輸に使われた貨車が、軍用であるかのように偽装されていたそう
だ」

部下は、あれまあと小さく漏らすと、肩をすくめた。

「これで、我々公安の出番は終わりですかね」

軍用貨車は海情の管轄でしょう。部下がそう言うのと二野は頷いたが、肯定はしなかった。

「だが、通常貨車の検査は引き続き我々の管轄であり、そしてこれからも我々は検査を続けるさ」

「抑止力として必要なのはわかりませんが、しかし成果を上げられますかね」

「わからん。だが、やるしかない。今度はただ密輸を防いだ、では駄目だ」

今までは、密輸貨車を見つけ次第摘発し、その貨物をその先に行かせない。所謂水際防衛を迫られていた。

だが、それではだめだと二野は言う。

「今までは発見し押収するだけ。これではダメだ……。何か策が欲しい。君、何かないかね」

白羽の矢が立てられた部下は面食らう。が、数瞬の沈黙の後に口を開いた。

「公安においては、おとり捜査などの危険な操作も、まま認められることが多いと存じています。では、それを有効に使ってみては……」

「足りん。もっと具体的に」

その気障なハンサム面^{ツラ}にシワを寄せて、二野は部下に詰め寄る。部下はしどろもどろになりながら答えた。

「例えば、次に貨車を発見した際に、武装した隊員を積み荷の代わりに

貨車に乗せ、本拠地へ強襲するというのはどうでしょうか」

具体的に、と言われたので、むちゃくちゃな案をとりあえず提示してみた。部下は、こんな提案通るはずがないと思いつながらも、とりあえず要求を満たせたことに満足した。

「……なるほど」

二野は、気障な前髪をしきりに触りながら何事かを考える。部下はそれを静かに見守った。二野は何かを考え、その答えにたどり着きそうなきはいつもこうするのだ。

「面白い案だ」

その言葉で、樺太庁警察公安課尾羽支所の空気が、一変した。

「非常に奇抜で創造性があり、なおかつ効果的な案だと思う。その案でいこう」

「ちよつと待ってください。危険です！」

言った本人が慌てて止める。だが、エリート崩れで自分に絶対の自信を持つ二野は聞く耳を持たない。

「大丈夫だ。こういう時は、策の確実性より奇抜性の方が大事なんだ」
そんな……。部下の一人がつぶやいた。その後ろで、二野は満足げに宣言した。

「これより『鞍上の騎手』作戦を開始する！」

二野が何事かを言い出した。部下はまるつきり意味が分からない。一体どんな勝算があるのかもわからないが、ともかくボスが何かを決めた。部下は、これに従わなくてはならない。

「失敗は許されない。次が恐らく、最初で最後のチャンスだ」

なら、確実性のある策じゃなきゃダメなんじゃないですかね。

部下のそんな独り言は、場内の無言の肯定を得ながらも完全に無視された。

20. く第一仕業く1レ：不審

「三田恵子？」

久留米が越谷からその名前を聞かされたのは、貨物側線での戦闘のから一日がたったころだった。

「ああ。なんだか、不審な点があったらしい」

三田恵子、若い女性運転手。久留米は頭の中で二つの事柄がつながりそうになるのを感じて胸が膨らんだ。

だが、焦らない。

「事のあらましを、聞いてもよろしいですか？」

逸る気持ちを抑えて、頭を一度空にしてから越谷に聞いた。

越谷は、鷹揚に頷いた。

「ああ、もちろんだ」

環状線の港湾区間に、まるで枝毛の様に延びている路線がある。それぞれ黒井線と灰原線という。

この区間は発鉄成立以前から民間会社「尾羽臨海鉄道」によって軍から管理委託されていた区間だ。

尾羽臨海鉄道（以後、尾羽臨鉄）は「タツイ運輸」という満州及び北海道・樺太を中心に活動する財閥の系列である。

歴史的経緯から陸軍などと結びつきが強く、軍部からの信頼も厚かった。

昭和45年3月、当該線区は発鉄に運営が移管された。だが、一部業務は未だ尾羽臨鉄が行っている。

その業務のひとつこそが、この日、大宮と三田が行っていた業務である。

さて、そこに倉庫から黒井駅に延びた専用線がある。その専用線から、貨車が尾羽臨鉄の運転でやってきた。このように尾羽周辺の貨物を発鉄で輸送する場合、まず工場や倉庫は尾羽臨鉄に連絡を取り、発鉄の線路まで引き出してもらうのだ。

そうやってやってきた貨車をつなぎ合わせて一つの列車にする作

業は、発鉄の管轄である。

使用する電車は路面電車の5000系。本来ならば機関車で行くべき作業だが、たまたまそこに居た電車で代用することはよく行われていることで、おかしなことではなかった。

大宮は運転室から尾羽臨鉄の社員へ敬礼を送る。現場での両者の関係は良好で、尾羽臨鉄の作業員も警笛と手振りで応えてくれた。

さて、連結である。貨車の状態を確認して安全を確保してから連結を行う訳であるが、その役目は三田が自ら買って出た。

こういう身体を使う作業を、年長者の女性にやらせるのは、大宮としては気が引けたわけだが、しかし先輩の言うことであるので、それに従った。

大宮は運転席で三田の合図を待つ。

しかし、これがなかなか来ない。おかしい。もしや何か異常でもあったか。

例えば、ブレーキ管が損傷を起こしている。

ブレーキ管は空気で満たされている。この気圧が一定以上になることによって、ブレーキが解除される。

反対にブレーキ管内の気圧が低くなればブレーキがかかる。

これを、自動ブレーキと呼ぶ。もし、ブレーキ管に損傷などの異常があれば、気圧が低まり自動でブレーキがかかるからだ。

故に、もしもブレーキ管に損傷があるままに運転を行えば、全開ブレーキがかかった状態の貨車を無理やり引きずることになり、それこそ車両が全壊しかねない……。

例えば、先日久留米が撃ち抜いたのもこのブレーキ管である。あの時も管から圧縮空気が漏れ出し、列車に最大ブレーキがかかり、停車したのである。この時、もし機関士がそれに気が付かず加速を続けようとしていたら、ブレーキが壊れて暴走したり、過大な負荷を受けたモーターが発火したり被害が出ていたであろう。

今回、同様の事例が発生しようとしていた可能性がある。

冗談ではなく危険なことであるので、大宮は最大限危険を回避でき得る手立てを取ろうと考えた。そのためにはまず三田と話をつけな

ければならない。

「三田さーん、何かありましたか？」

呼びかけるが、返事がない。

大宮は放っておこうかとも思ったが、そういうわけにもいかない。返事がないということは、三田に何かあったかもしれないからだ。

この時期のこの周辺は物騒である。三田ほどの美人であれば、何をされてもおかしくない。特に、あの奔放で少々あけすけな性格を知らないアカの他人であればなおさらである。

二重の意味で嫌な予感が胸をよぎった大宮は、列車を降りる決意を固めた。

この時、電車はパンタグラフを上げて通電した状態で、要するに「生きている」状態である。更に、電車は運転待機状態にある。このような状態の時の電車を突発的に無人にすることは推奨されない。だが、そうもいってられない。

仕方がないので、電車を一時留置状態にして電車を離れる。具体的には手ブレーキを動作させ手羽止めを電車にはめる等の転動防止措置をとって、それから電車を降りる。一応確認を二重に行った。

最後にブレーキの空気圧を確認する。よくあるのが、無人状態の時にブレーキ管の空気圧が自然に変化して列車が自然に動き出す「転動」という事態である。大宮は、電車が通電している状態であれば、ブレーキを制御する機器が作動している状態を保てるため問題ないと判断した。

念のためもう一度車輪に手羽止めが扱われていることを確認する。この間にも、三田が戻ってくる気配はない。大宮はますます心配になった。

電車の後ろには、数十両の貨車があった。その横を小走りに駆ける。そして連結面に差し掛かる都度、連結の状態を確かめた。その他にも何か異常がないか確認して回った。

そうやって走っていくと、貨車の奥でなにやらごそごと作業をする三田が見えた。大宮はホツとした。と、同時に何をやっているのか怪訝に思う。

大宮は後ろから三田に声をかけた。

「三田さん、どうかしましたか？」

すると、三田は飛び上がりそうなほどに驚いて振り向いた。

「キヤツ！ 大宮君か、びっくりさせないでよ」

その時、三田は何かを制服のポケットに突っ込んだ。

「三田さん、何かありましたか？」

「大丈夫よ。ちよつと気になったことがあったけど、何もなかったわ。って、電車降りちゃだめじゃない！」

大宮は怒られてしまった。だが、ちよつと不思議だった。

「大丈夫ですよ。電源は生きてるしCPは正常だし手羽止めもはめましました。転動の可能性はまあ、ないですよ」

「え、ええ。そうよね」

それを指摘されると、三田は尻切れトンボの勢いになった。大宮は、自分の中で疑念が育っていくのを感じる。

「そんなことより、確認は大丈夫ですか？」

「え？ ええ。大丈夫よ」

そして、三田はこう話している間もどうも落ち着かない。

冷や汗をかいているような、顔が青ざめているような、尋常ではない雰囲気を感じる。

「三田さん、大丈夫ですか？」

熱でもあるのだろうか。大宮が顔を近づける。

首筋が汗でじっとり濡れているのが分かる。春とはいえこの寒い季節にだ。

「ちよ、ちよつと大宮君！」

三田は顔を赤らめる。そして大宮の胸板に手を当てて大宮を引きはがしながら、顔をそらした。

「そんなに近づかれたら、好きになっちゃうわ」

三田は微笑みを浮かべながら片目を瞑った。あんまりに唐突で、そしてあんまりにも蠱惑的であったそれは、大宮の注意を吹き飛ばすには劇的に効果があった。

「んなっ!？」

あたふたあたふた……。

手をバタバタさせて慌てる大宮に、三田は背伸びをして頭を撫でた。

「ごめんね、からかいすぎたね」

「あ、いえ……」

また遊ばれた……。大宮がそんな表情をしていると、三田は大宮の耳元に口を近づけた。

「でも、嘘じゃないよ」

大宮は、魂の奥深くから上ってくる感情を処理しきれずに地団駄を踏んだ。

「まあ、大宮君の色恋話は置いておくとして、冷静に考えてみれば三田君がおかしいわけだ」

大宮も揶揄われた一瞬こそ動揺したものの、やはりその異常さが胸に残ったままであったようだ。

そもそも、三田は少々特殊な気性の女性ではあったが、このように挙動不審な態度を取る人物ではなかったのである。

体調が悪いのか、それとも何か言えない事情があるのか……。大宮はひどく心配して越谷に相談したわけだ。

越谷はこの話を桐谷と、運転課長の楠木、そして運転主任の近平に照会した。すると、三人とも異口同音に同じことを言った。

「最近の三田はおかしい」

越谷は三人に口止めと三田への不干涉をお願いし、さらに聞き込みをつづけた。

いつもの現場巡礼では、彼女に関わりのある部署の数人が彼女の挙動不審さに触れた。特に、直接かかわりのある尾羽運輸区長や南尾羽区長等が同様の証言をした。

また、一部の現業も構内で不思議な行動をする“女性社員”をよく

目撃したという。

特に南尾羽駅では、軍鉄道時代に女性駅員との人身事故が発生していたことから、その亡霊が彷徨っている……。という噂まで流れ出した次第であった。

久留米は一連の話を聞いて、疑念がほぼ確信に変わったような顔をした。

「運転課の三田さん、ですか。何か情報はおありですか？」

情報、とは、出出勤の記録や履歴書、勤務評価などである。

「ああ、すまん。何も用意していない。私から人事課に掛け合っておくかい？」

「いえ、それには及びません。あとで自分でやります。しかし……」

久留米は少し考えた後でこう言った。

「どうします？ “処分” しますか。それとも、泳がせますか」

越谷は、しよぼんとした顔になった。

「出来れば、話を聞きたい。彼らは、彼女は私の社員なんだ」

「しかし、裏切者かもしれません」

「で、あつてもだ。彼らがもし手の者であったとしても、それ以前に私の部下なんだ。双である以上、私は彼女を見捨てたくない」

英雄越谷が肩を落とした姿を見て、久留米は意外そうに言った。

「不思議です。貴方の友人を、貴方の “家族” を殺した者の仲間であるかもしれないのに」

「ああ、そうかもな。だが、それでも、だよ」

うなだれながらも、決意の籠った眼を見て、久留米は渋々ながらも承をした。

だがそれでも、久留米にはわからなかった。

「で、どうするんですか？」

人事部からもらってきた資料とにらめっこをしている久留米に、日

田井がコーヒーを淹れながら話しかけた。

「そうねえ……。役所から取り寄せた戸籍やなんかとも照合しても、別に変なところはないわ。特に偽造してあるわけでもないし……。家族に関してはまだ今度調査するとしても、資料上彼女におかしなところは見つけられないわね」

「となると……」

「考えられるのは、オトコ絡み」

久留米は出されたコーヒーをずるずると啜った。

「オトコ、ですか」

「ええ。虫唾が走るわ」

コーヒーカップを持つ手に力がこもる。日田井はその殺気に寒気がする思いがした。

「ごめんなさいね。でも、この件は私が片付けたい。もし……」

久留米は、コーヒーを一気に胃に流し込んだ。

「もし私の想像通りなら、本当に許しがたいわ。だから、慎重に行動するわよ」

「具体定には？」

日田井が問う。久留米は一瞬考えて、すぐに答えを出した。

「直接本人に会ってみましょう」

21. く第一仕業く1レ：尾羽営業所

詰所の扉を開いて外に一步踏み出したところで、三田恵子は悲鳴を上げた。目の前に、久留米が立っていたからだ。

久留米は優しい笑みを浮かべていた。とても懷中にナイフやら拳銃だのを隠し持っているようには見えない。「発鉄職員」としての久留米の姿であった。

久留米は、作戦通り直接三田の前に現れた。だが、その胸には約束が刻まれている。越谷と交わした、「三田不殺」の誓いである。

そしてわざわざ、ただの呼び出しと見紛える事が出来るように、発鉄で見せる「A面」の人格でやってきた、というのにである。

三田はおびえている。心臓が早鐘の様に打ち鳴らされている。冷や汗が吹き出て、目が回りそうだ。久留米はそんな三田に、声をかける。

「三田恵子さん。ですんね？」

その一言で三田は震えあがる。この様子をみて、久留米は三田が先日「書き換え犯」であることを半ば確信した。

久留米は三田の首筋に顔を近づけ、鼻を鳴らした。そして耳元でささやいた。

「大丈夫。貴方からは『臭い』がしない……。話を聞きたいわ。時間を作っていただけじゃないかしら？」

久留米は、これでも精一杯配慮したつもりである。いつも通りの柔和な笑み。保母のようだと言われた風体。眼元は細く垂れている。口元は淡い紅がさしてあり、顔色も明るめの色で整えてある。精一杯の、「発鉄職員・久留米千佳子」である。

だが、そんな久留米の努力甲斐なく、その雰囲気はどうしようもなく恐怖を感じるのか、三田は腰砕けになりかけながら小鹿の様に必死に姿勢を維持していた。目元には雫が浮かび、瞳はきらきらとうるんでいる。

「すみません、乗務の時間なので」

三田は必至にそれだけを絞り出す。もはや言葉になっっているかさ

え怪しい。三田は言葉と共に久留米を押しつけて外へ出ようとする。が、久留米は肩に優しく触れることでそれを止めた。

「待って三田さん。お話だけでいいから……」

「やめてー!」

触れられた三田はその久留米の手を振りほどき、その勢いをもってついに尻もちをついた。詰所の前の犬走の粗雑なコンクリートの上を、足を引きずりながら後ずさりしている。

「やめて……さわらないで……!」

その声の中に、久留米は彼女の死に対する恐怖の感情を察した。断末魔にも近い、何度も聞いた耳障りな音だ。大方、あの戦闘の行方を知っていたか、見ていたかであろう。久留米は困ったような顔を見せながら、少しづつ間を詰めていった。

その心の中では、作戦の失敗を悟りつつあった。

「そんなに怖がらないで? だって私たち、初めて会う同士で、何も知らない間柄じゃない。まずは自己紹介しましょう?」

久留米がもう一歩足を進めたところで、詰所の中から区長と大宮が飛び出してきた。

「大宮君、A36行路、三田君の代わりに入ってくれ。久留米部長、一体どうされましたか」

区長は三田と久留米との間に割り込むようにして久留米と対峙した。大宮は、仕業前の点検の為に詰所に引っ込んでいった。

「尾羽運輸区長。いえ、三田恵子さんにお話を聞きたいと思ったので……」

「すみません部長、御多忙であるとは存しておりますが、三田は少々健康が優れないようです。また次の日にしては頂けませんかね」

「ええつと、どうしましょう……」

そう言いながら久留米は懐に手を伸ばす。

これは、彼女をかばっているのか、それとも。どっちだ?

久留米は迷いながら、懐のソレに手を伸ばす。もし後者なら……。

そこに急いで出区の点検を受けた大宮がやってきた。

「久留米部長。俺は運転士の大宮と言います。差し出がましい真似で

申し訳ありませんが、今日は止してあげてください。どうやら、体調がすぐれないようです」

大宮はそう言いつつ、久留米に目配せした。

大宮……。越谷の話の中に出てきた、今回の通報者の一人である。なるほど。久留米は大宮の目配せの意味を正確に理解した。

「……そうですね。そんなに心身が優れていないとは存じ上げませんでした。ああ、大宮君、でしたね。ご助言ありがとうございます。貴方からも、今度お話を聞きたいわ」

「美人の久留米部長でしたら、いつでも歓迎ですよ」

大宮に、わざとらしくまぜつかえされた。久留米は、苦笑しながら目で合図した。大宮は、小さく頷いた。

久留米は、それで十分だと判断した。

「お騒がせしてすみません。今日のところは失礼いたしますわ」

そう言つて久留米は去る。三田は、その場で起こしていた上体を崩れさせた。

あとに残された三人は、ホッと胸をなでおろした。目の前で刃傷沙汰は勘弁だ、というのは人間共通の感情であろう。区長と大宮は目を見合わせて笑った。

その後で二人は三田をみやる。やはり、尋常ならざる気配がある。区長は何事かを言おうとしたが、越谷の指示を思い出して留まった。

「三田君、調子が悪いなら奥で休むか、今日は帰るかしていいぞ。……訳は聞かないで置いてやるから、話したくなったら話さない」

区長は代わりにそう言うと、詰所に戻っていった。

あとに残された大宮は、三田を助け起こした。三田は恐怖のあまり失禁していた。大宮はそれを見ないふりをした。

「三田さん。最近、様子がおかしいですよ。僕じゃ力になれないと思いますけど、何かあつたら僕でも区長でも社長でも、相談してくださいよ」

時計が出区の時間を知らせる。大宮はそれを見ると、三田の肩をほんぽんと叩いて走り去った。あとに残された三田は、まだ幽かに震える足で詰所の休憩室へと向かった。

「なんで、なんで……！」

三田はロツカーを殴りつけた。そこには、いつもの余裕しやくしゃくの笑みはない。何かにおびえるような、自分の運命を呪うような、そんな顔をしていた。

動悸が早まる。呼吸が早まる。目の前の視界が歪む。

三田は財布を取り出した。その財布の中に入っている一枚のスピード写真を取り出した。

その褪せた写真の中に、遠くに劇場があり、香里園の文字が見える。その前に、幸せそうな家族が佇んでいる。

母がいる。父がいる。そして、気障な顔をした兄と、その兄に抱き着く幼気な少女がいる。その少女は、まぎれもなく三田自身だった。

三田は、写真の中の彼女がだんだんと霞んでいくような気がしていた。

それと同時に、下腹部に痛みが走る。吐き気がする。この身体の全てが汚いもののような気がして、気が狂いそうになる。

首元がかゆくなる。かきむしるように絆創膏を外す。あぎを、まるでかき消そうとするかのように、こする、こする、こする。

喉元まで嗚咽が、ある種の酸っぱさと共に昇ってくる。それを必死に飲み込む。目頭がうつすらと濡れてくる。

必死に涙を貯めながら、それでも決して三田は泣かない。三田恵子。自分は三田恵子。うざったいぐらいに明るく、気のいいそろそろ婚期が危ない何事にも闊達であけすけなお姉さん。

それが三田恵子。そうでなくてはならない。

口が酸っぱくなる。三田はついに風呂場へ駆け込んだ。

なんでこんな目に合わなきゃいけない。なんでこんなことをしなくちゃならない。絶望とも怒りともとれる感情がふつつつと湧いてくる。

「助けてよ、お兄ちゃん」

三田は、写真の中の兄に向ってつぶやく。返事など、あるはずがない。

三田はシャワーの水音に隠れるようにしてか細い声で叫んだ。

「助けて、大宮君」

細かい水流が床を打つ音と、浴場の反響音だけが、無人の更衣室に響き渡る。

樺太にも、遅い遅い春がやってきた。クモリガラスごしに自然光が入るだけの薄暗い部屋の中に、トートバッグと財布が転がっていた。そして、凡そ尋常ならざる薬瓶が並んでいた。

その部屋に向かつて、今一つの足音がやってきた。

一段一段、しつかりとした足取りでやってくるそれは、まさしく「英雄」の足音であった。

英雄はやってくる。かならずやってくる。他でもない、家族を守るために……。

2.2. く第一仕業く1レ：家族学

尾羽営業所前駅。ここは尾羽運輸区・車庫に併設された駅で、列車の入出庫の他に乗務員の交代を行う。

尾羽運輸区に用がある越谷と、今から列車に乗り込む大宮とは、ここで出会うこととなった。

「大宮君、今からかい」

「ええ。三田さんの代わりで」

それから大宮はちよつと言い淀み、ひそひそ声で続ける。

「今、三田さんのところに久留米部長が来ましてね。なんだか三田さん、だいぶおかしかったですよ」

「そうか……。彼女は今どこに？」

「今なら詰所にいると思います。実は、今からの乗務は三田さんの当番だったんですが、あまりにも様子がおかしいので、予備待機の俺がスクランブルに上がったんです」

これはただ事ではない。越谷はそう思った。

列車がやってきた。二人で安全確認をする。交代の運転士は佐々木という女性だった。

大宮は、反射する運転台の窓ガラス越しにその姿を認めると、一瞬浮足立った。当然越谷はそれを感じ取ったわけだが、見ないふりをした。

列車が到着すると、大宮は乗務員窓から車内に身を乗り出して車掌スイッチを操作し、客用ドアを開けてやった。そして佐々木が帰り支度をしている間に乗務員扉を開けてやり……。と、持ち前の気が利く優しさをいかなく発揮する。越谷は思わず苦笑いしてしまった。

「ありがとう大宮君。732M、定時で異常なしです」

大宮の鼻は伸びきっている。

「732M定時了解です！ 今日もお疲れ様です、佐々木さん」

「うん。じゃあ、気を付けて行ってらっしゃい」

大宮はにつこにこの笑顔で扉を閉めると、こちらに手を振りながら電車を発車させた。これには越谷もとうとう耐えきれず、吹き出して

しまった。

「失礼……。佐々木君、だったよね。彼はいつもこんなのかい？」

佐々木は困ったような笑みを浮かべる。

「ええ……。なんとというか、こう。いい人なんですよ。大宮君は」

「それは嫌というほど伝わってくるね」

大宮、「良い奴」である。人一倍よく働くし、人一倍気が回る。

……願わくばもう少し、女性の機微についても気が回らんものかねと越谷も佐々木も思うのだが、こればかりは経験である。

「ちなみに、君としては大宮君はどうなんだい？」

大宮の「意図」を察し取った越谷は、お節介にもこんなことを聞いてみる。佐々木の反応は芳しくなかった。

「うーん、いい人なのはわかるんですが、なんとというか……。あそこまですで好意が駄々洩れだと、私としてもいかんともしがたいというか……」

越谷は胸に小さく痛みが走った気がした。かわいそうに、がんばれ、大宮君！ 心の中でそう思う。

「それに、彼が本当に好きなのは、三田さんなんじゃないかって思うんですよね」

「……それは、どうしてだい？」

「なんとというか、三田さんというときの大宮君はすごく自然体ですし、三田さんのことをとても心配していますし……」

そこまで言っつて、佐々木はしまった、という顔をした。

「ああ、三田君が変だという話は私も聞いているよ。大丈夫だ、そんなことで私は人の評価を変えない」

そう言うと佐々木は安心したのか、色々なことを越谷に聞かせた。

「普段は快闊な笑顔を見せる人で、大声で笑うし冗談も言う賑やかな人だったので、最近は苦しそうな顔をすることが多く、態度も煮え切らないことが増えてきて……。何があったのかと心配していたところなんです」

快活で賑やか。確かに、三田という人物の話を聞くとときに必ず出てくる言葉である。

「教えてくれてありがとうございます。なに、私は社長だ。必ず何とかするよ」
「ありがとうございます。そういう佐々木と別れて、越谷は詰所に入りました。」

「おお、社長！ 今日もおいでになりましたか」

詰所に入ると、新聞を読んでいた尾羽運輸区長が出迎えてくれた。

「やあ区長。先週ぶりですね」

「ええ先週ぶりです。して、今日はなにかございましたか？」

「いや、いつもの見回りだよ。何か困ったことはないかい」

「そうですね、やっぱり人員が足りんですよ。各所から散々聞いているでしょうが、しかしこればかりはねえ」

越谷は苦々しい表情になる。

「今、こちらでも方策を練っているところです。もうしばし、お待ちを……」

「ああいえ、それも聞き及んでますよ。いやはや、こつちの話を聞いてくれる人間は貴重でね」

ガハハと笑う区長に救われたような気持ちになった越谷は、他の職員にも挨拶を済ませて詰所の休憩室へと向かった。

休憩室は珍しくがらんどうだった。が、そこには三田のものと思しき手荷物が置かれていた。

「きつと、三田君を案じてみんなここに入らないように配慮したのだろう」

越谷は独り言ちると、部屋に入るのを少しためらった。自分も配慮するべきなのではないのだろうかという葛藤の末に、どうせ邪魔するなら三田にお茶の一つでも入れてやろうという結論に至った。

じやまするぞー、と小さくつぶやいてから、越谷は休憩室へと足を踏み入れた。

休憩室には、いつも静岡から特急便で運ばれてくる茶葉や抹茶が常備されている。越谷はそれを目ざとく見つけた。

越谷は流し台の下から薬缶と湯飲みを出した。薬缶に水を入れ、隣のコンロで火にかける。休憩室に一通りの台所回りがあったことは、僥倖であった。

シユンシユンと湯が沸きたったら、急須に茶葉を入れ、お湯を入れ……。クモリガラス越しに自然な明りが心地いい部屋に、良い香りの湯気が立った。

それと同じ頃に、三田は休憩室へと戻ってきた。三田は、休憩室に一人つきりで何事かをしている越谷を見咎めて、ひどく驚いた。

越谷も意地が悪く、わざと邪悪な面を作って「おいでおいで」と手招きをした。三田は涙目になって後ずさり。越谷は「こちらでやつと自らの度が過ぎた悪ふざけに気が付き、あわてて笑顔を作った。

「茶が入ったんだ。三田君、飲んでいきなさい」

飲んでいきなさいも何も、ここは越谷の部屋ではない……。喉元まで慟哭と共に上がってきた言葉を飲み込み、三田は休憩室に入った。

三田が席に着くと、そつと目の前に湯飲みが差し出された。それをどうしたものかとあぐねていると、越谷が口を開いた。

「……熱いのは嫌いかい？」

何事を言い出すのかと思えば、そんな言葉だった。拍子抜けして三田が無言でいると、越谷は台所へと向かった。

「ちよつと待ちたまえ。私はお茶の心得もあるのだよ」

そんな事を口走りながら、越谷は席を立つ。台所の下から抹茶と容器と茶筌を取り出して、神妙な顔で戻ってきた。

「では」

越谷は茶杓で器に二杯ほど抹茶を入れると、そこに水を注いだ。そこからさらに仰々しく額にシワを寄せると、シヤコシヤコと茶筌でかき混ぜ始めた。

三田がどんな表情で見つめればいいのかわからず真顔でいると、それはすぐに終わり、越谷は器を二回手で回して三田へささげた。

三田は当惑しながら器を持ち上げる。越谷の方を見やると、越谷は静かに頷いた。

三田は越谷につられて神妙な顔で器に口付けた。緊張のあまり、三田は味が分からない。が、からからに乾いた喉を潤すように一気に飲み干した。

「え、えと、見事なお点前……ですっ。」

「いや、それはよかった！」

越谷は顔をほころばせた。結局何をしに来たのだろうと、三田の疑念は膨らむばかりだ。

「さて、三田君。君に言っておきたいことがある」

越谷の言葉を聞いて、三田は身体を硬直させる。

それを見て、越谷は努めて笑顔を見せるようにして、話を続ける。「我々は、家族だ。すなわち私は家長である。から、君の全てにおいて、私が責任を取ろう」

三田はうつむく。その垂れた頭（こゝろ）に向かって、越谷は論し続ける。

「すなわち、君が何ごとかを行い治安維持機関が出勤し、そして君の命を狙ったとしても、首が落ちるのは私だということだ。もつとも、この帝都戦線（ロ）帰りの私が、簡単に首を落とされようもないがね！」

ガハハ。そんなわざとらしい乾いた笑いが静かな部屋に響き渡る。

越谷は咳ばらいをひとつ、そして話を再開した。

「そして私は家長であるから、君を守る責任がある。だから必ず私は君を守ろう」

その言葉に、三田はやつと口を開いた。諦観ともとれる口角をもつて。

「男の人って、いつもソレ、言いますよね」

歯がギリリと音を立てる。美しい口元が歪む。

「昔付き合ってたボーイ・フレンドも、死んだ父も、兄もそう言いました。でも、守ってくれたことなんてなかったですよ。最後には決まって、私を殴るんです。『お前が悪いんだ』って」

髪の毛が頬を伝う。突如として露わになった首元（アザ）に、真新しい痣が見える。

「男の人は信用できません。たとえそれが、『大英雄』越谷卓志」だとしても。私は、自分しか信じません」

その言葉を聞いて、越谷はしばらく押し黙った。何かを言い出そうと口をパクパクと注せていたが、しかし諦めて口をつぐんだ。

越谷は、静かに席を立った。椅子のきしむ音が響く。

「君の境遇を、甘く見ていたようだ。こちらの認識が甘かった。すま

ない」

越谷は頭を下げた。三田は驚いて見上げた。その三田に、越谷は頭を下げたまま、続けた。

「久留米君には、何があつても君を守る様に命令している。これは、海軍情報局の命令を超越するものであると認識している。海軍情報局員が君を保護している限りにおいて、各機関は君に手出しできない。だから……」

越谷は短く息を吸い込んで、一息に言い切る。

「どうか、久留米君だけは信用してほしいと思う。それか、同僚の佐々木君か……。男だが、大宮君なんかもいい奴だ。もちろん、区長や主任、運輸部長も。この鉄道ではみな家族だから、君の知っている家族とは違う形の家族であるから、彼らだけでも信じてやって欲しい」

越谷は大きく息を吸う。上体を起こして、三田と目が合う。越谷は頷いてから、休憩室を後にした。

三田はすっかりぬるくなつた湯飲みを手にした。

茶の表面がキラキラとひかりを反射している。窓が、窓辺に置かれた小物が、部屋の中が鏡の様になつた水面に反射されてよく見える。三田はそれを覗きこんだ。すると、自分の陰でひかりは見えなくなつた。

代わりに、ぐるぐると回る無数の緑が見えた。

まるで私みたいだ。三田のつぶやきと共に、一滴が水面に垂れた。

ちやぽんと波紋が生まれて消えて、緑は更に、そのさざめきの具合を増した。

23. く第一仕業く1レ：ワキ8000

「そんな約束、した覚えはないですけどね」

越谷が詰所から出ると、久留米が立っていた。気が付かないうちに雨がしとしとと降り始めていて、犬走のコンクリートがうつすらと湿っていた。

「聞いていたのか」

トタンの屋根に雨粒が落ちる。その音に隠れるようにして越谷は話す。

「最近の收音機は優秀なんです」

久留米は優しく笑う。無邪気な笑みだ。越谷は苦笑いするしかなかった。

「まあ冗談はさておき、どうでしたか？」

「首元に痣があったよ。そして、酷く男におびえていた」

越谷は思った通りの事を伝える。久留米は得心したような表情を見せた。

「もしかしたら私の読み通りかもしれません。彼女は男に脅されているか屈服させられている状況下にある。という可能性が強い、と言えるんじゃないでしょうか？」

断定せずに彼女は次々と言葉を並べ立てていく。越谷は違和感を覚えつつも、それを肯定した。

「ああ、そうだと思う。さて、海情としてはどうするつもりだい？」

「うーん、ともかく、彼女は保護の方向性であるような気がします。なぜなら、彼女は場合によっては協力者になってくれる可能性もありますし、また現在進行形の被害者である可能性もありますから、そうしなければ彼女は保護すべき国民です。しかし……」

久留米が言葉に詰まる。そして、慎重に言葉を選んでつづけた。

「最悪、彼女の被害者性が証明できなければ、残念ながらそれらの考慮はされないでしょう」

「表面」のまま諜報を語る久留米に戸惑いつつも、越谷は返事をする。

「そうか……」

久留米は更につづけた。

「大事なのは、予防です。これで彼女が協力を辞めてくれれば、万事解決します。荒事もしなくて済みますしね」

その一言に、越谷は寒気がする思いだった。

「久留米君、風邪でもひいたかね。それか、少し疲れているんじゃないか？」

「いえ……。どうしてそう思われたのですか？」

「変じゃないか。君が『荒事を避けたい』なんて言い出すのは」
そう言うと、久留米はきよとした。

「何故ですか？ 荒事がない方が、良いことじゃありませんか」

「ま、まあそれはそうだが」

正論である。だからこそ越谷は違和感がぬぐえない。話し方といい、思考といい、言葉に表しかねる不整合感に越谷は戸惑いを隠せない。

「三田君の身边はどうなるんだ？ よく日本の調査組織はそういった無辜の被害者を保護しないと批判されているが、海情として保護などは……」

「おっしゃる通り、組織的には行わないんじゃないかと私は思います。しかしながら、彼女は守られるでしょう」

久留米は微笑んだ。

「約束、事後承諾ですがお受けしますよ。久留米千佳子が彼女を保護します」

「それはありがたい。私をウソつきにさせないでくれよ」

「問題ありません。久留米千佳子は必ず彼女を護りますから」

今度は断定形だ。だが、その言葉尻にやはり越谷は強烈な違和感を覚えるのである。まるで、久留米が二人いるような、そんな錯覚にとられる。越谷は確認するように問いかける。

「久留米千佳子は君だろう」

「ええ、私です。ですが……」

久留米は、何かを言いかけて首を振った。その代わり、哀しそうな

顔を見せた。

「久留米千佳子は、彼女が置かれている境遇を許しません。今言えるのは、ただそれだけです」

そう言うと、久留米は髪の毛をひとつに束ねた。

「そう。私は赦さないんです。絶対に」

「B面」の彼女が現れた。これではつきりした。これは、彼女の恐るべき二面性だなんてちっちゃな言葉で表されるべきものじゃあない。越谷は湧き上がってくる感情を抑えきれない。

「いったい、君は……」

君はどうして、一体君に何がったのか。そこまで出かかって、越谷は感情と共に昇ってくるその言葉を喉元で押しとどめた。

「いや。何でもない。ただ、もし君が話したくなったら、その時は聞かせて欲しい」

君のソレは、一体何なのかを。

越谷の言葉に、久留米はそつと答えた。

「ええ、お話しますよ」

雨が彼女を濡らす。髪の毛から頬を伝う雨雫をぬぐって、彼女はつぶやいた。

「全ての敵を倒した、その後で」

雨は、どんどん強くなっていく。久留米はその雨の中を、傘もささずに歩き去った。

夜の操車場。目の前に貨車がある。

その貨車は黒色。透き通った樺太の夜空と同じ色をしている。

貨車の名前は、ワキ8000。車体には白い文字でワキ8563と書かれている。

ワキ8000。樺太用に設計された特急貨物・特急荷物用客車である。

最高速度は樺太特例により160km/h。車体にはまるで天の川のように、白いラインが引かれている。紛れもない、樺太用高速貨車の証だ。

今、EF69形電気機関車2両を先頭としてタキ51000が8両連なっている。その後ろに材木輸送用のトキ2500やビール輸送用のワキ3010、宅扱使用のワキ3500が連なる。そしてその次に、ワキ8563は連結されていた。

ワキ8563は高速の小口輸送用貨車である。それと同時に、特急荷物列車の荷物車も兼ねる、新世代型の汎用高速客貨車であった。

国鉄所有の有蓋車であり、また用途も小口輸送であるから、一般の工場や倉庫などには足を踏み入れることのない貨車である。

専ら、特急貨物にくっついていたり、若しくは客車特急列車や荷物列車にくっついて荷物輸送に従事していたり……。まさに気高い本線級の貨車である。

そんなワキ8563に向けて、闇夜に紛れて幾人かが歩み寄ってきた。彼らは腰にトカレフを備え、何やら大荷物を運んでいた。

リーダーらしき男が合図する。すると、一人の女が貨車のカギを開けて戸を開いた。中はがらんどろである。それもそのはず、女の情報によつて、この日のこの貨車には荷物が無いことを、事前に知らされていたのだ。

彼らは大荷物をワキ8563に詰め込む。そして、ゆっくりと扉を閉めた。

女が鍵を閉めようとする。その時、男が女の耳元に口を寄せた。

「しくじるんじゃないぞ」

女は、震えながら頷いた。

「よし、山里と梶井の班は南港根拠に戻れ。石橋と谷村の班は中央根拠に移動する。清藤は俺についてこい」

男たちは小声で指示を飛ばし合うと、そのまま女を置いてきぼりにしてどこかへ行ってしまった。

男たちが去つてくと、女は鍵を閉めてその場にへたり込んだ。安堵のため息か、胸を突き刺す痛み故の浅い呼気か。小さく白んだ空気が

もわもわと口から立ち上る。

女は、いや、三田恵子は、暗闇の中で一人、葛藤と戦っていた。男からの指令は一つ。この貨車の番号を書き換えること。

ワキ8563。この4ケタの数字の一番最後をペンキで塗りつぶす。すると、ワキ856になる。こうしてやると、軍用貨車のワキ800と見分けがつかなくなる……。と、彼らは踏んでいる。

三田の手元には、それを成しえるだけのペンキが用意されていた。この暗闇の中じゃ、警吏に見つかる心配もない。三田はハケに手を添えた。

だが、本当にそれでいいのだろうか。ハケを手に持ったまま、三田はずっと考えている。

頭の中で、久留米の言葉が、越谷の言葉が、そして佐々木や運転手たち、区長、主任、桐谷運輸部長……。そして、大宮の顔が渦を巻く。

もし失敗すれば、いや、これをやらなければ、自分もつと酷い扱いを受けるはずである。それは分かっている。

だが、もしかしたら……。心の中に芽生えた一筋の光明のようなものが、三田の手先を鈍らせる。

「どうせ、ワキ800とワキ8000じゃ、車体構造が違いすぎる。ごまかせっこないよ」

だから、もし失敗したとしても私の責任じゃない。三田は言い聞かせるようにつぶやく。

「私は悪くない、私は悪くないんだっ……!」

そのまま三田は、ペンキを線路にぶちまけた。もう後戻りはできない。

三田は逃げるように走った。肺一杯に冷たい空気が流れ込んできて喉が爛れる様に痛い。動悸がどんどん激しくなっていくって、腰に力が入らなくなる。

眩暈がする。暗闇の中で、今いったいどこを走っているのかわからない。まるで漆黒に手招きされているかののように、後ろへ後ろへ引つ張られている気がする。

やっと見えた明るい場所で、三田は目の前の焼却炉に、ペンキを入

れていたバケツとハケを衝動的に放り込んだ。その瞬間、汗がどつとあふれてくる。

「私は悪くない、私は……」

だから、誰か助けて。そんな声にならない声は、白い吐息とともに空に消えた。

24. く第一仕業く1レ：先行

さて、うだつの上がない公安員が苦し紛れに編み出した作戦は、「鞍上ジョックの騎手キヤー作戦」と銘打たれ警察庁公安部、樺太庁警察特殊部隊の裁可を得るに至ってしまった。

とある公安員は頭を抱えた。こんなはずではなかった、と。

しかし、案ずるなかれよ公安職員。ジョッキ作戦は上申され下達される度に、樺太庁警察、ひいては樺太中の殺意、もとい熱意を乗せて、その確実性を増していった。

と、貨車潜入隊隊長の柴田は豪語する。

柴田の言によれば、作戦は3＋1段階に大別される。

第零段階。

前提として、密輸貨車の発見が必要である。密輸貨車を発見次第、早急にそれを保護、関係各所へ伝達。

第一段階。

貨車乗り組み班は速やかに貨車に乗り込む。そして、貨車内に潜み敵本拠へ運び込まれるのを待つ。

第二段階。

貨車が輸送される。追跡班がそれを密かに追う。

各主要駅に散開した中継班が列車を定点で観察し、こちらでも貨車の動きを追う。

そして、敵本拠へ貨車が運び込まれるのを待つ。

最終段階

貨車が運び込まれた！

潜入隊は貨車の中から強襲。

それを合図に樺太庁特殊部隊即応班、応援部隊は追跡班の誘導を得て現場へ強襲。

これをもって、敵の掃討は果たされる。はずである。

果たして、作戦はつつがなく実行された。

6時23分、密輸貨車ワキ8563が発見された。特急貨物列車第2060列車、17両編成で軍事貨物は無し。密輸貨物は当該列車の11両目であった。

荷票は浜農線来への回送扱い。途中、農線来で浜農線来行配497列車に連結されると記載されていた。

この密輸を発見したのは公安職員。出発前の検索で一両一両貨車を確認していたところ、11両目に連結されたワキ8563の中に大量の不審物が積載されているのを発見した。

不審物の内容は、銃火器に鈍器、爆発物等々。申請の書類などはなく、また鉄道局への問い合わせでも当該輸送における情報はなかったことから、これらの貨物は関係鉄道社局に無断で積載された、密輸貨物であると断定された。

その情報は即座に樺太庁警察特殊部隊に伝達され、隊長柴田率いる潜入隊は直ちに貨車ワキ8563へ乗車した。

貨車ワキ8563は幸いなことに、荷物列車や急行列車などに使用されるワキ8000系列の貨車であった。荷物列車や旅客列車併結車として運転されることを考慮してか、車内は若干の居住性を保っていた。

この幸運に際し、隊長柴田は今作戦の成功を確信した。

密輸貨車ワキ8563を連結した第貨2060列車は、中に息を殺して潜む隊員たちを乗せ、定刻から十分遅れて尾羽を出発。

途中、ワキ8563を含む後部三両を農線来で解結。そのままヤードに運び込まれた。

ヤードでは、係員が列車の編成をバラし、荷票の指示に従って編成を組みなおす作業を行う。

密輸貨車ワキ8563においては、組み換え待機中に作業員による荷票の差し替えが実施された。本来であれば即座に作業員を逮捕すべきところであるが、今回は潜入捜査であるため作業員に対しては軽い尾行で対処することとなった。

さて、荷票を差し替えられた貨車は入替の果てに、新たに落石行普通貨物6692列車に組成された。

この後、同様のことを各駅で繰り返す。

落石にて樺太西本線本斗行普通（混合列車）532列車、本斗から樺太西本線真岡行普通貨物521列車、真岡から大泊行配給590列車、これらを経て小沼操車場へ到着し、樺太東本線下り貨物7881レを経て栄浜へと至った。

この間、約27時間。

栄浜で、貨車は専用線へと入り、人気のない倉庫へと至る。潜入隊、追跡隊共に、倉庫を敵根拠地と認める。

攻撃命令、下達。

さて、貨車はなんの疑いもなく敵根拠へ入線する。

何も知らぬ敵が笑いながらやってきて、貨車ワキ8563の扉に手をかける。そして、開かれた。

刹那、清州カービン昭和サンパチが火を噴く。

潜入隊は不意打ちの一斉射で、倉庫備え付けのプラットホームに居た敵を一掃。内部への侵入経路を確保。

その間に追跡隊、現地応援部隊、現着。

それぞれプラットホームで待つ潜入隊と合流。合流強襲隊となる。

次いで内部へ侵入を開始。

10時14分、プラットホームと一体となっている第一倉庫（主倉庫）制圧。隣の第二倉庫へ向けて転進。

10時16分、後退した敵主力が第二倉庫から反攻を開始。重機関銃などを使用した統制射撃により進撃困難。

10時21分、第二次応援部隊現着。機関銃陣地へ鎮圧用迫撃砲弾発射。有効打となり、合流強襲隊は第二倉庫へ進撃。

10時34分、第二倉庫主力部隊無力化。

11時02分、事務所含めた全ての関連施設を制圧。

以上で樺太庁警察特殊部隊は作戦を終了。隊長柴田は高らかに宣言した。

「全施設の制圧を完了。現時刻を以て作戦は終了する。諸君、よくやった！」

当該無線は、尾羽に屯する海軍情報局尾羽支所の面々も当然ながら傍受していた。

スピーカーから状況が伝わってくるたびに、場の空気がどんどんと冷えていく。

冷媒は、もちろん久留米。

「久留米君、そろそろ機嫌を直したまえよ」

そう言われて、久留米は頬を膨らませる。

「まさか、公安が先に貨車を見つけるなんてなあ」

ここ最近、公安は密輸貨車を発見できていなかった。それは、密輸貨車が軍の管轄である軍用貨車に偽装されていたため、公安の捜査権が軍の管轄にまで及んでいなかったためである。

であるから、ここは軍用貨車に対し捜査権を得る予定であった海情が高確率で貨車を発見できるようになる……。はずだった、まさにその矢先である。

「今回に限って、軍用貨車への偽装がなされなかったのでしょうか。きつと。まあどちらにしろ、公安の、いや、樺太警察の威信をかけた大勝負が、功を奏したということですよ」

「いいことじゃないか。これでまた一つ、樺太が平和に近づいた」

鵜沢は久留米からの視線を新聞で遮りながら、煙草片手にそうつぶやいた。

「ああもう、納得できない！ せっかくの、せっかくの、ああ！」

久留米がその長い髪を振り乱す。

「これはきつと、コミンテルンの陰謀よ！」

また始まった。鵜沢は頭を抱える。タイミングがいいことに、久留米の怪気炎と共に卓上の黒電話が鳴った。鵜沢はこれ幸いと久留米の御守りを「参謀」に押し付けて電話に出る。

「だいたいね、久留米くんね。君ね、コミンテルンってね、何か知っているのかい？」

「諭す」仕事になると途端に「ね」が多くなる参謀。久留米は自分があやされているのを感じて更に機嫌を悪くさせる。

「あれですよ、悪い奴らです。悪い奴らの首謀です」

どうしようもない答えが返ってきて、参謀は目を白黒させる。

「君ね、大学まで出たんだからね、物事は正しくね……」

「関係ない！ 私の邪魔をするのは悪い奴、悪い奴はコミンテルン！」

こうなった久留米は話が通じない。

「ああああ、これが東京の写真学校を出たエリート言うことかい。いかい日田井。ああはなっちゃんかぞ」

「任しといてください。そんなにいい学校を出ていない僕ですが、この件に際しコミンテルンが1ミリも関係していないことだけは理解できています」

うるさいうるさい！ 暴れる久留米に、電話を終えた鵜沢が苦笑いしながら声をかけた。

「まあまあ久留米君。そんな欲求不満な君に、いい話があるよ」

久留米の砲声が止む。きよとんとした眼で鵜沢を見つめる久留米に、鵜沢は面白そうに告げた。

「現地を搜索していた公安が、敵の本拠地につながる情報を入手したそうだ」

久留米は一気に黙り、ガタンと席を立つ。その様子が可笑しくて呆れた鵜沢は、半笑いのまま久留米の目を見据える。

「いや、すまない。いつもの君らしい表情になったね。さて、公安からの要請だ。今から敵の本拠を討つてくれ」

「ごくり。久留米が息をのむ。」

「敵の本拠は、どこですか？」

鵜沢はペンをどんツと下に指した。

「ごこ、尾羽だよ」

途端に、久留米の顔から邪悪な笑顔がほころんだ。

「なるほど、行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

試9051M【臨時一番外編】 果てのトロツコを求めめる人々

増穢ましげがる軽便交通。その名前を聞いたとき、宇佐美はひどく驚いた。「私は、その鉄道を見に、東京から来たのです」

目の前の男がそう言いだして、宇佐美はさらに驚いた。あれは、そんな遠くから見に行くようなものに見えなかったからだ。

ことは、一人の男が尋ねてきたことから始まった。

ある日の昼下がり。市役所の観光課からその男がたらい回しにされてきた。

久留米が応対すると、彼は東京からはるばる尾羽まで観光にやってきたらしいことを言った。

しかし、久留米では要領を得なかった。久留米は鉄道会社に勤めはいるが、別に鉄道会社の人間ではないのである。

彼女の本性は軍部から派遣されてきた海軍情報局の諜報員。彼女にとつて、鉄道の込み入った話はその能力の範囲外の事柄であった。

そんな久留米の代わりに、絶賛暇を持て余していた宇佐美が応対したというわけだ。

そこで、宇佐美は驚くべき言葉を聞いた。

「増穢軽便交通を見たいんです」

最初、宇佐美は何かの聞き間違いだと思った。

まず、増穢軽便というのは確かに存在する。尾羽から隣村の小湾村を結ぶ鉄路である。

増穢というのは、小湾村の旧名。古く江戸時代に日本人で初めてこの場所を訪れた岡本勘輔によって名付けられた村だ。

現在は林業などが行われているその村とを、その小さな鉄道は結んでる。

宇佐美が驚いたのは、まず、その鉄道が本来ならば「誰も知らない

はず”であったという点である。

この鉄道は正式な特許を得ていない、いわゆる勝手鉄道であった。そして、同じ勝手鉄道でも、大きな地方公共団体、すなわち北海道庁が整備する殖民軌道とは違い、個人有志が指摘に運営管理を行う鉄道であるという特性を持つ。

そのため、彼の鉄道に関しては半ば黙認の形で存在が続けられていた。であるから、この尾羽に住まう人々でさえも、その存在はほとんど知らないのである。

それを、東京人が見に来た、というのだから驚きだ。もつとも、宇佐美が個人的に知らないだけで、市民は存外にこの鉄道のことを認知しているのかもしれないが、もしそうだとしたら宇佐美にとっては二重の意味で衝撃である。

そしてその次に、宇佐美にとってその鉄道がそんな価値のあるものに見えなかったというのがある。

ただ、ちいさな機関車と貨車が何もな草原や森の中を行ったり来たりしているだけである。

そもそも、宇佐美にとって鉄道は都市を構成するインフラであり、都市の開発において戦略的に活用すべき“道具”である。それに対し熱中するという行為の意味が分からない。

であるから、東京の人間がわざわざここまで見に来るほどの価値がある、というのが衝撃であった。

「私が言い出したことで大変恐縮ですが、やはり、たかが鉄道のためにこの尾羽まで来る人間がいるというのは衝撃です」

宇佐美の言葉に、それを後ろで聞いていた越谷が賛同した。

「宇佐美君の提案は、鉄道を目当てでやってくる客を利用して沿線に対し呼び水効果的に鉄道を利用しやすい環境を整えよう、であったな。確かに、これを達するには鉄道を目当てにわざわざ尾羽くんんだりまでやってくる物好きが一定数必要なわけだが、まさか本当にいるとは。なんだか、確信が持てそうだよ」

「しかし、その増穢軽便、とはどのような鉄道なのですか？」

その鉄道があまりにも魅力的すぎるだけでは？ と瀬戸は言いたげだ。

「増機軽便交通。道路扱いで運行されている勝手鉄道ですが、実は歴史は古いんです。どのくらい古いかというと、北樺太ソ連時代にさかのぼります」

その言葉に久留米がひどく驚いた。

「ソ連!? まさか……」

「そのまさかで、実は、この鉄道はソ連によって建設された鉄道なんです。オハルモスカリヴォ鉄道。軌間もソ連標準軌の1520mmでの建設でした」

「え、ソ連軌だったのか。それはびっくりだ。ソ連軌の鉄道が、まさか日本領内あつたなんて」

「国内では世界標準軌、うなわち1432mmより広い軌間の普通鉄道を見つけることは至難ですからね。まあですから、そういうのが珍しいという視点はあるでしょう」

なお、現在は日本標準軌に改軌されています、と宇佐美は付け加えた。

「小さなトロッコが、森や湿原をトコトコ走るだけの鉄道ですよ」

「いやしかし、それは観光路線として面白そうだな」

人はみな、尾瀬に行きたがるだろう？ それと同じじゃないかと、越谷が言う。

「尾瀬……? なんです、それは」

宇佐美の一言に、越谷は仰天する。まさか、自分だけ……? と思いつつ後ろを振り返ると、幸谷もすっかりと仰天していた。

「オイオイ、本当に知らないのか?」

「え? ええ。そんな有名なところなんですか?」

「言うだろう? ☒夏が来れば思い出す。春かな尾瀬、とおい空」

越谷がそう節を回すと、珍しいことに幸谷も歌い始めた。

「☒……霧の中に浮かびくる、優しい影、野の小径。ええ、有名な歌だと思っていましたか……」

そこまで言って、宇佐美が思い出したように手をたたいた。

「ああ、たまに聞くあの歌、尾瀬って言っていたのか。へえ、そんな観光地があるんですか」

「尾瀬は有名だと思っていたなあ。いやしかし、これも関東人の驕りかもしれない」

「尾瀬ぐらいいは日本人全員知っていてほしいですがね……」

「ともかく、湿原や原野というのは、見たがる人が多いということなのだよ」

「へえ、そんなもんなんですね」

「あんなの、そこらじゅうで見れるじゃない。これには、越谷も返す言葉がなかった。」

「しかしそうか……。意外と面白い鉄道だったんだな」

「風光明媚な景色の中をトロツコが走る、という光景は長閑でいいかもしれないね」

「それに鉄道趣味としても面白いと来た。さあ大変だぞ桐谷君。我が鉄道はこれに勝てるかね？」

越谷が少しおどけてそういうと、桐谷は胸を張った。

「もちろん。我が鉄道だって負けてませんよ」

「ほう、具体的にはどこが？」

幸谷が心底信じていなさそうな顔で続きを催促した。桐谷はむっとした顔をしながら話を続ける。

「例えば、軌道線だ。路面電車区間を大型の電車が走る、というのは非常に珍しい」

「そうなのか？」

「そうだとも。本土だと、名古屋鉄道や関西急行電鉄ぐらいでしか見ることができない」

「それ、普通に珍しくないのでは……？」

瀬戸が何事かを言ったが、桐谷は無視して続ける。

「そして、路面電車区間を貨物列車が走る。軍工場や関連工場からの貨物列車が日常的、それもかなりの頻度で路面電車区間を走る。特に南港線なんかしよっちゅう見ることが出来る。これは好きな者にとっては堪らないだろう」

「それ、日光軌道でもやっているだろう」

「待て。こちらは国鉄大型機関車が多彩な貨車を運ぶ。時には軍事物資、例えば戦車やなんかを運んだりする。こちらのほうが面白いはずだ」

「そうなのかねえ……」

幸谷は釈然としない。桐谷はお構いなしに話を続ける。

「そして、尾羽温泉駅へ向かう多彩な配給列車を見ることができるとどういうことだ？」

越谷はちよつと意味が理解できず、桐谷を問いただした。

「尾羽温泉駅では広大な側線群を利用して、樺太で発生した不要鉄道車両の解体などを行っているんです。なので、特に南部のほうから多種多彩な列車がやってきます。この間も大正時代の客車をつなげた列車がやってきていました。そういう列車が走ると、やはり撮影者が多いですね」

越谷はやつと意味が理解できた。

「鉄道目当てで、わざわざ尾羽へやってくる。我々には少し意味が分からんが、我々の鉄道に対し少しでも興味、そして好感を持ってくれているのなら、うれしいことだな」

「それはそうですね。ぜひぜひ、まずは市外の人に気に入って、そして使っていただいて。そしてその次は市内の人に……。ですね？」

「ああそうだ。ここは『マニア』の人たちの力をお貸しいただこう」

越谷はそう言って頷いた。

「そのためにも、こちらも頑張りませんとな」

「おい、桐谷。予算は出さんからな」

「ケッ！」

二人の『喧嘩漫才』に笑いが起きる。

発鉄は、今日も微速前進。しかし、着実に前へと進むのである。